

187

189

恋歌

三行五

衣坊歌

古今和歌集評釋

第四

金子元臣著

古今和歌集評釋 第四

東京 明治書院

古今和歌集卷第十三

戀 三

やよひのついたちより、あつたのびに、人に物をいひて、
に、雨のそぼふりけるに、よみてつかはしける

在原業平朝臣

おきもせずねもせでよるを明しては春の物とてながめ暮しつ

(釋)やよひの云々 ついたちより、打聽一本に、ついたちはかりとあるよし。物を、一本、物らとあり。物をいひては、男女の語らひをなすをいふ。そぼふりは、シヨボクと降るをいふ。この詞書は、伊勢物語に、「昔をそこありけり。奈良の京ははなれ、この京は、人の家未だ定らざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。形よりは、心をむまざりたりける。ひとりのみにもあらざりけらし。それを、かのみめ男、打物語らひて、かへり来て、いか、思ひけむ、時は彌生のついたち、雨をそぼふるにやりける、」と見えたり。景樹曰く、この詞書は、勢語の文を抽き入れたるにて、尤も拙し、紀氏の文は、勢語の企て及ぶ所にあらず、さ



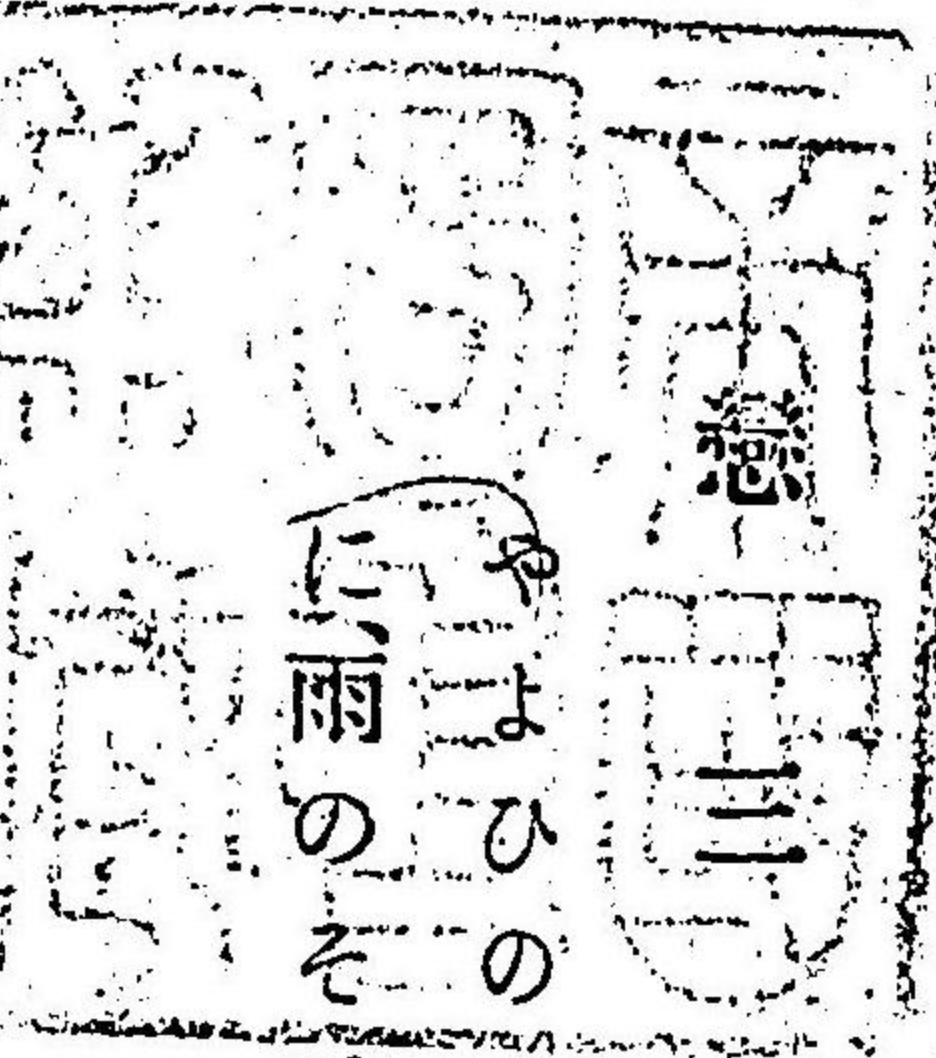
本朝の佳者

古今和歌集卷第十三

東洋印刷

古今和歌集卷第十三

おきよきすねもせでよるを明しては春の物とてながめ暮しつ
(釋) やよひのついたりより、あひのびに、人に物をいひて、
に、雨のそぼふりけるに、よみてつかはしける



在原業平朝臣

明治 14 年 9 月 14 日 内交

あり。物をいひては、男女の語らひをなすをいふ。そぼふりは、シヨボクと降るをいふ。この詞書は、伊勢物語に、「昔をここありけり。奈良の京ははなれ、この京は、人の家未だ定らざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人にはまされけり。形よりは、心むまさりたりける。ひさりのみにもあらざりけらし。それを、かのみめ男、打物語らひて、かへり来て、いか、思ひけむ、時は彌生のついたり、雨そぼふるにやりける。」と見えたり。景樹曰く、この詞書は、勢語の文を抽き入れたるにて、尤も拙し、紀氏の文は、勢語の企て及ぶ所にあらず、さ

るに、この文、勢語に劣れること論なし、紀氏にまがへて見るは清旨なり、こは題えらすの歌なるべし、集次も、不逢戀なるべきなり、この詞書ありては、逢戀の意になれりと。紀氏の文は勢語の及ぶ所にあらずと、一概に論じ去れるは、や、偏断に失すれども、この詞書に就いての説は、いはれたるが如し。○春の物とてながめくらしつ　ながめは、長雨ナガメに詠ナガめをかけたなり。長雨は、花發風雨多などいひて、暮春の頃など降り勝なれば、春の物とてといへり。詠めは、長目の義にて、物思しつゝ、見ることもなしに、物を見詰むる貌なり。一首の意は、物思に亂れて、夜の目も合はず、さればとて、起き上りもせず、又眠もせず、やうく一夜を明しては、ヤレ嬉しやと思ふに又、晝は晝にて、この節の春の物とていふこと、降る長雨に、一日詠めをして、辛氣に思ひ暮したワイとなり。

(評)編次のさまを思ふに、意は不逢戀なるべく、さて、その女の許に贈りけるものなるべし。夜もすがら輾轉反側して、物を思へるが、かくても夜の明けなば、物に紛れて、思の慰む事もやと、漸く待ち明したるに、又折柄、空打懸りて、雨さへ降れば、一日を詠めくらしせる、如何なる心地かせまし。かく晝は晝にて、物思をすることの生憎なる趣、三句のてはの助辭に依りて、表出せらる。等閑に看過すべからず。終日終夜、日を経て思ひ戀ふさま、戀一、

あけたてば蟬のをりはへなき暮しよるは晝のもえこそまされ
と、略同趣にして、これは、修飾に、春雨を用ゐたるが差へるのみ。猶、その條にいへるを参照せよ。筆路縦横、更に窘束の態なし。施として可ならざるはなき朝臣の手腕見るべし。

又云ふ。戀愛は、人間本能の發動なり。まかも、羞耻の念、これに伴ひ、又は、社會との衝突を顧慮して、多く秘密の黒幕を蔽ふ。故に、その千般万態の情緒を歌ふに、或は諷し、或は託し、或は比喩し、或は寄興す。戀歌に幽婉を尙び、露骨を厭ふは、また、事情の自然に出づ。只餘に奇巧に馳せて、眞摯の情を失はざるを程度とす。然るに、本集の歌、往々、その本を忘れて、徒に語言の末に拘るものあり。そは、縁語の修飾、及びいひ掛けの濫用これなり。縁語の濫用は詩味の範圍を縮小し、用語を制限して、千篇一樣ならしめ、いひ掛けの濫用は、秀句に墮ち、滑稽に流れて、簡淨の妙はたづぬべからざるに至る。本集の戀歌、貞觀元慶以往に屬すべき、詠人まらずの歌の、大概高調にして、以後の多く卑靡振はず、剪裁厭ふべく覺ゆるは、職としてこれに由る。以下三四五の三卷、この弊また滔々たり。一々に贅せず。

業平朝臣の家に侍りける女の許によみてつかはしける

としゆきの朝臣

つれづれのながめにまさる涙川袖のみぬれて逢ふよしもなし

(釋)業平朝臣の云々 伊勢物語に「昔なまあてなる男の許に、むたちありけり。それを内記なりける藤原敏行といふ人よばひけり。この女、顔かたちよければ、未だ若ければ、文もをさくしからず、詞もいひしらす、况や、歌はよまさりければ、かの主人なる人、案を書きてかゝせてやりけり。めで惑ひにけり。さて、男のよめる」と詞書して、この歌をあげたり。○ながめ

詠めに長雨をかけたること、上に同じ。○涙川 地名にあらず。

一首の意は、打續いて雨の降る頃は、徒然あるにつけて、いよ／＼戀しさがまさつて、長雨といふ名の詠めをする爲に、水嵩の増る涙の川に、袖ばかり濡れて、逢ひたうても、逢はれさうなる模様も無いワイとなり。

(評)霖雨の徒然には、外に氣の紛るべきくさはひかければ、思ふ事ある人の、いよ／＼堪へ難き頃はひかるべし。涙川は、長雨に水増る縁もて涙に誇張の譬喩を用ゐて承けたるのみ。故に、川は主眼の字にあらず。さるを、これに拘泥して釋ける、眞淵、宣長等が誤を襲ひて、藤井高尙が、長雨には、川の水増して深くなれば、渡らむとしても、袖を濡らすばかりにて、渡るべきやうなきをもて、一うたの詞を仕立てたるなり。思ふ人に逢ふことを、川を渡るに喩へたること例あり。

といへるは、整なり。逢ふよしもなしの結句、万葉に、數多語例あり。

四句、伊勢物語、六帖、家集等には、袖のみひちてとあり。この方、聲調よろしくや。且、次の返歌に、「袖はひづらめ」とあるに合せても、本文の、ぬれてとあるは、非ならむ。

かの女にかはりて返しによめる

なりひらの朝臣

あさみこそ袖はひづらめ涙川身さへながると聞かばたのまむ

(釋)かの女云々。この詞書の書きさま拙し。勢語には、「返し、例の女にかはりて」とあり。思ふに、もとは、返しとのみありけむを、勢語によりて書き加へたるものならむも知るべからず。景樹曰く、上の歌の詞書は「女の許によみて遣しける」とのみありけむを、勢語によりて、業平云々の語を入れ、この返しも「よみ人まらず」なりけむを、業平の名を署せしならむ。この次なる「徒に行きては歸る云々」の歌は、詠人不知なるを、勢語には「在原なりける男」と、業平めかせたるなど、いろ／＼に繰れるものなりといへり。○あさみ 浅みなり。みは、サニ、又、クテと譯すべき、副詞法の助辭なるやうに、眞淵以降の註者は解したれど、猶、舊註、及び契沖、雅嘉等の説の如く、形状体言と見む方穩しからむ。

一首の意は、貴方は、袖ばかり濡るゝと仰せやるが、一体河水の浅い處こそ、渡りなどして、袖は濡るゝであらう、されば、涙川が、そのやうに浅い事にては、憑みにはなりませぬ。袖が濡るゝばかりか、貴方の御身までが流るゝと聞きませうならば、それは深い涙川で、御思の程もさこそ存じて、憑みに致しませうワイとなり。

(評)長き袖の、水に漬きて、徒渉すばかりの水は、浅きに定まりたれば、

廣瀬川袖つくばかり浅きをや心深めてわが思へらむ(萬葉集七)

澤田川袖つくばかり浅けれど久邇の宮人高橋わたす(催馬樂)

など、古へより詠み來れり、こゝもその意なり。つれ／＼の詠めに増る涙川に、袖のみ濡れむは、既に誇張の甚しきものなるを、猶も不充分なりとして、今一倍足を掛けたる身さへ流るの意

表の奇言、これ小なる虚を衝くに、更に大なる虚を以てしたるものなり。戀二に、おろかなる涙ぞ袖に玉はなすわれはせきあへず瀧つ瀬なれば、小町が返歌せしも、同一の筆法と知るべし。この大膽なる誇張は、尋常一様の歌人の、敢て爲し能ふところにあらず。この作者、或は業平ならむ。

題あらさず

よみ人あらさず

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君が影となりなき

(釋)○よるべなみ 寄方無きにの意。○影となりなき この影は影身に添ふなどの影なり。戀一に「戀すればわが身は影となりけり」「篝火の影となる身のわびしきは」などの影は、瘦せ細りたるを形容したるにて、おのづから殊なり。混すべからず。

一首の意は、貴方に近寄るすべが無い故に、身をこそ、かうして遠う隔てて居れ、戀しう思ふ心は、常住貴方のそばを離れずに、貴方の影となつてまゐらうたワイとなり。

(評)形と影とは、必ず相伴ふものなれば、相副ひて離れぬ由を、影となると轉義したり。遠近の合拍は、この組織の骨子なり。

徒にゆきては來ぬる物ゆるゑに見まくほしさにいざなはれつゝ

(釋)○物ゆるゑに 物乍にの意に解するは早し。委しくは、意釋に就いて見よ。○來ぬる 上に、行き

てはとあるによりて、返るといふ意になること、往來の來と同じ。○見まくほしさに 見むことの欲しさになり。まくはむの延言。

一首の意は、思ふ通に逢はれずして、折角往きては、空しく返りくする物故に、最早通ふべきにもあらぬものを、それを逢ひたしと思ふ心にサ、誘ひ出されくしては、又しても往き、又しても往きすることよとなり。

(評)詩の召南、

陟_ニ彼南山、言采_ニ其薇、未_レ見_ニ君子、我_レ心傷悲、云。

の趣に彷彿せり。上句、理路に落ちたるはくちをし。但、ゆきての下に、僅にはの辭を點出して、幾そたびも往來する趣を現し、且、能ふかぎり多くの語言を省略し得たるなど、叙述の技巧見るに足るものあり。

この歌の作者、伊勢物語にては、例の讀人まらさなれば、難なし。六帖には、明らかに、人麿の名を署したり。風體殊あれば信すべからず。

あはぬ夜のふる白雪と積りなば我さへごもにけぬべきものを

この歌は、或人のいはく、かきのもとの人丸が歌なり。

(釋)○白雪と積りなば 白雪と同じく積りなばの意。この辭を早く解すれば、白雪の如くともいふべし。花と散る、雪と降るなど、皆この趣なり。

一首の意は、思ふ人に逢はぬ夜が、この降る雪と同じやうに、幾夜もく積つたなら、又この雪の消ゆる時分に、え逢はぬ悲しさに、自分の命までが、共に消えてしまいまひさうであるものを、さても、逢はぬことかなとなり。

(評) 一度逢ひて後、障ることありてにや、人の逢はざりける頃、雪の降るを見て、忽ち聯想し來りて、わが運命を卜すれば、遂には雪とおなじ運路をたどりて消えやすらむをぞ、覺束なみて、無情なる人を怨めるものの如し。思ふに、或は、かく詠みて、その人に贈れるにやあらむ。譬喩親貼なるが、この巧處にして、また拙處ならむ。結句のをの辭を解して、景樹は、「八重垣造その八垣を」夜には九夜日には十日を」などのをと同じ歎辭なりと論ひたれど、上來の語勢を味ふに、言外に猶、餘意のありぬべきばかり、強き調子に聞き做さるれば、猶抑揚の意味に用ゐられたる辭と見むぞ穩しかるべき。

左註は、采るべからず。風調叙法、人應には似もつかず。

なりひらの朝臣

秋の野に笹わけし朝の袖よりも逢はでこし夜ぞひち増りける

(釋) 〇さ、小竹なり。

一首の意は、秋の野にて、笹原を踏み分けて來りし、朝の間の袖は、露の爲に、随分濡れたりしが、それよりも、貴方の所へ往きて、え逢はずして戻つて來た夜の間の袖がサ、意外にも、

涙の爲に甚く濡れ勝つたワイとなり。

(評) 小笹の露にそぼちつ、秋野を分けしは、以前、その人に逢ひて立歸りし朝のことなりけり。さて、今は、音なひしかひもなく、叩きわびて、空しく夜中ばかりに立歸れる袖のうへの涙に、おのづから、かの情ありし後朝の朝の袖の露を思ひ擬へられて、かれよりは、これ濡れ勝れりとの斷案を下せり。こゝ誇張、その侘しさの一方ならぬ趣を見すに力あり。朝の袖とあるに譲りて、夜の袖ぞといふべきを省き、又上句に露、下句に、涙の語を着けずして、たしかにその事と思はしむるなど、老練なり。一篇の骨子は、有情無情の對照にあり。

四句、伊勢物語に、あはでぬる夜ぞとあるはいかゞ。かくては、只我が家に丸寝したる趣あれば、秋の野に笹わけつゝ立歸りし後朝の袖を聯想せむに、緊切ならず。但、ぬるゝ現在法を用ゐたるは、その理なきにあらず。本行の如く、笹わけし朝、逢はで來し夜とありては、いづれも過去の出來事なるを、後に比較して見たるに止まりて、實感の、肺腑を動かすものあらず。されば、過去と現在とを對比して無量の感愴を搖曳する叙法に依るべく、四句は、逢はで來ぬる夜と改むべくや。さては、字餘りなり。詩歌には、形式上、語數の定限あるが故に、その約束に制せられて止むを得ず、文法上の變例を用ゐること無きにしもあらねば、或は、わざとかくいひ做したりしか。

小野小町

みるめなきわが身をうらと知らねばやかれなで海士の足たゆくくる

(釋)〇みるめ 見る目に、海松布をよせたり。〇わが身をうらと 我が身を愛しといふに、浦をよせたり。〇かれなで 離れずしての意、變ることなきをいふ。〇足たゆく たゆくは、俗言のダルクといふに同じ。

一首の意は、海松布の無い浦といふことを知らぬ故かして、それを刈らうと思つて、海士が、休無しに足のたるいはど来るやうに、何反來ても、逢ひ見るといふ事の無い私の身を、愛い辛い者ども知らぬかして、途絶えも無く、貴方が、足のたるいはどお出になることワイとなり。

(評)愚なる業かな、やめ給への餘意あり。みるめといひ、うらといへる縁語より、思ひ切わるく附き纏ふ未練男を、海松布無き浦に、足たゆかかれず來通ふ海士に比喩したり。自身を客にして、彼を主とし、到底逢はじといはずして、的の無き矢を放つなど、下に嘲りたる、人のわるき仕打とやいはむ。當時の宮仕に出立てる、口賢き女房の情態、見ゆるやうならずや。構想は一機軸あり。詞は煩瑣に失す。初二句を、宣長が、わが身をみるめなき浦と、下上に打反して、心得べき格なり、後に、わが身のうらと詠める歌多きは、これに據れるものなりといへるは、いかゞ。これは、既に、この時代に於ける一の成語にして、まか切り放して釋くべきにあらず。

流れてはゆく方もなしなみだ川我が身のうらや限なるらむ (千兼)

わたつみとたのめしこともあせぬればわれぞ吾が身のうらはうらむる (伊勢)

わび渡るわが身のうらとなればや戀しきことのまき波に立つ (寛平歌合)

例證かくの如く多かり。又必ず、小町の歌に據りて詠めりごせむは泥めるに似たり。この事、既

に、景樹も論へり。

源宗千朝臣

あはずして今宵明けなば春の日の長くや人をつらしと思はむ

(釋)〇春の日の 長くといはむ序。

一首の意は、これまで、度々えあはずにこそ戻りたれ、今夜は是非と思つて來たに、又えあはずに、今夜が明けたならば、この節の春の日のやうに、長ういつまでも、貴方をつらいと思つて、過すであらうワイとあり。

(評)さる格子わたり這ひありきて、叩き侘びたる折の作なるべし。水鶏かさだにいはで打ひそまれる、女のつらき心にも思ひ知るべく、長くや人をと打詠めたるなり。

初句、六帖、及び家集に、あかすしてとあるはわろし。

みぶのたぐみね

三、有明のつれなく見えしわかれより曉ばかりうきものはなし

(釋)〇有明のつれなく 有明のは、有明の月のといふべきを省きたるにて、有明の月は、夜の明くれども、猶さりげなくてある物すれば、人のつれなきをいふ序に置きたり。

一首の意は、有明の月の、夜の明くるをも、よそしく知らぬ顔にて、空にあると同じやうに、人の氣強う見えたりしあの一別以來、今は世に、曉はど愛い物は、又と無いワイとなり。

(評)この集の歌の編次は、選者達の、いたく注意したるものなるべく、殊に戀の部は、一々其の意を綜ねて配列せられ、毫末も忽せざらざりしもの如し。この前後、いづれも、逢はずして夜の明けたる意なれば、これも、必ず同じ趣と見るべきなり。六帖にも「來れれど逢はず」といふ題の部に出せり。況や、作者忠岑、己に選者として、この序次を是認せしをや。若これを拘泥の論といふ者あらば、なかくに疎鹵の嘲をやおはむ。然るに、顯昭は、逢ひて別れたる趣に釋さ做し、宣長、及び石原正明、またこれに従ひ、中井履軒は、その百首費々に、

かの時、男、心は残りながら、泣く／＼出でて歸るに、曉月は我れを送らむともせず、依然と間にさし入りて、女を照して居るを、羨しくも妬ましくも思ひし情を述べたり。

といへる、皆あらず。更に宣長が、此處に入りたるは、ふと所を誤れるなりと論へるは、私意を挿める誣言なり。さて、定家卿が、

この詞つゝきを見るに、及ばず艶に、面白くも詠みて侍るかな。これ程の歌一つ詠出でたらむ、この世の思出に侍るべし。

といひ、又、古抄に、

後鳥羽院より、定家家隆兩人の許へ、八代集の中に面白き歌は、取分けいつれぞと勅問ありしかば、有明のつれなく見えしの歌を、兩人同心に申されし。

と見えたる、これ等は、顯昭の解に據れる贅辭にして、假にその意と見むも、過褒を免れじ。感哀、今一段の透徹を要す。

ありはらのもとかた

あふ事のなきさにしよる波なればうらみてのみぞ立歸りける

(釋)○あふ事のなきさ 逢ふ事の無きに、渚ナギサをかけたたり。渚は波打際なり。○うらみて 恨みてに、浦見ウラミテてをかけたたり。

一首の意は、自分は丁度、人の逢うてくるゝ事の無いといふ名の渚にサ、寄る波であるから、その波が、浦を見たるのみにて立返るやうに、折角その人の許に通うて往つては、逢ふ事もなく、一途に恨んでサ、立歸つたワイとなり。

(評)おのれを波に、つれなき人を渚に譬喩して、その縁語もて仕立てたり。波なみの如ごとく直喩せずして、波なればと混喩したるがをかし。さて、浦見ウラミテと擬人したり。後にも、戀五、わたつみのわが身みこそす波たち歸りかへすむてふうらみつるかあ、さては、

あふ事のなきさに身をしなしつれば袖も涙に濡れぬ日ぞなき(六帖)

大淀のまつはつらくもあらずにうらみてのみもかへる浪かな(伊勢物語)

よみ人あらず

かねてより風にさきたつ波なれやあふ事なきにまだき立つらむ

(釋)○波なれや なれやは、なればやの意。○逢ふ事なきに 逢ふ事無きといふに、和ナキをかけたなり。

和は風波の穏やかなるをいふ。
一首の意は、浪は風が吹くに因つて立つ物なるが、自分の、人を戀ふといふ名は、前以てまだ、風の吹かぬ風のうちに立つ浪であればかして、このやうに、まだ逢ふといふ事も無いのに、早くから噂に立つことであらうことなり。

(評)萬葉集十一に、

風吹かぬ浦に波立ちなき名をも吾は負へるか逢ふとは無しに

とあるを藍本として、多少の塗抹を施せるのみ。一首の上に、名といふ語の無きを、顯昭の不審したるを、景樹も同意し、眞淵、廣蔭は又、先立つ名といふに、波をかけたなりとなせり。これ皆我が戀を、波に比喩したるものと思へるからの誤なり。これは戀故に立つ名そのものを、波に比喩したるなれば、もとより詞のうへには現さざるものぞ。かねてより、さきだつ、まだきたつなど、同語類語重疊して、いたく洗煉を缺けり。

たゞみね

陸奥ムツにありといふなる名取川なき名取りては苦しかりけり

(釋)○名取川 陸前國にあり。名取郡の中央を貫流して、海に入る。

一首の意は、奥州にあるといふ話である、名取川といふ川の名のやうに、譯の無いのに、譯の

あるといふ名を取つては、さて、迷惑なる事であるワイとなり。

(評)これが、實ある名ならば苦しからねども餘意、てはの辭によりて表出せらる。上句は、なきの語を隔て、名取りてへ係る序なり。いふなるは、

みちのくにありといふなる松島のまつに久しくとはぬ君かな (六帖)

瀧つ瀬のなかにも淀はありてふを云々 (戀一)

の類例にて、足未だ邊陲の奥地を踏まで、話にのみ聞及べる都人士の口吻。聲調流滑なり。

結句、家集に、わびしかりけりどあり。

みはるのありすけ

あやなくてまだなき名のたつ田川渡らでやまむ物ならなくに

(釋)○あやなくて 春上「春の夜の闇はあやなし云々」の條に既出。○なき名のたつ田川 無き名の立つに、立田川をかけたなり。立田川は、秋下「立田川もみちば流る云々」の條に既出。

一首の意は、タワイも無うて、まだ實事も無い先から、かう名の立つことよ、このうへはいつそ、渡りかけたる立田川を、渡らずに己まう物では無いに、ごうしてなりとも逢うて、この戀を遂げうわさとなり。

(評)貴方も、まか思ひ給へど、思ひ入りたるますからを心、あはれあり。人に逢ふことを、川を渡るに喩ふる例は、外にも數多見えて、この獨創にはあらざるが如し。下句の高調なるにあはせ

ては、上句、や、煩瑣なるがくちをし。

二句、新撰和歌には、またきりき名のことあり。

もごかた

人はいさわれはなき名のをしければ昔も今も知らずとをいはむ

(釋)〇人はいさ いさは、清みて讀むべし。否やの意。春上「人はいさ心も知らず云々」の條に既出。〇とをいはむ をは、調を強むる嘆辭。

一首の意は、貴方は、どうか知らぬが、自分は、ありもせぬ事をいひ立てらるゝ名が惜しいから、前方も今も一切、貴方の事は知らぬとサ云はうワイとなり。

(評)後撰集戀二に、「大つぶねに、物のたうびつかはしけるを、更に聞き入れざりければつかはしける」元良親王、

大方はなぞやわが名のをしからむむかしの妻と人にかたらむ

返し、「大つぶね」とありて、今の歌あり。眞淵曰く、元方も大つぶねも、俱に在原棟梁の子なれば、この集には、元方の姉とか、妹とかありつらむを、文字の落ちたるを寫し傳へしならむといへる、従ふべし。想ふに、天曆時代に傳れる古今集には、夙く元方とのみありけむを、後撰の選者達、その誤なる事を心付きて、更に贈答二首を載せて、作者の名を訂されしならむ。大つぶねは、僻案抄に、

敦忠中納言の姨、中納言幼くて呼びつけられたる名といふも、無下に打解けたり。名なくば、棟梁がむすめとも書くべきに、勅撰の作者に、かくて載せられたれば、定まりにける名と聞ゆ。大納言行成本にも、おほつほねとあり。

と見えて、元方の妹二人のうち、長は、始め藤原國經の室にて、後時平大臣に通じて、敦忠を生みし人、次は、この大つぶねなり。季吟が、心よく叶へる故に、兄の歌を借り用ゐたるにやと、推し當てにいへるは、いかなるへし。親王の御歌は、餘に聞き入れぬ妬さに、只入戀といふばかりなる中らひを、もと相語らひし妻ありしと、人に語りてやらむと、厭がらせをいへるを承けて、さやうならば、此方は、後にも先にも、全く見も識らぬ赤の他人なりといはむと、互にあらぬ事を設けて贈答せるなり。返歌は、敢て佳作といふべからざれども、冗字冗語多く、句々力ありて、洗煉を経たる作なり。集の撰者達も、さは思ひたりけむ、贈歌をば省けり。結句、古本伊勢集に、知らずとやいはむとあり。やと疑ひては、左右決せざる趣になりてをかしからず。とをいはむと、ひたぶるに思ひ入りたるを叶へりとす。

よみ人志らず

こりすまに又もなき名は立ちぬべし人憎からぬ世にしすまへば

(釋)〇こりすまに 戀りすにといふに同じ。

一首の意は、前方世間から、無い事をいひ立てられて、據なう、一時練々しう打絶えしが、それ

に懲りもせず、又も無い名が、きつく立ちさうなることワイ、何故なれば、かう何時の間に
か、再び中よくなるといふやうに、かの人の、如何にしても憎まれぬこの世にサ、活きて居る
故にサとなり。

(五九八)

(評)かく憎みても憎みあへざる、彼の人と同じ世にありては「思ふには忍ぶることぞまけにける」
の趣にて、又も浮評の立つに至らむと、社會の鞭撻に驚かされて、一旦控へたる心の駒の、と
もすれば、埒の外に狂ひ出でむとするを打歎けるなり。意思の弱き人が、情熱の高き人が。
ひんがしの五條わたりに、人をちりおきてまかり通ひけり。忍びける所な
りければ、門よりしもえ入らで、塙のくづれより通ひけるを、度重なりけ
れば、あるじ聞きつけて、かの道に、夜毎に人をふせて守らすれば、いき
けれど、えあはでのみ歸りて、よみてやりける、

なりひらの朝臣

人あれぬわが かよひ路の 關守はよびく 毎にうちも寝なむ

(釋)ひんがしの云々 この詞書も、伊勢物語に、

昔男ありけり。東の五條わたりに、いと忍びていきけり。みそかなる所あれば、門よりしもえ
入らで、わらはへの踏み明けたるついでくづれより通ひけり。人繁くもあらねど、たび重なり
ければ、主人聞き付けて、その通路に、夜毎に人を据ゑて守らせければ、かの男、いけどもえあ

はで歸りけり。さて詠める、

とあるを摘み入れたるものにて、元來「題まらず」の歌なるべし。ひんがしの五條は、東の京
の五條通なり。昔の京都は、朱雀大路を中心に、東西兩京に別ち、北より南へ、九條の街路を
設けたりき。いきけれどえあはでは、行きけれどもく、え逢はざる意あり。○人あれぬ 人
に知らぬの略なること、「人あれぬ思を常にする河なる」「人あれぬ思やなぞの例に同じ。○
關守 關を据ゑて守る番人。○よひく 毎 よひは、夜と同意に用ゐたり。必ず、今いふ「宵
の口」の意とするは泥めり。○うちも寝なむ うちは接頭語、もは歎辭、なむは希望の辭。
一首の意は、外の關守はともかく、人に知られぬ、自分が通ひ路の關守だけは、毎夜くづれに寝
てまうてまわ、貰ひたいワイとあり。

(評)さらば、通ひて逢はむものをの餘意あり。まことの關守に對へて、我が通路の關守のみは、打
も寝なむと、切に思ひ入りたる趣、はの辭にて表出せらる。このこと、既に、春上「春日野
はけふはな焼きを云々」の條に、委しく辨じたり。初句を、舊説に、今は主人の知りて、關を据
ゑたる程なれば、人知れぬとはいはれぬ道理なりと疑へるは、粗なり。又或人は、人に知らさ
ぬの意に解れれども、強ひたり。こは初めより、知られじと思ひ入りたるひたぶる心に任せたる
修飾の語にて、かく道理の齟齬したることをもいふが、狂熱の極なるなり。哀深しとやいふへ
き。格調舒暢、意促りて、詞迫らず。

題まらず

つらゆき

(五九九)

忍ぶれど戀しき時はあしひきの山より月のいでてこそくれ

(釋)一首の意は、随分怵へ忍びはすれども、甚く戀しい時には、怵へかねて、あの山の端から月の出てくるやうに、思ふ人の所へさして、出てサくるワイとなり。

(評)三四の句は、出でてこそくれといはむ序ながら、東の山際に、月の立上りたる折柄の哀思ひやらる。古は、思ひ妻などの許へ通ふには、夕暮を以てその時としたれば、人戀しさのいとまさらり來りて、心にのみも、えをさめあへざりけるものならし。叙述簡淨なり。

よみ人あらず

戀ひくゝて稀に今宵ぞあふ坂のゆふつけ鳥は鳴かずもあらなむ

(釋)○今宵ぞあふ坂の 今宵ぞ逢ふといふに、相坂をかけたなり。○ゆふつけ鳥 鶏の事ならむ。戀一「逢坂のゆふつけ鳥もわが如く云々」、雜下「誰がみそぎゆふつけ鳥か云々」の歌の條を参照すべし

一首の意は、戀ひ慕ひくゝして、たまゝ今宵といふ今宵サ、逢ふことなれば、その逢ふといふ名の相坂に、名の高い庭鳥は、さうぞ鳴かずにまゐ、居つて貰ひたいワイとなり。

(評)夕に逢ひて朝に別るゝ男女、明けぬと告ぐる鶏の音の恨しきは、勿論ならむ。秋上、

戀ひくゝてあふ夜はこよひ天の川霧立渡り明けずもあらなむ

詩材の異なるのみにて、想も詞も、同模型に出づ。たゞその少異の點、これ兩者の巧拙の別る

秋の夜も名のみなりけりあふこいへば事ぞこもなく明けぬる物を

(釋)○事ぞこもなく させる事も無きをいふ。

一首の意は、世に長い物といふ秋の夜も、名ばかりであつたワイ、たまゝ戀しい人に逢ふ夜といへば、何を語らふ隙も無くて、これぞといふ事もなく、つい早く明けてましまうものを、何の秋の夜が長からうぞとなり。

(評)秋の夜を長しといふ事は、春の日を長しといふと同じく、遍く、世にひ慣へる語れば、長しといふ秋の夜もといふべきを略していはざるものなり。事ぞこも無く明けぬるは、短き意を持たせたる轉義なれば、結局、長短の對照が、この骨子なり。この構想、あへて珍しき事にはあらず。萬葉集十、

秋の夜を長しといへつもりにし戀をつくせばみじかかりけり

は、この先型ならずや。又、誹諧部に、躬恒、

むつごども まだつきなくに明けぬめりいづらは秋の長してふ夜は

とあるも、同型ならずや。然はあれ、かゝる作意は、誰れも思ひ寄りぬべきなれば、只叙述の巧拙を以て、優劣を判たむか。萬葉のは、婉曲の妙味に乏しく、やゝ理路に落つ。躬恒は、この作者との、略伯仲の間にあるが如くにして、躬恒更に一段を高うす。なほ躬恒の歌の條下に説かむ。

三句、六帖に、あひしあへば、打聽本に、あふてへばとあり。

凡河内躬恒

長しとも思ひぞはてぬ昔よりあふ人からのあきの夜なれば

(釋)〇はてぬ 不覚あり。〇人がら 人體あり。

一首の意は、秋の夜を長いとも、又思ひきはめられぬワイ、昔から逢ふ人物次第に依つて、長くも短くも覺ゆるといふ秋の夜であるから、戀しい貴方に逢うては、大層短く思はれてサとなり。

(評)これは、當時既に、夜の長短は逢ふ人柄などいふ諺ありしを踏まへて詠めるならむ。さらでは、詞足らはず。よりに三句を、廣蔭が、我が身の昔より今までのといふ意に釋けれど、牽強ならむ。さて、着想は、やゝ理路に涉れるが如し。

二句、家集の古本に、思ひもとあり。

よみ人志らず

あのを、めのほがらくと明行けばおのがきぬくなるぞ悲しき

(釋)〇あのを、めのほがらくに係る枕詞なる事は、既に、夏部「夏の夜のふすか」とすれば云々の條に釋けるが如し。但こゝは轉りて、夜の引明け方の意に用ゐたり。ほがらは朗らかなり。

〇おのがきぬく 銘々、自分の着物く、取分けて着ることをいふ。男女相逢ひて起き別るゝ朝を、きぬくといふも、この意より轉りたる語なり。

一首の意は、夜明の空が、朗らかに明けて行けば、一つに打重ねて掛けて着たる、銘々の着物と着物とを、別々に着て別ることであることがサ、悲しいワイとなり。

(評)語調強き初二句の叙景は、おのづから、おのがきぬくと立別れ行くを恨み悲しむらむ趣を映出す。下句下劣なり。

結句、顯照本に、きるぞ悲しきとあり。定家もこれをたすけて、書寫の誤にやといへり。理はおだやかに、聞え易し。

藤原國經朝臣

明けぬとて今はの心つくからになごいひゑらぬ思そふらむ

(釋)〇今はの心つくからに 今は歸らむと思ふ心の萌すをいふ。〇さご 俗のナゼなり。〇いひゑらぬ 云ひ様も知らぬあり。

(六〇四)

一首の意は、夜が明けて來ると云うて、もう今は別れねばならぬと思ふ心が附くにつけて、何故にかう、云ふに云はれぬ、情無い思が添ふことであらうぞとなり。

(評)せめて機嫌よくと思ふ別れ際に、生憎なる愁思の生ずるこの心を、打嘆けるなり。結句、顯昭本に、思なるらむとある、わろし。六帖には、閑院大臣の歌とせり。閑院大臣は、嵯峨、淳和の朝に大臣たりし藤原冬嗣なり。この風調を味ふに、今すこしねくれたり。國經のものなるべし。

寛平御時きさいの宮の歌合の歌 とし行朝臣

あけぬこてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそぼちつ、

(釋)○こきたれて こきは、秋下に「もみぢ葉は袖にこき入れて」とある、こきと同意なり。こきたれば扱垂れにて、すこき落すをいふ。雜上一列りてはす山田の稻のこきたれて」も今と同じ。一首の意は、このやうに雨の降るに、夜が明けたりと云うて、別れて歸る道には、物をこきおろすやうに、雨も涙も、一所に降つて來て、衣物が濡れくして、難儀なることよとなり。

(評)後朝の別愁を叙べたり。本來涙の落つるが主なるを、わざとかたへに取倣して、先づ雨もといひ、さて、涙もいひ添へたるもをかしく、まか雨と並べ舉げて、こき垂れて、降りそぼつの誇張もかへる道にはのはの辞に呼應してをかし。

だいゑららず

籠

あゝのゝめの別ををしみわれぞまづ鳥よりさきになき始めける

(釋)一首の意は、夜あけの別が惜しさに、自分がサ先づ、鶏より先に泣きはじめたツイとなり。

(評)なくの聯想より、折柄の晨鶏を、對比の材料として、それに先んじて泣かるといへるに、惜別の意を、強く聞かせたるなり。

よみ人ゑらず

ほこぎす夢かうつゝか朝露のおきて別れしあかつきの聲

(釋)○うつゝか うつゝは現あり。○朝露のおきていはむ序なり。哀傷部に「朝露のおくての山田とある例に同じ。

一首の意は、朝露のおきていふやうに、起きて、別れて來りし曉に聞いたる郭公の聲は、夢であるか、現であるか、まかとは覺えぬツイとなり。

(評)人目を思ひ懼りて、夜深く、強ひて立出でたる後朝の空に、端なく、杜鵑の一聲を聞き付けたらむ、何ばかりの心地かはせむ。げに夢とも現とも辨へ難かる折ふしなるべし。契沖が、その人の聲に、郭公をよそへて慕ひたるなりといへるは、穿鑿に過ぐ。句々字々、力量ありて、一煉の鐵の如し。造語また精煉を極めたるに、朝露のこある朝の語、はての曉とさし合ひて、聊か妙ならず。白露のこせば完璧ならむか。あかつきの聲の語法は、漢文直譯より來りて、この時代に行はれ始めたり。すべて元久時代の歌仙が希ひし風格にて、新古今調の胚胎なり。

(六〇五)

玉くしげあけば君が名立ちぬべみ夜深く來しを人見けむかも

(釋) 〇玉くしげ 玉は美稱、くしげは櫛笥なり、あくといはむ枕詞に用ゐたり。〇立ちぬべみ 秋上「佐保山のは、そのもみぢ散りぬべみ」の條に釋けるを見るべし。

一首の意は、夜が明けて歸らば、人目にかゝりて、君の名が立ちさうなる故に、また夜の深きうちに別れて來たりしが、さるにても、若し誰れぞ、人は見たであらうかしらぬワイとなり。

(評) 立ちぬべみの句、この時代の造語にて、前後の古調なるに調和せず。着想は、萬葉集十一、月しあれば明くらむわきも知らずして寐てわが來しを人見けむかも

の先型ありこれになほ、同集二、

玉くしげおほふをやすみ明けて行かば君が名はあれどわが名しをしも

を取交へて、文なしたるもの如し、

三句、一本、立ちぬべきとあるはわろし。四句、六帖には、寢てわが來しをとあるは、萬葉のが紛れたるにて、この歌にては、意徹らず。

大江千里

けさはしもおきけむ方も知らざりつ思ひ出づるぞ消えて悲しき

(釋) 〇けさはしも しは強辭、もは嘆辭にて、霜を寄せたり。〇おきけむ 起きに、霜の置くを寄せたり。〇思ひ出づる 思ひに、日を寄せたり。〇消えて 心の消え入るに、霜の消ゆるを寄せたり。

一首の意は、今朝はサマあ、格別に心が亂れて、どのやうに起きて來しやらも、一向覺えがなかつたワイ、今その時の事を思ひ出すのがサ、置いたる霜が、朝日の出れば消ゆるやうに、心が消え入つて、悲しいワイとなり。

(評) 初二句、四句のいひかけ、細瑣厭ふべし。興風の歌に、

おもひには消ゆる物ぞと知りながらけさしもおきて何に來つらむ(後撰集雜二)
とあるまどは、全く同巧の双生兒なり。

人にあひてあしたによみてつかはしける

業平朝臣

寝ぬる夜の夢をはかみまごろめばいやはかなにもち増る哉

(釋) 人にあひて云々 人は、女なること勿論あり。その後朝に、家に歸りて後、贈りける歌となり。この詞書、伊勢物語には「昔深草の御門に仕うまつりける男ありけり。いとまめに、まぢやうにて、あだなる心なかりけり。さるに、心あやまりやしたりけむ、皇子達の仕ひ給ひける女を相知りにけり。さて、朝にいひやる」とありて、この歌をあげ、次に「となむよみてやりける。」

さる歌のきたなさよ」と書けり。○夢をはかなみ、をば嘆辭なること、苦を荒み、瀬を早みなごのをと同じ。○まどろめば、暁を交すをいふ。目滂むの義とぞ。○いやはかな、いやは強々イカカの意、はかなは、はかなしの語根を、體にいひ据ゑたる語。

一首の意は、昨夜逢うて二人寝たる、あの暖い夢がまあ、餘りはかない故に、たしかに今一度見やうと思つて、トコロと目をねふつて見れば、却て寝られもせず、夢さへ見えずに、いよ／＼はかない事になり増る事よとなり。

(評)逢い難き女に、辛うじて忍び逢へる後朝とせむは、勢語に泥みたる誹あらむ。たゞ他かぬ別の意ばえを叙べたるものとすべし。おのづからうつら／＼と、うつ／＼なき後朝の態なるを、わざと打目ごろごむ趣にいひなして、わが思の深き由を見せたる、老翁なり。三四句のうつり、意釋の如く、詞を入れて見ざれば、意たしかならず。まどろめばといひ下す時は、おのづからまた、さる詞あるべき調なること、秋上、

天の川淺瀬をならみたどりつゝ渡りはてねば明けぞしにける

の條に釋けるが如し。序文中に「心餘りありて詞足らず」と評せられたるも、かゝる類をや云へるならむ。さて、勢語に「さる歌のきたなさよ」とあるより、季吟、契沖は、自記の詞にて、卑下して云へるなりといひ、眞淵は、さる忠實人の、思ひ乱れし歌詠めるを、心きたあしと云へるなりといひ、高尙は、歌のことあれば、歌を指して、きたなしと譏れるなり。いと／＼をかきし歌なれば、記者の、わざと／＼をいひて、戯れたる詞を見るべしと。

業平朝臣の、いせの國にまかりける時、齋宮なりける人の、いこそみかにあひて、又のあしたに、人やるすべなくて、思ひをりけるあひだに、
女のもごよりおこせたりける、
よみ人あらす

君や來し我や行きけむおもほえず夢かうつゝか寝てかさめてか

(釋)業平朝臣の云々 齋宮は、伊勢の皇太神宮に奉仕給ふ内親王を申す。みそかは、ひそかと同じ。人やるすべなくては、使して、便りする手段の無きをいふ。伊勢物語には、

昔男ありけり。その男、伊勢の國に、狩の使にいさけるに、かの齋宮なりける人の親、常の使よりは、この人、よくいたはれといひやりけり。親のいふ事ありければ、いと戀に勞りけり。あしたに出し立てて、夕さりは、こゝに歸りこさせけり。かく戀に勞りける程に、いひつきにけり。二日といふ夜、男、われて逢はむといふ。女もはた、逢はじとも思へらす。されど、いと人目繁ければ、えあはず。使さねとある人なれば、遠くも宿さず、女の聞も近くありければ、女、人を静めて、子一つばかりに、男の許に來りけり。男はた、寐られざりければ、外の方を見出してふせるに、月の朧なるに、人の影するを見れば、小き童を先に立てて、人立てり。男いと嬉しく、わがぬる所にゐて入り、子一つより丑三つまであるに、まだ何事も語らひあへぬ程に、歸りにけり。男いと悲しくて、寝ずなりにけり。つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば、いと心もどなくて待ち居れば、明け離れてまばしある程に、女の許より、詞は無く

て、「君やこしわれや行きけむ云々、」

(六一〇)

とあり。さて「男、いよいよ泣きてよめる」とありて、次なる「かきくらす心の間に云々」の歌を擧げたり。上にも、まばら論へる如く、勢語は、古歌に、さまざまの物語を附會したるものにて、この文など、殊に、その痕跡を顯せり。抑も、齋宮は、さる淫行ある時には、即ち廢せらるるが、當時の例規なりき。業平時代の齋宮に、さる事ありし事、史に見えず。よし又、事實ありとも、勅撰の集には憚りて、書くべきにあらず。この詞書の、勢語によりて物せられたる後人の筆なる事、うつあし。行文また、いと拙し。○おもほえず 覺えずといはむ程の意。

一首の意は、昨夜お逢ひ申ましやうなるが、貴方が御出下されしか、だゞしは、私が参りしか、あわたしくお別れ申まし悲しさに、一向覺えませぬワイ、それにつけて思へば、お逢ひ申ましも、夢でありしか、正氣の事でありしか、眠れる間の事でありしか、目の醒めて居る間の事でありしか、いづれやら、トント覺えませぬワイとあり。

(評)我れはかくの如し、君にはいかにと、うら問へるなり。君や來しが、主なるを、更に反對の意なる、我れや行きけむをいひ添へ、夢かといふが主なるを、更に反對の意なるうつ、かをいひ添へ、猶詞を換へて、寢てかといふに、醒めてかをいひ添へて、漸層法を用ひつゝ、その兩端を叩けるに、情味活躍して、抑揚の姿致、其の妙いひ知らず。況や、君や、我れやといひ、夢か、うつ、か、寢てか、さめてかといへる、疑問語の疊用、同語、同形語、同音の折返し、自然に諧調を成せり。三十一字、七段に切と、のへられて、節短く音促りて、とがうに感へる情態、よく表出せら

れたり。縦横の口吻、矯健蕩宕の筆路、殆ど婦人の作の如くならず。

三句、古本業平集には、おぼつかなどあり。

かへし

なりひらの朝臣

かきくらす心の間にまごひにき夢うつとは世人さだめよ

(釋)○心の間 間の夜は打惑はるゝものなれば、心の惑ふをも、聯想上より比喻して、心の間と云へるなり。○世人 世間の人の意。

一首の意は、まことに昨夜の事は、私も、掻き暮らす心の間に惑うてままうたワイ、それ故、夢か現か更に覺えぬが、かう互に知らぬからは、そのいづれであるかといふ事は、局外の世間の人が、定めて呉れよとなり。

(評)夢か現か寢てか覺めてかど、真向より斬掛けたる大太刀を、危く體をかはして、世人定めよ、と、餘所へ外らせたる意表の辞令、その技凡ならずといふべし。

結句、六帖、伊勢物語には、こよひ定めよとあり。事は聞ゆれども、詩味劣ること遠し。

題あらす

よみ人あらす

ぬば玉の間のうつゝは定かなる夢にいくらもまさらざりけり

(釋)○ぬば玉の 間といはむ枕詞。○間のうつゝ、 間の紛れある、或事實をいふ。

(六一一)

一首の意は、闇夜の紛れに、ひそかに逢うたる現の事は、これまで思寐に見たりし、たしかなる夢に比ぶれば、何ほども増らなかつたワイとなり。

(評) 暗夜を利用して、相逢へるなるべし。餘にあわたしくはかなき契の、夢のやうなるより、思寐の定かなる夢を對比して、逢ふ瀬のいとも嬉しむべき現を、夢にすこし増し位の物ぞといひくたせるが、意外の著想にて、雋永の味あり。六帖に、作者を敏行とせり。

○ さよふけてあまのこ渡る月影にあかすも君を逢ひ見つるかな

(釋) ○あまのこ 天の門なり。空といはむに同じ。委しくは、秋上「秋風に聲をほにあげて云々」の條に釋けり。

一首の意は、夜ふけて、大空を渡る月の光に、あらはに、見てもく見飽かずにまわ、逢ひ難い君を逢ひ見たることよとなり。

(評) 月下に會合し得たる感懐なり。上なるは、闇夜に逢ひてかひなしと嘆ひ、これは、月夜に逢ひて夜よしと悦べる、反對を以て次でたるなり。三句の^を、の辭の誤ならむと、宣長、景樹等の云へるはあらず。六帖に見ゆる、

あしひきの山またとほる月影にあかすも人に逢ひ見つるかな

は、このやゝ變化したるものにて、元來同意なり。意釋の如く心得べし。秋成が、月影には、月影の如くにの意なるべしと云へるも牽強なり。又、景樹、雅嘉が、小夜ふけてとあるより、曉月の趣に取做したるはいかゞ。秋上なる、

小夜中と夜はふけぬらし雁が音の聞ゆる空に月わたる見ゆ

も、中夜を云へるにて、曉更の光景ならむや。是等みな、上句を、飽かすもといはむ序と心得たるよりの誤なり。

○ 君が名もわが名も立てじ難波なるみつともいふなあひきともいはじ

(釋) ○難波なるみつ 難波の御津に、見つをかけたなり。難波の浦は、攝津職ありて、船舶の出入を管理したる官津あれば、御津と云へり。○あひき 逢ひきに、網引を寄せたり。

一首の意は、貴方の名も私の名も、世に立てはすまいと思ふワイ、それ故、名高い難波には、御津といふ所があり、又網引といふ事をするが、その名の如く、私を見たとも、貴方は仰しやるな、私も、貴方に逢ふたとも云ふまいワイとなり。

(評) 狡童、奔女に誨ふる語あり。萬葉集に、

大宮のうちまで聞ゆ網引すと網子とゝのふる海人の呼聲(卷三)

吾がころも人にな著せと網引する難波をどこの手にはふれと(卷四)

など見えて、難波は、そのかみの都に近き漁業地とて、難波とだに云へば、御津と綱引とは、當時の人の、直に聯想するところなりけらし、さて、いひ寄せたるなり。君が名も我が名も、又みつともいふなわひきともいひはじと、自他の排偶を、上下に聯對せしめたる、叙法齊整あり。かく、一再反覆する漸層法は、おのづから、丁寧もせざる意趣を生じて、物の大事を取るが爲に、相互の關係を口堅むべく、諄々として已まざる心もちるの程、歴然たり。綿々密々、神經質の作者ならむ。

○ 名取川ぜゝの埋木あらはればいかにせむこか逢ひ見そめけむ

(釋)○名取川 本卷、上に既出。せゝの埋木 瀬々の埋木なり。埋木は、水土の中に埋れたる材木をいふ。故に、谷の埋木なども詠めり。景樹は、瀬々に打捨てし古杭を指すと云へり。必ず、今陸前地方の名産なる、太古炭層時代の遺木の稱とせむは、當らず。河内の弓削川にも、埋木を詠めること、萬葉集にあり。

一首の意は、名取川の瀬毎にある埋木のやうに、下に忍びて、上へは顯さぬやうにはして居れども、若し世間へ露れて、戀のうき名を取りたれば、その時は、如何にせうと思つてサ、逢うて馴染み初めたる事であらうぞとなり。

(評)意馬心猿の狂ひ疲れたる刹那、電光一闪、胸前を刺す智慧の利刃に、覺えず、身の毛いよ豎ち

たる折の作なるべし。社會と個人との衝突、この危険をも忘れたる、おのが心を訝しむ間に、嗟歎の聲、おのづから永うなりぬ。想ふに、作者は、分別盛の男ならむ。萬葉集卷十、寸十板もてふける板目のあはざらばいかにせむこかわが宿そめけむ。

と同想にして、叙法また同じ。或は、この歌を轉訛して傳へたるならむか。初二句の序詞は、なほ萬葉集七に、

真鉤もち弓削の川原の埋木のあらはるまじき事とあらなくに

の趣をうつしたれど、これは、名取川の埋木を用ゐて、川の名に、名の立たむ事を籠めたるなど、巧にして艶なるは、全くこの時代の風調あり。いかにせむとかの疑問、語調一段と強く、無限の意趣茲に生じて、一波、萬波を描く姿態あり。定家卿は、この集秀歌十首の一とせり。六帖に、作者の名、貫之とあるは、非らなむ。

○ よしの河水の心ははやくとも瀧のおとには立てじとぞ思ふ

(釋)○水の心 水の如き心の意。○はやくとも 心の方にては、逸る意なり。

一首の意は、瀧の早い吉野川の水のやうに、自分の戀の心は、はやるとも、その川の瀧のやうに、音に立てて泣きはすまいとサ、思ふワイとなり。

(評)比興なり。すべて、戀の比喩に、山川の水をいふこと、既に萬葉集十二に、

山河の瀧にいやまさる戀すとぞ人知りにける間無くおもへば
足檜木の山川水のおとに出ず人の子ゆゑに戀ひ渡るかも

など見え、この集にも、「足引の山下水の木隠れて瀧つ心をせきぞかつる」あど、等類いと多かり。
殊に、

高山の岩本たぎち行水のおとには立てじ戀ひて死ぬとも(萬葉、十一)

吉野川岩きりとほし行く水のおとには立てじ戀はしぬとも(戀一)

は同型にして、畢竟、山本近き處に都せし、奈良時代の人の遺想あり。

打聽本には、四句、瀧つおとにはとあり。

○

戀しくばまたにを思へむらさきのねずりの衣色に出つなゆめ

(釋) ○またにを思へ したは、心の内をいふ。をば強辭。○むらさきのねずりの衣 紫色を染むるに、紫草の根もて、布帛に摺り著くることありしと見ゆ。其の色映えくしければ、色に出つといはむ序に用ゐたり。大方は、根の皮の汁を採りて染む。小野博云ふ「紫草、春分後種を下す。長じて、苗高さ二尺許、葉は細長くして、早蓮草ダカサクラウの如く互生す。夏月白花開く。五出にして、大さ三分ばかり、梅花に似たり。實は紅花の實に似て小し。熟して白色、或は淡褐色を帯びて、光あり。其の根直にして、深紫色と云へり。○ゆめ 萬葉集には、努、禁、勤などを訓ませたり。禁止の副詞。

一首の意は、戀しく思はば、心の内でサ、思うて居てくれい、紫の根摺の衣のやうに、色に出づるなよ、人目に立つから、急度よとなり。

(評) 片戀には、戀ひ死ぬをも辭せざるを、諸戀には、永へにこの甘露に酔ふべく、色に出つなど警戒せる、人情變轉の機微、味ふにいと面白し。また、にを思へと、強辭を措きたる命令法、出つなゆめといひ重ねたる禁止の語、相俟つて、大事を取りたる老婆心切、想ひ遣らる。紫の根摺の衣を着て、はかなげに兒めいたる人の、年嵩なる男の胸にかゝりて點頭くらむ態、そもいかなりけむ。

初二句、六帖に、思ふともしたにや逢はむとあるはわろし。

をのゝはるかぜ

花す、きはに出てこひば名を惜み下ゆふ紐のむすばほれつゝ

(釋) ○花す、きは 穂の出でたる薄をいふ。ほに出てといはむ序。○ほに出て 秀ヒメに出てなり。表面に現すをいふ。○下ゆふ紐の 下裳の紐をいふ。下に結ぶ物なれば、心のうちに結ばるゝ比喻に用ゐたり。○むすばほれ 結ばると同じ。

一首の意は、花薄の穂に出るやうに、表へ顯して戀ひ慕はば、名の立たうことが惜しい故に、衣の下に締むる紐の、下に結ばるやうに、心の内ではかり思うて、氣が結ばれくして、甚だ難義なる事よとなり。

(評)花薄、下結ふ紐の序體、奈良時代より盛に用ゐられて、殆ど陳腐に屬するが如し。况や、これを一首中に併用したる、修飾に過ぎてこちたし。風調卑靡、當時武邊を以て、朝野の重きをなせりし作者の人柄に類せずとやいはむ。否、作者は、寛猛并び濟す人なり。藤原保則傳に、春風率兵四百餘、取陸奥路、入上津野、宣諭恩詔、賊徒悉降(中略)春風少在邊塞、能通夷語、脱甲釋兵、獨入虜軍、具宣朝命、於是、夷虜大服、奉書乞降、云々。
 あゝこの寛裕仁慈は、即ち、この和きたる心のなしに出づるものならざるを知らむや。
 たちばなのきよきが、あひしれりける女のもとよりおこせたりける、

思ふごちひごりくがこひ死なば誰れによそへて藤ごろもきむ

(釋)たちばなのきよきが云々 橘の清樹の情婦の許より詠みておこせし歌となり。○ひとりくがいづれか一人がといはむ程の意。○藤ごろも 喪服をいふ。もとは、葛布にて製せし衣の稱。一首の意は、かう思ひ合うたる同志の間に、お前か自分かの一人が、若し焦れ死なうなら、喪服を着やうにも、表立ちたる夫婦ならねば、世間へは、身内の誰れが死にし故に服を着ると、誰へかこつけて、服は着やうぞとなり。

(評)所謂取越苦勞をしたるに、婦人の情致見えてをかしく、更に矯飭の浮辭にあらず。要するに、晴れて逢はれぬ中を打嘆きたるが、この本意のあるところ。

かへし

橘のきよき

なきこふる涙に袖のそぼちあはぬぎかへがてらよることそは著め

(釋)一首の意は、云はる通り、若しいづれか戀ひ死にし時は、悲しうて泣き暮ふ涙に、袖が甚く濡れうから、それを脱き換へがてら、人の見ぬ夜の間サ、その喪服をば着やうわサとなり。
 (評)相手の詞につきて、立てたる痴案なり。

題あらず

こまち

うつにはさもこそあらめ夢にさへ人目をもると見るが佗しさ

(釋)○人目をもる 人目を憚り慎むをいふ。もるは守るなり。
 一首の意は、互の逢瀬に、人目を憚ることは、現にては、さうもサあらう、それは無理も無いが、夢にまでも、人目を憚ると見ることが、難義なことワイとなり。
 (評)一圖に思ひ迫れる婦人の情には、婉曲の辞様を用ゐる餘裕なく、おのづから理路に涉り、露骨に流る。戀二 敏行、

住の江の岸による波よるさへや夢のかよひ路人めよくらむ
 に比すれば眞摯の點は、或は勝らむも、含蓄の餘味に乏し。
 結句、諸本、見るが佗しきとあり、

かぎりなき思のまゝによるもこむ夢路をさへに人はこがめじ

(釋)〇こむ 行かむの意。かゝる例、常に多し。

一首の意は、限無い胸の思に任せて、夜も、夢に行つて逢はうワイ、現に通ふは格別の事、夢に通ふ路をまで、人は咎めはすまいワイとなり。

(評)晝の間行きたりしかど、人目にさへられて、え逢はざりけらし。この趣、一首のうへに反映せらる。さて、はかなき夢路をすら、唯一の頼み處として、逢はむと思ひ入りたる熱情、さこそ。宣長、景樹等が、夢にもといふべきを、下に夢路といへる故に、詞を換へて、よるもといへるやうに釋けるは、非なり。まか恣に、助辭を補ひて、釋き做さむには、いかやうにも釋かるべきをや。さて思ふに、當時の習慣として、普通は、男の方より、女の許に通ひたりき。されば、この歌、婦人の作としてはふさはざるが如し。必ず作者を小町とせば、三句のこむは、こよの誤にはあらずか。

下句、六帖に、夢路をさへや人の咎めむとあり。

○ 夢路には足もやすめず通へごもうつゝに一目見しこごはあらず

(釋)〇一目見し 一寸見しといはむが如し。〇ごごは 如くはの意。

一首の意は、夢の路には、足も休めず、精出して通うて、度々逢ふと見れども、やはり正真に、一目見たりしやうには無いワイとなり。

(評)嗚呼、夢は甲斐なきものよの餘意あり。されど、今は夢を頼むより外に、すべなき逢瀬なるを、いかにせむ。結句、見し事はあらずの意にても解せらるれど、この部立、皆逢ひたるうへの歌なれば、如はの意に従ふべし。

六帖に、二句、足もやすまずとあり。又、四句、うつゝにひとりどあるは、殊にわるし。

よみ人あらず

思へごも人目つゝみの高ければかはこ見ながらえこそ渡らね

(釋)〇人目つゝみ 人目を慎むに、堤をかけたなり。〇かは 彼はに、川を寄せたり。

一首の意は、堤が高ければ、前に川があると見ながらも、え渡らぬやうに、戀しう思ふ人を見ては、あゝ彼れはと思ひながらも、人目を慎む心が、大方ならぬによつて、逢ひたう思ひながらも、ようサ逢はぬワイとなり。

(評)意中の人を間近く見ながら、人目をつゝむ場合には、おのづから、かくも打出でられぬべし。人目づつみは、奈良時代には、絶無の造語にしてこの頃に翔まれるか。註者、万葉集卷八なる、

妹がりと吾が行く道の河なれば附固緘結跡夜ぞ更けにける

の四句を、人目つゝみと訓みて、この先例とせるは、非なり。又、かはの弄語と譬喩とは、後撰集、戀二、

かはと見て渡らぬ中になかるゝはいはで物おもふ涙なりけり。

大和物語にも、

古里をかはと見つゝも渡るかき、淵瀬ありとはうへもいひけり。

など見わたるが、時代後れたれば、恐らくは、これを學びたるならむ。猶後撰の詞書を見るに、「おなじ所にて見かはしなから、ね逢はざりける女に」とあり。全く、今と同一の事情なるを見よ。

○

たぎつ瀬のはやき心を何しかも人目つづみのせきこゝむらむ

(釋)○はやき心を はやき心なるものを意。瀬の早きに、心の逸るを寄せたり。○人目つづみ人目を包むに、堤をかけたなり。

一首の意は、たぎり落つる川瀬のやうに、逸る胸の思であるものを、何故かまあ、堤の水を堰きとむるやうに、人目を包むばかりに、泳へ忍んで居る事であらうぞとなり。

(評)早瀬の水は、堤を築きて堰けども、堰かれぬものなれば、託して以て、わがこの一方ならぬ熱愛の、世間の制裁位の事に憚るは何ぞと、もごかしみたり。この衝突、この苦悶、これ相愛に

於ける第一活劇なり。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

きのとものり

くれなるの色にはいでじ隠れ沼のあたに通ひて戀ひはるぬこも

(釋)○くれなるの色には出でじといはむ序。委しくは、戀一、「人知れず思へばくるし云々」の條に云へり。○隠れ沼の 草などうへに茂りて、水の下に潜れる沼をいふ。故に、またに通ひてとはむ序としたり。

一首の意は、紅のやうある、人目に立つ色には出しはすまいワイ、隠れ沼の水の下に通ふやうに、心の中のみ思つて、戀ひ慕ひはするともサとなり。

(評)戀緒百端、すべて心に吞む。萬葉集四、

いふことのかしこき國ぞ紅のいろにな出でそ思ひ死ぬとも

などの類型にして、自他の差あり。友則の作としては、可きものなれど、萬葉の比すれば、遙に下れり。まかも、序詞の重疊したる、煩くなむ。

題あらす

み つ ね

冬の池に住むには鳥のつれもなくそこに通ふと人に知らすな

(釋)○冬の池に住むには鳥の には鳥は鶺鴒なり。鶺鴒の字をも填つ。鶺鴒より小く、小鶺鴒よりは大なる、俗にむぐりといふ水鳥にて、常に水に出没し、藻木葉などを集めて、水上に巢を浮べ作る。

冬の池は、氷の張るにもかゝらず、鴉鳥はを凌ぎて、水底に潜き入る故に、つれもなくそこに通ふといはむ序に用ゐたり。○つれもなく 知らず顔、或は、俗言の「平氣」などいふ意に當る。○そこ 底に、人代名詞の其許を寄せたり。

一首の意は冬の池に住む鴉鳥は、氷を潜つて、水底を通ふによつて、うはへには見えぬやうに、私が、そこ許に通ふといふことを、何氣なう知らぬ顔して、人に知らすなよとなり。

(評)これも、奔女に誨ふる語にして、上なる、

君が名もわが名も立てし難波なるみつともいふなわひきともいはじ

こひしくは下にを思へむらさきの根摺のころも色にいつなゆめ

の儂なり。而して、難波なるみつと、紫の根摺の衣とは、殆ど伯仲の間にありて、氣格、これ最も下れり。鴉は鴨などの類と異り、常に居る物なるを、わきて、冬の池のとしもいへるは、その氷れることを聞かせむ爲なり。

後撰集冬に再出して、四句、下に通はむとあり。家集にもまかあり。六帖には、氷の部に出で、下句、氷の下をわれは通はむとあり。又、後撰には、作者不詳の歌とせり。

○

さゝの葉におく初霜の夜を寒みまみはつくとも色に出でめや

(釋)○まみはつくとも 氷り付くをいふ。氷ることを、しむといふこと、今も方言にのこれり。さ

て、染み付くを寄せたり。

一首の意は、笹の葉におく初霜が、夜の寒い爲に氷み付くとも、笹の葉が、他の草木のやうに、色に出やうかまめ、色に出はすまいワイ、それと同じ事、自分の戀も、染み付くやうに貴方の事を思ふとも、氣色に顯さう事か、否、如何なる事情の下にも、氣色に顯す事では無いワイとなり。

(評)夜釜氷の如く冷やかに、懊惱夢成らざりし朝、庭上の細竹霜の白きを見る。我れから氣を勵まして、色に出でめやと獨言てる、諷託の作なり。

二三の句、六帖に、おきゐる霜の寒ければとあり。又、家集には、二句、おく白露のとあり。

よみ人あらず

山科の音羽の山のおとにだに人のあるべくわが戀ひめかも

この歌、ある人、あふみのうねべのとなん申す。

(釋)○山科の音羽の山 山城の、今の清水寺のある山。○おとに 風聞に、或は、噂になどの意。

○かも やもと同じ。反動の助辞。

一首の意は、このやうに忍びて通ふ中を、山科の音羽山の音といふやうに、音聞にさへ以て、人の知りさうなる振をして、戀ひ慕はうかまめ、そのやうなる振をまて、戀ひ慕はうとは思はぬワイとなり。

(評)されば、事の露顯に及ぶ氣遣ひなければ、安心あれかしの餘意あり。恐らくは、返歌ならむ。卷末、墨滅の歌の部に、あめの御門の、近江の采女に給へる「犬上の床の山なるいさや川云々の歌のかへしとて、この歌を擧げたり。あふみのうねべとあるは、近江朝廷に仕へし采女の意ならむ。されど、この歌の辞様用語を察するに、更に、その頃のものならず。初二句のおどの二音を反覆したる序、奈良時代まではあかりき。さる時には、吹風のおど、行水のおど、鳴神のおどなどいひたりき。結句のめかもも、平安朝になりての新語あり。左註は、墨滅の詞書によりて、書入れしものと覺し。

二句、墨滅には、音羽の瀧のごあり。これ優れるが如し。

きよはらのふかやぶ

みつ汐の流れひるまを逢ひ難みみるめの浦によるをこそ待て

(釋)○みつ汐の流れひるま 滿潮の水の流れて干るといふに、晝間をかけたたり。○みるめの浦に浦に海松布の寄ると續く。みるめの浦といふ地名あるにあらず。さて、海松布に、見る目をかけたり。○よる 寄るに、夜をかけたたり。

一首の意は、滿潮の水の流れて干るといふ、その晝間はサ、人目に障へられて逢ひ難い故に、海松布が、汐に連れて浦へ寄るといふ、その夜をサ、逢ひ見たさに、自分は待つワイとなり。

(評)縁語の鎖り續け、いひ掛けの多き、厭ふべし。たゞ小手の利きたるを見るべきのみ。

うらみても汐のひるまはなぐさめつ袂に波のよるいかにせむ。(續後拾遺集)

これも同人の作にして、その模型を同じうせり。

二句、六帖に、ひるまもごあり。

平 貞文

白川のあらずごもいはじ底清みながれて世々にすまむと思へば

(釋)○白川 山城國愛宕郡にあり。源を志賀山越の溪間に發して、末は鴨川に合す。○ながれて流れてに、存在^{ナカレ}てをかけたたり。存在^{ナカレ}ては、ながらへての約。○世々に 歲月の長きに云へる轉義。一世二世の意にあらず。○すまむ 澄まむに、住まむをかけたたり。この住むは、男の、女の許に住みつく意あり。

一首の意は、二人の中を、若し人が問はば、一向その様の事は、白川といふ川の名のやうに、知らぬとも云ひはすまいワイ、其の故は、其の白川の水底の清さに、流れて何時までも水の清むやうに、心の底が潔白故、長らへて世と共に相變らず、住まうと思へばサとなり。

(評)貴方の御心はいかにといふ。底清みは、心の誠あるを喻へたるにて、未始終、添ひ遂げむと思へば、人に問はれて隠すまじといへる、所謂神聖なる戀愛なるべし。

初句、一本、まら浪のごあり。采らず。

とものり

あたにのみ戀ふればくるし玉の緒のたえて亂れむ人な咎めそ

(六二八)

(釋)○玉の緒の 玉の緒の如くの意。○たえて亂れむ 玉の緒の絶ゆれば、玉の乱るゝを喻へたり。たえては、ひたふるに、一向にちぎいふ意。亂れむは、放蕩れむの意にて、實の反對。一首の意は、心のうちにはかり戀うて居れば、甚く苦しいワイ、これではかなはぬ程に、いつその事打出して、玉の緒の切れて玉が乱るゝやうに、一向に戀に亂れうと思ふワイ、必ず誰れも、人は咎めて、下さるなよとなり、

(評)姿詞、大やう、戀一ある、

人まれす思へば苦しくれなるの末つむ花のいろに出でなむ

と同じくして、堪へに堪へ、休へに休へし餘なるを見る。但、これは、既に逢ふ瀬を経ての戀にして、世に打晴れたる中ならぬを啣てるなれば、事態や、殊れり。萬葉集十一、

いきの緒に思へば苦し玉の緒のたえて亂れな知らば知ることも

に至りては、字句に、二三の出入こそあれ、全くこの同型なり。剽竊の謗、梨壺の四人と雖ものがるゝ事能はざるか。次の歌も、萬葉に淵源したる形迹あれば、作者は、萬葉を座右の寶典と秘めしものならむか。

二句、六帖に、思へば苦しとあり。

わが戀をまのびかねては足引の山たちはなの色に出ぬべし

(釋)○足引の 山といはむ枕詞。○山たちはな 葦柑子の稱なること、物名の部に云へり。其の實

赤し。本草和名に「牡丹也米多知波奈」とあるは、非ならむ。

一首の意は、自分の戀の思を、今までこそは、こかうして忍び隠して居れ、これから先、どうも堪へられなくなれば、山橋の實の色に出るやうに、人目にかゝる位に、氣色に顯れてままひさうなワイとなり。

(評)山橋を詩材とすること、夙く奈良時代に行はれ、殊に、

足引の山橋のいろに出でて語らばつぎてあふ事もあらむ。(萬葉四)

足引の山橋のいろに出でて吾が戀ひなむをやめがたくすな。(同十一)

如き、同想の序なり。しかく、萬葉の糟粕を舐れるもの、著想に、おのづから特異の點のありて、平凡のうちに、大なる眞摯の情の籠れるを認む。一氣到底、調に弛緩なきも宜し。二句のはてのば文字、清みて讀みても、その意聞ゆ。いづれにてもあるべし。

よみ人あらず

大方はわが名も湊漕ぎ出なむ世をうみべたにみるめすくなし

(釋)○大方は 大抵ならばといふ程の意、七八まで、さる方に許せるをいふ。○世をうみべたに 世を愛といふに、海べたをかけたなり。倦みおとろにかけたるにあらず。海べたは海端ウミノヘの轉なり。海濱

(六二九)

をらふ。

一首の意は、磯端は海松布が少きさに、舟を湊から沖へ漕ぎ出して、存分に海松布を刈るやうに、大抵ならば、自分の名も、世間に打出してしまはうワイ、隠し忍ぶ中は、思ふやうに度々逢はれぬが、如何にも愛い事である程に、いつを顯えたらば、却て思ふまゝに逢ひ見る事が、出来やうと思へばサとなり。

(評)ふと打聞けばかりにては、上句意味を成さず。下句の説明を見るに及びて、はじめで、轉義よりせる譬喩なることを曉りぬ。素性集、

たよりなき名は沖にこぎ出なむよるべたもとにみるかひもあし
は、この等類あるべく、彫琢厭ふべし。
下句六帖に、人をみるめをおきにこそかれとあり。

平のさだぶん

枕よりまた知る人もなきこひを涙せきあへずもらしつるかな

(釋)○枕より 枕より外にの意。○戀を 戀なるものをの意。

一首の意は、逢うたる夜の枕より外に、又ぞ知る人も無い戀なるものを、思に堪へかねて、ついで涙を堰きとめおほせずして、洩らしてのけたる事よとなり。

(評)危かりけりな、人目に觸れば、そも如何にせむと思ひてか云ふ餘意あり。戀に、枕の外に知

る人無きをいふは、下にも「知るといへば枕だにせでねしものを」などありて、風くより、普くいひならせる諺ありしなるべし。必ず、戀一、

わが戀は人まゐるなめやしきたへの枕のみこそ知らば知るらめ

を本歌と定めむは、泥めるが如し。歌は戀の實情あらはれてをかしけれど、聊かあかぬふしあり。さるは、もらしつる哉と説破したる、含蓄の餘味を殺ぎて、大に拙きなり。

よみ人あらず

風ふけば浪うつ岸の松をれやねにあらはれてなきぬべらなり

此歌は、ある人のいはく、柿本の人まろがなり。

(釋)○松なれや やは嘆辭。○ねにあらはれて云々 根に音をかけて、顯れてといへるなり、音に顯れては、聲に立つるをいふ。

一首の意は、風が吹けば、浪の打寄する岸の松は、波に洗ひさらされて、根の顯る、物なるが、自分の戀は丁度、その松であることよ、實にその根の顯る、といふやうに、音に顯れて、甚く泣きもまさうなる様子だワイとなり。

(評)松なれやの隱喩、「秋の野におくしら露は玉なれや」、「伊せの海に釣する海士のうけなれや」、「うき草のうへは茂れる淵なれや」、「わが戀は深山がくれの草なれや」の類、上にも、數多散見して、面白き辞樣と思はれたるが、これは、四句の秀句が、なまじひに細碎に過ぎて、感興の自然を

害へり。卻りて、六帖の、

風ふけば浪うつ岸のそなれ松ねにあらはれて泣きぬべらなり

又、同、みつねの歌に、

五月雨の玉にぬく日のあやめ草ねにあらはれて泣きぬべらなり

などあるが如く、上句を、常の序詞に仕立てたる方、優りぬべきか。

左註は、勿論信すべからず。六帖にも、人麿の作としたれど、べらなりの語の、奈良時代のものからざることは、夙く、春上「春のきる霞の衣ぬきを薄み云々」の條に説けり。

池にすむ名ををし鳥の水を淺み隠るとすれどあらはれにけり

(釋)○名ををし鳥の 名を惜むに、鴛鴦をかけたなり。

一首の意は、あの池に住む、名がサ惜しいといふ名の鴛鴦が、池の水が淺い故に、水底へ隠るとはすれど、顯はれてまゝうたワイ、その如く、自分の戀も、愛き名の立つが惜しい故に、随分と隠し忍ぶとすれど、顯れて人が知つたワイ、是非も無き事よとなり。

(評)諷諭、やゝ不完全なり。名ををしの秀句、夙く諷託の本意をいひ顯したるが爲ならむ。庭前の池水に打潜く、さる鳥の有様を見て發せる感興なるべし。

逢ふことは玉の緒ばかり名の立つは吉野の川の瀧つ瀬のこと

(釋)○玉の緒ばかり 少しの間ほどの意。戀二「死ぬる命いきもやすると云々」の歌の條に釋けり。

一首の意は、二人の中も、逢ふ事は、丁度玉の緒位のわづかなる事で、愛き名の立つことは、吉野川の瀧の音の高いやうで、世間へ響き渡つて、それはく喧しい事よとなり。

(評)さても割のわるき、あぢきなき戀ある哉の餘意、上下の反映によりて生ず。かく、反對ある現象を、たゞ具體的の譬喩を以て排對したる外に、何等の言をも挿まざるは、この簡古の妙を具ふる所以にして、又情味永く、風韻の高かる所以なり。萬葉集十四、

さぬらくは玉の緒ばかり戀ふらくはふじの高根の鳴澤のこと

同想の先型あり。抑も、彼れを點化して詠めるものか。はた、この時代的に、彼れの轉訛して傳はれるものか。

むら鳥の立ちにしわが名今更にことなしぶごもゑるしあらめや

(釋)○むら鳥の むら鳥は、群鳥の轉なり。飛立つ光景の、目につくより、立ちといはむ序としたり。○ことなしぶ 事無し振の意。ぶは形容の接尾語。

一首の意は、群鳥の立つやうに、世間に一度立つてままひし、自分の戀のうき名は、今改めてそ知らぬ風をまたりとて、其の甲斐があらう事か、いやありはすまいワイとなり。

(評)されば、事實を事實として、寧ろ憚ることなく、相逢はむには如かじと、決心の臍を固めたる、熱情の人なるかな。

二句、打聽本には、立ちぬるとあり。

君によりわが名は花に春がすみ野にも山にも立ちみちにけり

(釋)一首の意は、貴方故に、自分のうき名は、花にかゝつて、この節の春霞が、野にも山にも、一面に立つやうに、世に遍く立つてまゝうたワイとなり。

(評)誘ひし水を怨じたる落花の遺懐ならむ。うき名の、世に立つにつけて、流石に、女の小さき胸には、戀の甘き露に酔ひまがらも、片へには空おそろしくなれるにやあらむ。花に春霞は、眼前の景物を、立ちといはむ序に用ゐたるにて、世に遍くの意を、霞の縁にて、野にも山にもと轉義したり。花には、對手の人を擬へたりとする、契沖、眞淵の説は、や、戀に過ぎむか。但、二三の句、叙法の明晰を缺けるが如し。
初二句、六帖に、君が名もわが名もおなじとあり。

伊 勢

あるといへは枕だにせて寢しものを塵ならぬ名の空に立つらむ

(釋)○空に立つ バツと高く立つをいふ。

一首の意は、いかに包める思をも、枕は知ると諺に云へば、その枕さへせず寢たりしものを、どうして人が知つて、塵こそ空に立つが、その塵でも無いうき名が、かう高く立つことであらうぞとなり。

(評)よし、枕は人の思を知るといふ諺ありたればとて、落居て打寝るに、枕を取らぬことあるべしやは。これは、只手枕ばかりの、假初に逢ひしを、わざと、枕を取らで寝たりしやうに云ひ做したるなり。この痴氣、釋想、塵をらぬ名の空に立つを訝れると相埃ちて、詩味の油然たるを覺ゆ。さて、用ゐぬ枕に、塵の置く由は、夙くよりいひ來り、詠み來りたれば、聯想上、忽ち塵を捉へ來りて、其の縁によりて、高く立つことを、空に立つと轉義したり。かく修辭の纖細巧緻にして、調の流滑なるは、この作者の風体なり。又云ふ、空にの語に拘泥して、なき名の立つことと解せむは、非なるべし。この篇次、皆その實ありて、顯れたる戀なり。

古今和歌集卷第十四

戀歌四

題あらさず

よみ人あらさず

みちのくのあさかの沼の花かつみかつみる人に戀ひや渡らむ

(釋)○みちのくの云々 あさかの沼は、今の岩代の國安積郡なる沼、かのあたり、古へは、すべて、「みちのく」といひき。○花かつみ 何物とも定かならず。能因が歌枕に「かつみは菰をいふ。菰花を花かつみといふか」とあり。契沖、榊原玄輔、土肥經平、屋代弘賢、伊勢貞丈、喜多村節信、山本明清、井上文雄、近藤芳樹等皆これに従へり。六帖に、菰の次に、かつみの題を立てたれば、こと物のやうなれど、ぬなはにつぎて、ぬなはを載せたる類にて、畢竟同物なるべき由、契沖は云へり。東雅、物類稱呼に、陸奥の方言といへるは、萬葉集に、陸奥ならでも詠めるを知らざるなるべし。田字草といへる説は、荷田東滿に起りて、眞淵、狛諸成等の主張おれど、伊勢貞丈は、同名異物と云へり。楫取魚彦、加藤千蔭は、陸奥にて、今菖蒲に似て花の四片なるを、かつみと云へり。これぞ眞の物なるべきと云へるに、谷川士清、石川雅望は従へるが如し。橘守部は、茨(ヒツ)ならむといへれど、餘り僻説ならむ。本草啓蒙に、菰米を充てたれど、菰蔕

の類にて、花ごしもいふべからず。落葉ありといへる説もあれど、深き沼には生せず。無名抄、奥儀抄などに、芦の花といへれど、夙く、顯昭は聞えぬ説と難じおけり。上田秋成は、參河美濃なごに、かつみと呼べる物あり。菰の類なりと云へり。猶諸説紛々として決せず、煩しければ省く。○かつみる はつゝに見るなり。見るは、男女相逢ふをいふ。かつは苟且の意。

一首の意は、陸奥の安積の沼の花かつみの名の、かつみといふやうに、かつつゝに、一寸逢うたるばかりの人なるに、かうも心に戀しう思つて、永く月日を経つることであらうかとなり。

(評)はかみき契に拵げたるわが運命を豫想して、打伴ひたるなり。上句は、同音を疊みかくべく布置したる序なり。爲にかつみるの意強く印象せられて、おのづから戀や渡らむと、時間上、長短の對映を生ず。この語勢によりて、人にも、人なるにの意を聞ゆること知るべし。以下九首、逢ひ見て後の戀なり。

下句、六帖に、かつみる人の戀しきやなごとあり。

○

逢ひ見ずば戀しき事もなからまし音にぞ人を聞くべかりける

(釋)一首の意は、一度も逢うたる事が無いならば、このやうに戀しい事もありはすまいワイ、されば、逢ふことおごせすに、たゞよその事の風聞にはかりサ、あの人の事を聞いて居るべき事であつたワイとなり。

つらゆき

いそのかみふるの中道なかくに見ずば戀しと思はましやは

(釋)○いそのかみふるの中道 大和の山邊郡石上の布留の中にある道をいふ。美濃の中山、佐夜の中山、鈴鹿ふるの中道などの類なり。○なかくに 却つてなり。

一首の意は、石上の布留の中道の名の、なかくといふやうに、なかく却つて、一度も逢うたる事が無いならば、このやうに戀しいとは思はうか、いや思ひはすまいワイとあり。

(評)上の歌の上句の意を以て、初二句を序歌に仕立てたるのみ。逢ひ見て人を思ふは、もとより戀しきに定まりたるを、なかくに戀しからじと云へる反興、以て、今の戀情の一方ならぬを見つべし。上のもこれも、業平の「世の中になえて櫻のなかりせば」と詠めると同一の心理状態にあるものなり。二三の句、同音の反復、聲調なだらかなるのみならず、語々流暢にして諧へり。

藤原たゞゆき

君こいへば見まれ見ずまれふじの根の珍しげなくもゆるわが戀

(釋)〇見まれ見ずまれ 見るにもあれ見ぬにもあれの約。〇ふじの根 根は谷の上略。〇わが戀 戀に、火をいひかけたなり。

一首の意は、富士の山の燃ゆるは、常住の事にて、珍しげも無いが、貴方の事とすいへば、逢ふにつけ逢はぬにつけ、何時も、富士の山の燃ゆるやうに燃ゆる、自分の戀の火であることよとなり。

(評)見るに戀み、見ぬに燃ゆるは、戀の常なるを、我が胸火は、さる差別なしと、水平以上に熱狂せる由をいひ遣りて、その人の同情を究めしならむ。初句面白し。さるは、君故はなごいふ力無き調へと殊なり、まかも、字餘りなれば、いよ／＼強まりて、君といふこと、絶對に、重く點出せらる。且二句の重疊、語法短截なるに、結句を體言にて止めたれば、全首の語調、おのづから勁健なり。君と我がとの對照の如き、卒に、用意不用意を斷すべからず。友則集に入りたるには、初句君てへば、結句もゆるわが身をとあり。

伊 勢

夢にだも見ゆとは見えじ朝を／＼わが面影にはづる身なれば

(釋)〇見ゆとは見えじ かの人に、わが目見ゆとは見られじの意。

一首の意は、思ふ人には、現には勿論、夢さへ、此方から逢ふとは見られますまいワイ、毎朝

鏡に向ふにも、甚く寝れたる自分の面影に、耻しうてたまらぬ身であればサとなり。

(評)鏡に對ひて、寝きたれ髪を取上ぐるは、女の身嗜みなれば、朝な／＼の面影は、鏡の影なること、いはずして明らかあり。一度逢ひ見した後、思に瘦せて、色の衰へたるより、今更見えむ事を羞づる心根のいぢらしさ、神経性なる婦人の特質をあらはせり。みえじの決心を、強いはむとて、夢にだにこそまで誇張して、夢は元來心にも任せぬものなることを忘れたる、狂痴の想をかしのいふべし。さて、一説に、たゞ容貌の醜きを羞づる意としたるは、この部立にかなはず。逢ひて後、色衰へしものとすべし。初句、六帖に、夢にてもとあり。

よみ人しらす

石間行く水の白波立ちかへりかくこそは見めあかずもある哉

(釋)〇石間 眞淵は、イシマと訓むべからず、イハマと訓むが古語なりといひ、景樹は、人丸集に証を引きて、この頃は、イシマの語ありしならむといへり。〇水のまら波 水の色の白く立つ波なり。

一首の意は、山川の石の間を流れて行く水の、白い波の立反るやうに、何反も立戻つて来て、この通りはサ、逢はうワイ、いくら見ても／＼、見飽きの無いことよとなり。

(評)上句の序、景氣おもろし。水の白波は、元久調の濫觴あるべし。結句のいひなし、いと率易

なり。くちをし。

(六四二)

伊勢のあまの朝な夕なにかづくてふみるめに人を飽く由もがな

(釋)朝な夕な などは、何にまれ、飯に添へて食ふ物をいふ稱にて、魚菜を通じていふ。轉じては、單に朝夕の意にも用ゐる。○かづくてふ 潜くといふの約。○みるめ 海松布に見る目をかけたなり。一首の意は、伊勢の海の手士が、朝夕の食物に潜き上ぐるといふ海松布の名のやうに、思ふ人を逢ひ見ることに、飽き足る仕方があつてほしい事よとなり。

(評)上句の序は、萬葉集十一、

伊勢のあまの朝魚夕菜にかづくちふ鰻の貝の片思にして

を、全く襲へるものなり。みるめのいひかけを以て序としたるは、おのづから、奈良朝と、この朝との風調の異を示せるが如し。四句、人をみるめにといひ下すべきを、調のうへより、倒装して諧へたり、朝な夕なは、万葉に、朝魚夕菜と書ける如く、必ず朝食夕食の菜料に潜くことすべし。軽く朝夕の意に見ては、この結構の旨趣に慥はざるが如し。作者は京人にて、伊勢の海には、さる事ありと聞き及びたるまゝに、潜くてふとは云へり。意をつくべし。初句、六帖に、伊勢の海のとあり。

友 則

はる霞たなびく山のさくら花見れごもあかぬ君にもあるかな

(釋)一首の意は、長閑なる春霞の、霞く山の櫻の花のやうに、見てもく、逢うてもく、他かぬ貴方にてまわ、ある事よとなり。

(評)思ふ人を花に擬へたる、世辞か、慾目か。花顔といひ、花形容といひ、似君花發兩三枝といへる例、支那にも多し。景樹が、春霞を重くとりて、霞の隠せる山の櫻は、さやかならぬ物なれば、見れごもあかぬの序とせりといへるは、非なり。たゞ霞中の花は、景氣面白くて、見他かぬ由とすべし。この事、既に春下、「はる霞たなびく山のさくら花云々」の條に論へり。

ふ か や ぶ

心をぞわりなき物ごおもひぬる見るものからや戀しかるべし

(釋)○わりなき 道理無きなり。強ひたるなり。○見るものからや からは乍の意、やは反動の辭。一首の意は、心をサ、道理ない物ぞと思ひ定めたワイ、一體逢うて居ながら戀しからうか、いや戀しい筈が無い、然るに、かうして逢うて居ながら、戀しい故にサとあり。

(評)慕る戀の憧憬に、われと、わが心に、愛想を盡かしたるがをかしきもの、叙法は妙ならず。もの語無意味に重複したり。後撰集戀一、戀のござわりなき物はなかりけりかつむつれつゝかつぞ戀しき

(六四三)

これと同意にて、なだらかにはいひ取りたれど、語調平靜にして、これに比すれば、やゝ狂熱の活躍を缺くが如し。

(六四四)

凡河内みつね

かれはてむのちをば知らで夏草の深くも人のおもほゆる哉

(釋) ○かれはてむ かれは、草木の枯るゝに、人の離るゝを寄せたり。

一首の意は、夏草は、今こそ茂り深けれ、時が来れば枯るゝ物であるがやうに、離れて遠退いてまはう後の事をば知らずに、さし當りては、その夏草の深いやうに、深うも、その人の事が思はるゝ事よとなり。

(評) 夏草のは、深くの序ながら、枯れはてむと、縁語をおきて、ことわりを合せたれば、おのづから、比興の體を成せり。調優長にして、四句のも、及びの辭の應接、聲響ここに和諧を覺ゆ六帖に、二句、ここをば知らで、結句、人をたのみける哉とあり。

よみ人しらす

飛鳥川ふちは瀬になる世なりとも思ひそめてむ人は忘れじ

(釋) ○飛鳥川 大和國高市郡にあり。明日香川とも書く。山川なれば、淵瀬變り易しとぞ。

一首の意は、假令飛鳥川の深い淵が、浅い瀬になるやうなる、變り易い世の中なりとも、自分

分は、一度深う思ひ染めたであらう人をば、何時までも忘れはすまいワイとなり。

(評) 飛鳥川に淵瀬の變ることをいふは、奈良時代には、絶えて無かりき。そのこれあるは、本集雜下、

世の中は何かつねなるあすか川きのふの淵ぞけふは瀬になる

にはじまる。この歌も、そを本據として作れり。情思敦厚にして、氣あり、骨あり。又思ふに、四句、思ひそめてしといはむ方、直截にして、感哀深かるべきか。

寛平の御時后宮の歌合の歌

思ふてふ言の葉のみや秋をへて色もかはらぬ物にはあるらむ

(釋) 一首の意は、すべて草木の葉は、秋は色の變る物なるが、私が貴方を思ふといふ言の葉に限つてサ、秋を越しても、色の變らぬ物ではあらうかととなり。

(評) 草木の葉に對映せしめたる言の葉の混喩、さのみ奇とするに足らねど、婉には聞ゆ。續後撰集に、昌泰四年八月十五夜歌合の歌に、よみ人しらす、

おしなべてうつろふ秋もあはれてふ言の葉のみぞかはらざりける
時代も、餘り隔らず、おなじやうに、歌合の歌なるに、かばかりの等類あるは、いぶかし。

題を知らす

さむしろにころも片敷きこよひもやわれをまつらむ宇治のはし姫

(六四五)

又は、宇治の玉姫

(六四六)

(釋)○さむしろに 狹菴なり。延喜式に、廣席、長席、狹席とありて、狹き短き菴をいへど、猶思ふに、このさは軽く見て、接頭語とせむに、更に差はじ。○衣片敷き 獨寢の丸寢をすれば、衣の片敷かるゝをいふ。○宇治のはし姫 宇治は、山城國宇治郡なり。橋姫は、山姫、市姫の類にて、橋を守る神を、橋姫といへりしか。今も、宇治の橋本に、姫大明神とてあり。眞淵は曰く、萬葉にはしき妻、はしき妹など詠める、はしきを略きて、はし姫といへるなり。はしきは精しきにて、よき事をいふと云へり。秋成は、これを非として、強言なりと論へり。一首の意は、寢菴の上に、着物を片敷いて、片寢をして、今宵も多分、自分を待つて居るであらうか、あの宇治の橋姫がサとあり。

(評)橋姫は、宇治の里なる寵妻を寄せたるなり。この京より宇治は、僅に四里強の道程なれば、京人の、別業を營み、或は 忍び妻を据ゑたりし例、いと多かり。源氏物語にも、薰大將は、こゝに隠れ住ませ給ひし八宮の大姫君を思ひて、京より通はれし事、見えたり。世のさがなき物言ひを避けて、思ふ人隠し据ゑて、忍びに通ひける人あごの詠めるか。芦分小舟障り多み、この日頃打絶えて、今宵も之行かぬを、かの情ある橋姫のことなれば、恐らくは、日頃に懲りず、帶紐解き設けて、下待つことならむと、女の振舞を、細やかに想ひめぐらせるに、いよく、わがえ行かぬをもどかしみたる、纏綿の情致あらはれて、餘味言外に曉し。こよひと指定したるは、必ず逢ふべく契り置きける夜なるべし。風調、また高し。

左註の宇治の玉姫とあるは、據り難きか。契沖いふ、顯註に引きたる六帖の「宇治のはし姫」とある歌を、今の六帖には、宇治の玉姫とあり。されば、これも、六帖によりて、後人の書き加へたるなるべしと。

○

君やこむわれや行かむのいさよひに槇の板戸もさす寢にけり

(釋)○君やこむわれや行かむの こののは、體言を承けたる格にて、上を一の成句と見たる者なり。

○いさよひ 滞りて進まぬをいふ。○槇の板戸 檜や杉やなどの板戸なり。槇は、大木の常磐なるをいふ。今、被をのみいふは轉れるなり。○さす 戸鎖さぬこと。

一首の意は、君が來うか、私が行かうかと、ためらひくして居たるうちに、閨の眞木の板戸も、さすに寢てまうたワイとなり。

(評)元來、人の來むことを主とせたるなれば、われや行かむは、映帶の叙法にして、且、同調の語を反復して、姿致を取れるのみ。さて、そのいさよひに、夜を深かして、板戸をも鎖さず寢ねしといふに、如何に待ち設けたりしかを思はせて、暗に、來ざりし人の無情を怨みたり。かくて、その人にいひ贈れるものならし。婉曲にして、情味長し。

六帖に、三句、やすらひに、下句、槇の板戸をさすでとあり。

そせいほうし

(六四七)

今こむといひしばかりに長月の有明の月をまちいでつるかな

(六四八)

(釋)○今 俗のチキといふに當る。○長月 陰曆九月の異名、秋下に出でたり。○有明の月 舊の十六日以後の月をいへど、こゝには、廿日以後の月とすべし。

一首の意は、宵の程、人が只今行かうというておこしたるばかりに、それを誠と想うて、待てどもく來ずして、待ちもせぬ、夜の長いこの長月の末の、まかも早うでも出ることか、遅く出る有明の月を、早もう待ち出したる事よとなり。

(評)さても待つ人は、如何にかまつらむの餘意あり。待たねど出づる月を擧げて、待てど來ぬ人の不信を反映せしめ、長月の有明の月と諱くいひ立てて、さばかり夜の更けしまで音もせざるは、いよく來ぬに定まりたる失望怨嗟の意を深めたり。况や、時もあらむに、夜の最も長き長月の、まかも最も遅く出づる頃の有明の月を待ち出したりといふに、いたく待ち惚けたる由を思はせたる、婉曲にして、味永く、姿素直に、めでたき歌なり。

よみ人あらず

月夜よし夜よしこ人につげやらばこてふに以たりまたずしもあらず

(釋)○月夜よし夜よし 月夜よし、月夜よしと重ねたる詞なるを、上略せるなり。東屋のまやのわまり「忘るあよあよといひにしなど、皆同じ格なり。○こてふ 來といふの約、來は命令法なり。○またずしも しもは、十の八九は、然る意を表はす辭。

一首の意は、内証に思ふ人を、呼び寄する手段に、今夜はよい月夜であるくと、表向き思ふ人の所へ告げて遣らうなら、やはり來いといふに似て居るワイ、さては、人が氣が付いて悪しければ、これもやめにせうとは思へど、あながち又、待たぬ譯でも無いワイとなり。

(評)當惑したることかな、何ぞ、秘密に呼ぶ工夫はあるまじきかの餘意あり。月に託する好方便も、猶多少の嫌疑あり。さりとして、待たずしもあらざるをいかにせむ。この撞着 胸中に反復せられて、苦悶の末は、遂に茫然自失するに至りて已まむ。この心理状態を想像する時は、詩味、一段と長かるを覺ゆ。萬葉集六、

わが宿の梅咲きたりと告げやらば來ちふに似たりちりぬともよし

を本歌としたる換骨奪胎、おのづから別趣の妙を具へ、文情曲折して、餘韻悠然たるものあり。風格も高古にして、語々適健なり。待たずしもあらずは、掉尾の豪句。

○

君來ずば聞へも入らじこむらさきわがもこゆひに霜はおくこも

(釋)○聞 寢屋の義。○こむらさき 濃紫なり。○もこゆひ 元結にて、髪を結ぶ物をいふ。和名抄に「髻、和名、毛度由比、以組束髮也」とあり。

一首の意は、君が來ぬならば、何時までも、聞へも這入るまいワイ、かうして、夜の更くるまで、外に立待つて、私の濃紫の元結へ、眞白に霜はおくこも構はずにサとなり。

(六四九)

(評)古は、男女を通じて髻を取上げ、元結に紫の組糸を用ゐたりと覺しければ、歌主は、いづれとも決し難けれど、聞をいひ、濃紫の元結をいひ、何ごなく女々しき方に傾きたれば、婦人どすべきが如し。さては、婦人の情として、大事にすなる頭髮に、元結に、霜の零るをも厭はず、門に倚りて立待つらむ、いかに切なる戀なりけむ。蓋し肺腑の語なり。同情に堪へず。三四の句、正しくは、濃紫なる元結といふべきを、あるの辞を省き、わがを隔てて、元結へ續けたる、詩形に制限せられたる結果ならむ。濃紫の元結に、霜を取合せたるは、色相の配合、鮮やかなり。霜はおくどもの語法、決心の深きを表せること、その例、集中にも多し。但、萬葉集に、

居明かして君をば待たむぬば玉のわが黒髪に霜はおくども (卷二)

待ちかねてうちには入らじ白妙のわが衣手に霜はおくども (卷十一)

これら、全然同型なり。剽竊とすれば、餘に甚しきに過ぐれど、想ふに、或は、この歌ごもの轉りて、本文の如くなれるにや。但、三首中にては、これ最も優れたり。起句既に千鈞の力あるに、原歌の、君をば待たむ、或は待ちかねてなど、露骨なる粗語を著けたると選を殊にし、又、黒髪に換へて元結をいへるなど、總べて、婉曲にして、格調また高古なり。

宮城野の本あらのこはぎ露を重み風を待つこと君をこそ待て

(釋)○宮城野 陸前國宮城郡、今の仙臺の東にある平原。○本あらのこはぎ 幹疎モトスの小萩なり。末

の茂りて。本立のあらくとしたる萩をいふ。こは美稱とすべし。眞淵は、木萩と解したるが、かのあたりの丘陵原野、今も萩多かれど、皆草立にて、木立のは見えす。○待つこと ことは如くなり。

一首の意は、宮城野の本あらの小萩が、枝の露が重い故に、露を散らさうと吹いて來る風を待つやうに、私も貴方をサ、待つことワイとなり。

(評)幹疎く枝葉の密なるは、露に撓み易き理なれば、風を待つらむことの大方ならぬ趣見れ、さてなむ、君を待つことも、大方あらざることを、言外に立証せられたり。風を待つ、の擬人、結句への關係を親切ならしむ。湊合的實に、情思回折して、清麗なり。

あな戀し今も見てしが山がつの垣ほに咲けるやまとなでしこ

(釋)○あな 嘆辭。○見てしが がは願望の辭。がごと同じ。○山がつ 山住の賤民をいふ。○垣ほ は秀の意なれど。今は垣ごのみいはむに同じ。

一首の意は、あゝ戀しい、只今なりとも逢ひ見たいものよ、山人の家の垣根に咲いてある、その大和撫子をサとなり。

(評)撫子の、しごけなげに咲き出でたる山里の垣根のうちに、いと思の外なる人を逢ひ見つるより、人のゑまひに、花のゑまひを聯想して、垣根の撫子に、その人を擬へ、戀し見たしご、立ちて

も居ても、物思はるゝ熱情を叙べたり。初二句の漸層、この意趣を表すに、適當の叙法なり。眞率のうちに寄興あり、情文相協へるものか。

(六五二)

津の國のなには思はず山城のとはに逢ひ見むことをのみこそ

(釋)○津の國なには 難波に、何はをかけたなり。津の國は、攝津の古名。○とは 山城國乙訓郡の鳥羽なり。常磐の略語なる常をかけたなり。常は永久不斷をこの意なり。

一首の意は、自分は、津の國の難波といふ名の如く、何もは、外に思ひはせぬワイ、山城の鳥羽といふ名の如く、常に不斷、只貴方に逢ひ見やうことばかりをサ、思うて居るワイとなり。

(評)津の國の難波、山城の鳥羽、名所を聯對して、序に用ゐたるまでなり。結句、事をのみこそ思へといふべきを、上の思はずを響かせて、略きたり。初二句は映帶の筆法にして、句法も、三句以下に排せしめ、思ふ思はずを、照映せしめたり。

つらゆき

敷島の大和にはあらぬ唐ころもへずして逢ふ由もがな

(釋)○敷島の云々 敷島は大和國磯城郡今は城上城下二郡に分つなる地名にて、此處に、欽明天皇の都せしめ給ひしより起りて、遂に大和に續けて、枕詞となし、大和の國號、また代々に帝都なりしより、

ひきて日本全國の稱と轉りては、敷島も、日本全國にかけて稱する名となりぬ。

一首の意は、敷島の倭の國では無い、唐といふ國の名のついて居る唐衣の、ころもといふやうに、頃も經ずに、間無しに、逢ふ仕方があつてほしい事よとなり。

(評)頃もの同音を冠せむとて、唐衣とおき、其の唐をいはむとて、敷島の大和にはあらぬとおける層々の序、これも一體なり、蓋し「足引の山鳥の尾のまがり尾の長き長夜を」と詠めると同じく、時間の大なる概念を聽者に興ふる手段と知るべし。

ふかやぶ

戀しとはたが名づけけむことならむ死ぬとぞ音にいふべかりける

(釋)○ことならむ ことは言なり。事にあらず。○音に ひとすらなり。こゝにては、直にの意と見て差はず。

一首の意は、思ふ人を慕ふ事をいふに、戀しいとは、昔誰れが、名付けて置いたる言葉であらうぞ、そのやうなるまはり遠い云ひ方せうよりは、死ぬとサ、手短う直に云ふべきであつたワイとなり。

(評)戀しとのみにては、死ぬばかり戀しき表情に、不十分なる心地するまゝに、直に結果の矯語を擧げて、其の表情の符標とせむといふなり。常識を失したる不合理の論理、殆ど狂人の譚語に等し。この血の氣澤山ある所に。詩味の存するあり。

(六五三)

二三の句、六帖に、誰が名付けける言の葉ぞごあり。

(六五四)

よみ人あらず

みよし野の大川のへの藤なみのなみに思はばわが戀ひめやは

(釋)○大川のへ、いづくにまれ、大川の邊をいふ。大川は、吉野にては吉野川なり。○藤なみ 春上「わが宿に咲ける藤なみ云々」の條に既出。○なみに思は、並に思はなり。

一首の意は、三吉野の大川の邊の、花の咲いて居る藤波のなみといふやうに、並々の者と貴方を思はうなら、このやうに、私が戀ひ慕はうか、いや戀ひ慕ひはすまいワイとなり。

(評)三句までは、なみの同音に疊みかけたる序なり。古は、吉野川の岸邊には、山藤など這ひかりて咲けりしなるべし。なみに思はばは、俗にいふ氣休め文句の類ならむ。萬葉集五、松浦川にて、釣魚の娘子等の詠める、

若鮎つる松浦の川の川波のなみにし思はわれ戀めやは

下句、全く符合せり。且、いづれも序體にて、松浦の川波と、吉野の藤波との差あるのみ。場所を近畿に換へ、調をも改めて、この朝の手振に紛へたる歌主の意中、そもいかなる子細あるにか、覺束なし。

○

かく戀ひむ物とはわれも思ひにき心のうらぞまさしかりける

(釋)○心のうら 心中に立てたる占形なり。○まさし ト占は、正確なるを尙ぶ。故に占正の語もあり。

一首の意は、最初から、後にこのやうに戀しうならう物とは、自分も思ひ設けたる事であつたワイ、されば、その最初の自分の心の内の占がサ、正しかつた事ワイとなり。

(評)果して豫想たる如くなりと、知りつゝも苦しき戀の淵に沈める今を弔せるなり。初二句、六帖に、忘れなむ物とはかねてごあり。

○

天の原ふみとゞろかしなる神も思ふなかをばさくるものかは

(釋)○ふみとゞろかし 踏み立て、轟かすなり。○さくる 遠放くるなり。鳴神の、物を打拆くを寄せたり。神代にも、拆雷の名あり。

一首の意は、あのやうに、大空を踏み轟して、仰山なる音を立つる神鳴は、何にても割り裂く、恐ろしい物ではあるが、その神鳴さへも、互に思ひ合うたる中をば、遠放くるものか、いや遠放けはせぬワイとなり。

(評)假令何事の起るとても、二人が中は裂かる、物ならずの餘意あり。景樹が、世に噂の高くなりたるに怖ちて、女の、かくては、添ひ遂げむ末、いかにならむなど打詫びたるを諫めて、遣はえし歌ならむと云へるは、當れり。來れ、天雷何物ぞの所信、其の情熱の、天地に磅薄して、い

(六五五)

かに高く、いかに大なるかを見るに足る。踏み蹴かし、鳴神すら、既にかゝりさせば、かの紛々たる人言の如き、何かあらむの反映、言外に躍如たり。雷の音を踏み蹴かすといへる想像、また何ぞ詩的なる。辞氣跌宕にして、理無く、情あり。語々句句、又百鍊の鐵の如し。傑作と稱すべし。

前卷の「かねてより風に先立つ云々」より「こりすまに又もなき名は云々」までの五首は、虚名を歎く戀、「池に住む名ををし鳥の云々」より「君によりわが名は花に春霞云々」までの四首は、實名を歎く戀、この「天の原」といふより「里人の言は夏野の云々」までの四首は、いひ妨ぐる戀なり。大同にして小異あり。

○

梓弓ひき野のつゞら末つひにわがおもふ人にこのまげけむ

この歌は、ある人、あめのみかどの、あふみのうねべに給ひけるとなむ申す。

(釋)○梓弓 ひき野に、梓弓ひくといひかけたる枕詞、梓弓のことは、春上梓弓おしてはる雨云々の條に既出。○ひき野 河内國日置と書きて、今「ヘキ」と唱ふる所なるべし。○つゞら 延喜式に、黒葛と書けり。和名抄、葛類に「本草云、防已、一名解離、阿乎加豆良」とある、同物か。小野博云ふ「防已は、青かつらとも、青つゞらとも、つゞらかつらとも、つゞらふちとも云ふ。蔓至りて長し」と云へり。○このまげけむ 言の繁くあらむの意。物言の煩さきをい

ふ。

一首の意は、引野の葛の、ひろがつて繁くあるやうに、末には遂に、自分の思ふ人に、名が立つて、いろいろと、世に噂が繁くなるであらうワイとなり。

(評)詩の鄭風に、

將仲子兮、無踰我園、無折我樹檀、豈敬愛之、畏人之多言、仲可懷也、人之多言、亦可畏也、

その人言のまげからむことを畏るゝ人情は、いづこも同じものなるべし。さて、夏草などに喩へて、人言の繁さを嘆かへる例は、萬葉集に數多あれど、かく葛蔓の末繁きに比興したるは無し。縁語の寄せに、ひき野まで取出でたるは、この時代以後の風調なり。

左註の「あめの御門云々」は、例の采らず。

○

夏引の手びきの絲をくりかへし言繁くとも絶えむと思ふな

この歌は、返しによみて奉りけるとなむ。

(釋)○夏引の云々 春蠶飼して、夏糸を引けば、夏引といひ、手して引けば、手引の糸と云ひ、さて、簀に懸けて繰反すが故に、くりかへしと云へり。○絶えむ 語らひを罷むるをいふ。俗に手を切るといふに同じ。

一首の意は、行末假令、世間の噂は、夏引の手引の糸を繰かへしくするやうに、かへすぐ繁くとも、何時までも、私の中を切らうとは、思ひ給ふ勿よとあり。

(評)女にいひ遣はまし歌なること勿論なり。されば、女紅なる手引の糸のくりかへしを以て序とし、さて、糸の縁にて、絶えむといへる、まことに引延へて繰れる糸の如し。左註、例の采らず。

○

里人のことは夏野のまげくともかれ行く君にあはざらめやは

(釋)○夏野の 夏野の如くの意。○かれ行く 離れ行くなり。枯れ行くを寄せたり。

一首の意は、世間の噂は、假令夏野の草のやうに、繁くあると云うても、それ故遠退いて行く君に、逢はずに居やうか、逢はずにおきはすまいワイとなり。

(評)上句は、全く萬葉集十、

人ごとは夏野の草のまげくとも妹とわれとしたづさはり宿ば

に出づ。而して、かれ行くの縁語をまで取出でたるは、上なる「梓弓引野つゝら云々」、「夏引の手引の糸云々」と同巧にして、みな、この代の風調なり。萬葉集四、高田女王が今城王に贈れる人言をまげみこちたみ逢はざりき心あることな思ひわが背

この世には人言まげしこむ世にも逢はむわが背子今ならずとも

の返歌ともいふべきさまにて、世間の批評に躊躇する戀と、それを物の數ともせず、猪進する戀とを對映せしめて、愛の高潮を歌へり。

藤原敏行の朝臣の、ありひらの朝臣の家なりける女をあひ
ありて、ふみつかはせりけることばに、いままうで、雨のふ
りけるをなむ、見わづらひ侍るといへりけるを聞きて、女に
かはりてよめる。

在原業平朝臣

かずくに思ひ思はずこひがたみ身をふる雨はふりを増れる

(釋)藤原の敏行の朝臣の云々 この詞書の意は、敏行朝臣が、業平朝臣の家に居る女といひかはして、消息を贈りたる文句に、今参らむと存するが、雨が降り居るを見合せて居りますといひ越したるを聞きて、其の女に代りて、業平の詠めるとなり。これも、伊勢物語の文意を摘みて書けるものと覺し。本文長ければ、略す。○かずくに 數々になり。宣長が、深切の意と釋けるは、はやし。○こひがたみ 問ひ難さになり。

一首の意は、いろくに、親切に云はるれども、誠に思ふやら思はぬやら、御心のうちが問ひ

難い故に、心配して居たるが、幸ひ私の身を知る雨が、降りに降つてサ來たワイ、この大降の雨に、濡れくも來て下さらば、私は、深切に思はれて居る幸ある身と知りませうし、來て下さらずば、思はれぬ不幸の身と知りませうワイとあり。

(評)顯註をはじめて、諸家の説まちくなり。就中、高尙、廣蔭の釋優れたり。依りて雨説を參酌して、意釋に擧げたり。景樹は、素より、この詞書を、勢語の撥入と云たれば、詞書を離れて、懇に思ふ故に訪ふ、さは思はぬ故に訪はぬといふにあらず、とても、かくても訪ひ難きに、只涙のみ落ちませり。

と釋き、とひがたみは訪ひ難みなり、問ひ難みにあらず、身を知る雨は、涙を云へるにて、この頃のいひならひなり、伊勢集「かたみにも身を知る雨の降りし哉、六帖に「今日は身をまゑる雨とこそ降れの類、証とすべし、さて、詞書は「題まらず」か、又は、雨によりたる、さるべき詞ありけむかし、今知れ難し」と云へり。身を知る雨を涙とするは、古説にして、顯昭は、僻言なりと非認またり。身を知るといふに、こかくせむすべなき身の宿世を侘ぶる意の、下に匂へることを思ふべし。

ある女の、業平の朝臣を、所定めずありきすと聞きて、よみて
つかはしける

大幣のひくてあまたになりぬれば思へごえこそ頼まざりけれ

(釋)所定めずありきす 彼方此方に、人を据ゑて、通ひあるくをいふ。○大幣の 大幣の如くの意。これも、伊勢物語に「昔男、ねんころにいかでと思ふ女ありけり。されど、この男をあたかりと聞きて、つれなさのみまざりつゝいへる、」とあり。大幣は、顯昭が、積するに、陰陽師の持ちたる串にさしたる四手なり、扱へて果てぬれば、これを、おのく引き寄せつゝ撫づる物なれば、ひく手あまたと詠めるなりといへるが如し。大は美稱あり。幣は、本來、麻にて製くる故に、麻をヌサとも訓む。○ひくて、引く方といはむが如し。幣のうへにては、勿論ひく手なり。

○頼まざりけれ 頼まれざりけれの略、たゞ、頼まれぬ意とするは、非なり。一首の意は、大幣が、數多の人の手に手に引かるゝやうに、貴方は、近頃は、引張る所が、方々に多くなりたる故に、私こそ淺からず思へごも、貴方は、えう頼みになりませぬ事ワイとあり。

(評)情無き、身の上となれる事よの餘意あり。想ふに、まめ心にめでて、そのはじめこそ逢ひもまたりけめ、この趣、なりぬればとあるにて、聞き知らる。

三句、伊勢物語には、聞ゆればとあり。

かへし

なりひらの朝臣

大ぬさご名にこそ立てれ流れても遂に寄る瀬はありてふ物を

(釋)○流れても 流れてといはむに同じ。もは歎辭、俗言のテモの用法と殊なり。幣に流れてとい

へるは、水無月夜に、麻を川に流すことあればなり。

一首の意は、私は引手数多の大幣なりと、名にこそ立てられたれ、その大幣も、川へ流れく
てまあ、果には、流れ寄る所の瀬はあるといふものを、私とても、末にはいづれ、寄る所があ
らうわさとなり。

(評)その寄る所は、即ち、外ならぬ貴方の處なり、されば、厭ひ給ふは心得ずといふ餘意あり。文
情曲折の間に、餘韻悠然たるものあるは、この朝臣の擅場、殊に諷託の妙を見る。

題志らす

よみ人志らす

すまのあまの鹽やく烟風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

(釋)伊勢物語に出でて、詞書に「昔男、懇にいひちぎりける女の、ことさまになりければ」とあ
り。○すまのあまの 須磨の海人のあり。須磨は攝津國武庫郡なり。○風をいたみ 風が太く
ての意。

一首の意は、須磨の浦の海人の、鹽を焼く烟は、風が格別に強い故に、あれあのやうに、思も
寄らぬ脇の方へ、變いて往つたワイといふが、表面の意にて、自分の思ふ人も、強ひて誘はる
ゝまゝに、思ひも寄らぬ人の方へ、靡いてまうたワイといふが、裏面の意なり。

(評)山崎河帶の盟誓も甲斐なく、艶夢徒に冷になれるを、深く歎きたるなり。萬葉集七、
志賀のあまの鹽やくけぶり風をいたみ立ちほらす山にたなびく

詞意ともに、この全體を襲ひたり。さて、原歌は、單に旅中の叙景なるを、これは、諷諭に仕
立てたれば、蘊含の味に、無量の感懐を生ずるは、素よりその處なり。おなじことながら、射
恒集に、

もまほやく蟹のたく火の烟こそ思はぬかたに立ち昇るらし

は、これに比して、劣りざまなるは、是非なし。

初句、六帖に、伊勢のあまのごあり。

○

玉かづらはふ木あまたになりぬればたえぬ心の嬉しげもなし

(釋)伊勢物語に出でて、詞書に「昔男、久しく音もせで、忘るゝ心もなし、參り來むといへりけれ
ば、女」とあり。○玉かづら 和漢三才圖會に「玉蔓、其蔓引地、葉似忍冬葉而厚、春開小
花、色青綠可愛」とあり。

一首の意は、葛の、あの木へも、この木へも這ひかゝるやうに、貴方も、あちこちと通ふ所が數
多になられたる故、私の方の縁を絶えはせぬものの、その絶えぬ御心が、何の嬉しいやうも無
いワイとなり。

(評)言のみよくて、實なき人に贈れるなるべし。たえぬは、比興の玉葛の縁語なり。

題本には、二句以下、はふ木のあまた見えぬればたえぬ言の葉とあり。伊勢物語には、四句、

普通本は本文のと同じく、真名本は顯本と同じ。すべて、顯本宜しかるべきか。本文の二三の句は、上なる「大幣の引手あまたになりぬれば」に似通ひたるまゝ、混れたるものなるべく、次々の五首の歌ども、詞の偽なるを怨むる意なれば、これも、その一列にて、四句は、言の葉あるべし。

(六六四)

たが里に夜がれをしてか時鳥たゞこゝにしも寝たる聲する

(釋)一首の意は、今夜は珍しく、何處の里に、一夜を闕かしてか来て、この時鳥は、そらさぬ顔して、只此處にサ、寝る積りにて泊りたるやうなる聲をすることよといふが、表面の意にて、絶えず、通ふらしい誰が里をか、めづらしく、今宵夜離れして來ながら、外へなどは、一向通はぬ風をして、只我が許のみにサ、泊りたるやうなる事を云ふ事よといふが、裏面の意あり。

(評)作者は、婦人なるべし。夏歌、

時鳥なが鳴く里のあまたあれば猶うとまれぬおもふものから

と、同一の諷諭にして、さる輕薄なる男の、辯口を弄する状態、聲するの一語に表現せられたり。宣長が、これは、時鳥を詠める歌なるを、こゝに入れるは誤なりと云へるは、この諷諭を聞き知らざるに本づく。さて、誰が里に夜がれをしてかど、その急處を衝きて、詰責冷罵したる口氣、流石の鐵面漢も、漸汗三斗、其の背を沾すを覺ゆるなるべし。實に、この歌の活躍して、一段の妙味と、一層の姿致と添ふるは、この疑問の體を用ゐたるにあり。巧手なるかな。

○

いで人はここのみぞよきつき草のうつし心は色ことにして

(釋)○いで 發語。○ここのみ 言のみなり。○つき草 螢草なり。委しくは、秋上「月草に衣は摺らむ云々」の條に既出。この花、物に摺る時は、色の移りて染み易き故に、著き草といふ。うつし心といはむ枕詞。○うつし心 移し心にて、變り易き心をいふ。○色ことに 色殊になり。格別に色の深きをいふ。

一首の意は、いやもう貴方は、逢ふと親切さうに、口先ばかりサよいワイ、月草のやうに移り易い心は、月草の色の、一時あざやかであるやうに、その氣色が、今は大分、深く見えてサとなり。

(評)月草の縁にて、色殊にと云へり。心の色などいふ語の類なり。人とは、差別の語なれば、誠ある自身を誇りて、他をおとしめたる寓意、隱然たり。

○

いつはりのなき世なりせはいかばかり人の言の葉嬉しからまし

(釋)一首の意は、嘘といふものの無い世の中であらうならば、貴方の、このやうに親切に云うて下

(六六五)

さる詞が、この位嬉しい事であらうぞとなり。

(六六六)

(評)まかし、とかく嘘の世の中あれば、人の詞を、うかご信じて、嬉しがられもせぬの餘意あり。狂熱の血を湧すものなく、思索の頭を解くものもあき、平々凡々たる茶飯の言の如くなれども、一誦再誦、必ず人をして同感に禁へざらむ。想ふに、平凡の真なるものならむ。六帖に、世の中に絶えて偽なかりせばたのみぬべくも見ゆる玉章
同一の構想ながら、巧拙、月籠の差あり。措辞の、忽にすべからざることを、それかくの如きか

○

いつはりと思ふものから今更にたがまここをか我れは頼まむ

(釋)一首の意は、例の嘘ぞとは思ひおがらも、やはり、それを頼みにまて居るワイ、假令、外に誠ある人があるとしても、心移して、今更誰れが誠をサ、自分は頼みにはせうぞ、決して頼みにはまはすまいワイとあり。

(評)貞女の、兩夫にまみえざる決心なり。この誠意は、空言する、不誠實なる人の心に、好個の反映を成して、一段の光彩を添ふるを覺ゆ。真にこれ、血性の發する所なれば、沈痛にして、怨意おのづから深し。かの口蜜の如き輕薄の兒、いかで羞死せざらむや。上の歌に比するに、一步思索の境に足を進めたるものなり。偽と、誠との對照の如きは、そもく、語言の末のみ。拾遺集戀五に再出したり。詞書にも、字句にも、異同無ければ、偶然の重複なるべし。

秋かぜに山の木の葉もうつろへば人の心もいかにぞ思ふ

素性法師

(釋)うつろへば 花や木の葉には、色の變りて散るをいふ。

一首の意は、この頃の秋の風に、山の木の葉が變つて行くを見れば、頼みに思ふ人の心も、どうあらうぞ、變りはすまいかとサ、氣遣ひに思はる、ワイとあり。

(評)時節柄故、いかゝあらむと疑へるは、素より頼もしげなき人の心を、下に歎けるものなり。以下六首は、皆この意あり。

寛平御時きさいの宮の歌合のうた 友 則

蟬の聲聞けばかなしな夏ごろもうすくや人のならむと思へば

(釋)○かなしな はてのなは嘆辭。

一首の意は、蟬の聲を聞けば悲しい事よ、何故といふに、はやまことの秋が来るばかりか、心の飽きさへ来て、夏の衣の薄きを覺ゆるやうに、人の契が薄くならうかと思へばサとなり。

(評)夏衣は、時節の景物を以て、薄くなるといはむ序に用ゐたるなり。夏衣の薄くなるは、その薄さを感じることにて、即ち秋の來ることを、暗に意味せり。宣長が、蟬の羽衣の縁をかねてと入るは、非なり。

結句、六帖に、ならむとすらむとあり。

(六六七)

題あらず

よみ人あらず

(六六八)

空蟬の世の人ごこのあげければ忘れぬもののかれぬべらなり

(釋)○空蟬の世といはむ枕詞。春上「うつせみの世にも似たるか云々」の條に既出。

一首の意は、世間の人の噂が繁くあるから、互に契りたる心は忘れはせぬものの、おのづから世間を憚つて、逢ふ事も遠退いて、二人の中も離れてままひさうなる様子だワイとなり。

(評)これ決して杞憂にあらず。歌はたゞ言なり。

あかてこそ思はむなかは離れなめそをだに後の忘れがたみに

(釋)○忘れ形見 忘れ難みに、形見をかけたる語。忘れにくき記念の物をいふ。

一首の意は、思ひ合つて居らう中は、互に飽きの來ぬうちにサ、別れてままらワイ、飽きが來て別れては、思ひ出しても呉れまいから、それよりは、今のうちに別れて、今のこの、互に飽かぬ所をなりとも、後々の忘れ難い記念にせうわサとなり。

(評)痴話が嵩じての喧嘩も、度重なりては、自然末の見込もなくなる道理なり。男は流石に、何とも思はねども、氣の小さき女にありては、縁を切るならば、愛想盡しをせぬ今のうちになど、悲観することありぬべし。作者は婦人ならむ、結句、形見にせむの意なるを、いひさしたり。

忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ悲しき

(釋)○ありしよりけに けには、殊にの意。

一首の意は、あのやうに、不實なる人の事は、もう忘れてままはうと思ふ氣が附くにつけて、さて、絶えて後は、さうであらうかと、又心細くなつて、今までよりは猶増つて、早、何やらサ悲しいワイとあり。

(評)伊勢物語に、

忘らむと思ふころのうたがひにありしよりけに物ぞ悲しき

は、これを少し換へて、物語を添へたるならむか。玉葉集戀四に、

忘れなむ今はと思ふ時にこそありしにまさる物思はずれ

は、二三、文字に出入はあれども、全く同歌なり。作者は、詠人えらすなれども、詞書に、謙徳公に贈れる歌とあり。謙徳公は、圓融帝の朝の一條攝政藤原伊尹公なれば、時代差ひたり。いかい。或は、折に打合ひたるまゝに、古歌を書きて贈れりともいふべし。後撰集雜二に、上句、これと同じくて、下句「言の葉さへやいへばゆゝしき」とある歌の詞書に「みそか男えける女を、荒くはいはで、問へど物も言はざりければ」とあり。この詞書の意、大やう、これの趣に合へり。

(六六九)

わすれなむわれをうらむな時鳥人のあきにはあはむともせず

(六七〇)

(釋)○人のあき 飽きに、秋をかけたなり。

一首の意は、もう貴方の事は忘れてしまはうワイ、さりとて、必ず私を恨んでくるなよ、時鳥も、人の心の飽きといふ名の、秋の時節には逢はうともせず、夏のうちに去つてしまふやうに、私もうかくとして居て、人の心に飽きの來る時節に逢はうとは思はぬワイとなり。

(評)むとき目に思はぬ先に、此方より身をひかむと思ひあれる、よくの事なるべし。飛花の如き遊蕩子、そもいかにか、聞くらむ。

この歌、兼輔集に入りて、女に贈れるなり。されども、兼輔は、選集當時の人あれば、詠人まらずに、せられむやうなし。

○

たえずゆく飛鳥の川のごみなば心ありとや人のおもはむ

此歌、ある人の曰く、なかとみのあづま人がうたなり。

(釋)○飛鳥の川 上に既出。

一首の意は、絶えず流れて、遂に淀みたることの無き飛鳥川の、忽に淀むといふやうに、何時も絶えず通ふこの自分が、餘義ない事情の爲に、暫時も通はぬ事がありたらば、絶ゆる心のあること、かの人が思ふであらうかとなり。

淀川のごむと人は見るらめごながれて深き心あるものを

(釋)○淀川 山城攝津を流る川なり。○ながれて 長らへてに、流れてを寄せたり。

一首の意は、この頃まばら、繁くもえ通はぬを、淀川の淀むやうに、何ぞ此方の心に滯がある、貴方は見るであらうけれども、此方は、未長う何時までも思ふ、深い心があるものを、まばら遠退いたりして、淀むと思つて下さるなとなり。

(評)人目人言を憚りて、まばら躊躇へる頃ほひなるべし。初句は、よごむの序、ながれて深きは川の縁語なること、勿論なり。但、流れて深きは、淀川の實景を思へるか。

(六七二)

(評)障る事ありて、え行かぬ折に詠めるなるべし。人の思はむと氣遣ふ處、萬斛の情味、湧然として生ずるを覺ゆ。風調また古に近し。果して、萬葉集七、詠者不詳の歌に、たえずゆく明日香の川のごめらば故しあること人の見まくに

とあるは、同想同型なり。この訛りて傳はれるにや。通ふことの滯るを、川の縁にて、澱みと轉義したり。四句、一本に、心あるとやとあるにつきて、田中道麿は、心あることやの文字の落ちたるをらむといへり。宣長は、これを贊して、この歌古き姿なれば、必ず然るべしと云へり。左註、例の據り難くやあらむ。

○

索性法師

(六七二)

そこひなき淵やはさわぐ山川のあさき瀬にこそあだ波は立て

(釋) ○そこひ 退方ソキエの轉語にて、極み、果てなごいふ意。○あだ波 役にも立たぬ波の意。

一首の意は、底の隈も無いやうなる深い淵がサ、波の騒ぐ物か、いや騒ぎはせぬワイ、山川の浅い瀬にこそ、さわぐと仇なる波は立つワイといふが、表面の意にて、私のやうなる淵のやうに深く思ふ者は、口へ出して何かと云ひはせぬが、貴方のやうに、眞實らしく、何かといひ騒ぐは、詰り山川のやうなる、浅い心の仇浪をよごいふが、裏面の意なり。

(評) 表面は地理的の報告の如くなれども、實に不可動の眞理の籠れるありて、諷諭として、多くの場合に適合す。これをいち早く着眼して、詩材に運用したるは、大に多とすべし。今は、我が戀に餘りはづまぬやうに、人の云へるを承けて、借りて以て答へたるなり。字句精鍊にして、含蓄窮り無し。

初句、六帖に、おほかけのとあり。結句、索性集も、六帖も、うは波は立てとあり。景樹は、これを執したれども、いかゞ。うは波は平凡にて、何の事もなし。あだといへるに、かの言のみよき人にさし當てたる趣ありて、をかしきをや。

上ある「たえず行く」淀川の二首は、我が絶えをわが心苦しく思へるなり。この歌より「陸奥の三首までは、人より恨み答めたるを受けて、詠めるなり。

よみ人あらず

くれなるのはつ花染のいろ深くおもひしこゝろわれ忘れめや

(釋) ○はつ花染 紅花ベニバナは、房の數多あるが中に、その中央なるが早く咲きて、よき色なる故に、初

花染の色深くと云へるなり。

一首の意は、紅の初花染の色の深いやうに、初戀に深く思ひ染めたりし心を、如何なる事であればとて、私は忘れうか、いや決して忘れはすまいワイとあり。

(評) 萬葉集十一、

うまびこの額髮ヌカガミ結ムスへる染木綿ソメヅツの染めしこゝろはわれ忘れめや

と同意にして、只その序を殊にせるのみ。體調は蒼古。

六帖に、三句、色いろささるも、結句、われは忘れずとあり。

かはらの左大臣

陸奥ムサシの志のぶもちすり誰れ故に亂れむと思ふ我れならなくに

(釋) ○志のぶもちすり 信夫振摺か。信夫は、岩代國の地名にて、その頃は、大やうに「みちのくの志のぶ」といひて、未だ郡名とならず。和名抄に、信夫郡見えず。後に至りて、郡名となれるならむ。信夫山、信夫の里など、名高し。顯昭曰く、この地にて、古へ、布帛に、忍草の莖葉を、種々の色に摺りたる物にて、其の文亂髮の如く、振れる状態れば、振摺といひ、地の名

(六七三)

をかけては、信夫振摺ともいふ。又一説、信夫郡に、大なる石二つあり、其の面平にして、も
 ちのやうなる文あり。それに、藍もて摺りたる布を、年貢に昔奉りたるを、狩装束などにまた
 るなりと。げに東鑑には「信夫毛地摺千端」と見えたり。古川辰が東遊雜記に「陸のくににて、
 福島^の里にて、沼崎某といふ人にあひて、文字摺石の事を問ひしに、その人のいひけらく、今
 それとてあるは諾け難し。想ふに、古へこのあたりの人、石の面の平なるに、色よき草花を並
 べおき、藤布を覆ひて、丸き小石をもて上より摺りて、草花の色を、布へ移ましなるべし。今
 も、こゝより十里もをちの、出羽近き所などにては、貧しき者ども、まかするを見しなり。信
 夫郡なる面の平なる石は、皆文字摺石ならむといらへき」とあり。或は然らむ。猶他の諸説を
 採録せむ、荷田東滿は、まのぶは地名にあらず。古記に、産出の證明なしといひ、眞淵は、こ
 の意を演べて、伊勢物語に「春日野の若紫の摺衣まのぶの乱れ限知られず」とある、素より地名
 ならむには、打任せて、信夫の乱れといはれずといひ、景樹は、顯注に定かに云へるも、東鑑
 に、陸奥なる信夫摺の布を供養せし事見えたるも、この歌や、伊勢物語の歌やに本づきて、か
 の里に、あやしき摺布を出だましにや。その形なりとて傳ふるを見るに、眞の忍草にあらず。
 眞のは、被^キの葉の形またる物にて、まか摺らるゝ物ならず。只青色に摺りたるを、まか云ふな
 らむと云へり。されども、皆想像の説にして、却りて確證なければ、姑く顯昭の説に従ひぬ。
 ○我れならなくに、なくはぬの延言。

一首の意は、陸奥の信夫振摺の模様の亂れて居るやうに、私の心は亂れたるが、ソレヤ貴方よ
 り外の、誰れ故に、心を乱さうと思ふ浮氣なる私ではありませぬ、皆貴方故に亂れたる心なる
 に、推量して下されよとなり。

(評)上にも云へる如く、仇なりなど、人に疑はれたるに答へたるなるべし。初二句は、亂れむに係る
 序なること論なし。廣蔭が、まのぶに、重き心をあらせて、君を思ひ憫^シ故に、心の亂れたる
 を、推して給はれと釋き做せるは、勢語の「春日野のわか紫の摺衣忍^シのみだれ限知られず」
 の意を以て、これを云へるにて、差へり。勢語のは、其の意素より異りて、これに關はるべきに
 あらず。歌は、流石にやむとなき血胤におはせし、この人の氣品表れて、高古の調仰ぐべく、
 まかも、意詞の幽婉なる、おのづから延喜時代に見るを得ざる風調なり。上乘の作と稱せむ。
 四句、伊勢物語には、亂れそめにしとあり。

よみ人あらず

思ふよりいかにせよとか秋風になびくあさぢの色ことになる

(釋)○思ふより 思ふことより外にの意。○あさぢ 淺茅なり。茅はたけ立低く、鬆疎に生ふる故
 にいふ。○色 心の色をいふ。淺茅につけては、常の意なり。

一首の意は、自分は、思の限を思つて居るが、まだこの外に、どうせよと云ふ事やら、秋風に
 靡く淺茅の色の變るやうに、あの人の様子が變つて來るワイとなり。

(評)わが誠の盡し甲斐無きを、専らいへるに、怨意隱然たり。秋風に靡く淺茅は序ながら、よくこ

の物の趣を状し得たるが如し。
二句、顯註に、いかにせよとてあり。

(六七六)

ちゞの色に移ろふらめごあらなくに心し秋のもみぢならねば

(釋)○ちゞ 秋上「月見ればちゞに物こそ云々」の條に既出。○うつろふらめご どの辭濁るべし。

○あらなくに えられぬにの意。かやうの場合に、れの音の略かる例多かり。なはぬの延音。

一首の意は、人の心は、定めてあちこちと、いろ／＼に移ることであらうけれど、その心は、

秋の紅葉でないから、色の見えぬ故、移ろふ様子が、表面には知られぬに、何とも致し方が無

いとなり。

(評)心の移ろふといふより、紅葉を聯想して、其の縁語もて、心の動きてさまざまなるを、ちゞの色

にと具体的に轉義したり。初二四五三と、句を次第して、聞くべし。戀五、小町、

色見えで移ろふものは世の中の人のこゝろの花にぞありける

と同一の着想、但、おのづから軒輕の分あるは、いふまでもなし。

小野 小町

蟹のすむ里のゑるべにあらねごもうらみむこのみ人のいふらむ

(釋)○ゑるべ 知る方にて、案内者あり。○うらみむ 浦見むに、恨みむをかけたなり。

一首の意は、海邊の海人の住む里の案内者に對つてこそ、浦を見やうとはいへ、自分は、その案

内者では無いけれども、何故に、うらみやう怨みやうとばかり、かの人のいふのであらうぞと

なり。

(評)男の血眼になりて、ひたすらに逢はば恨みむといひおこえたるを受けて、「馬鹿／＼シイ、浦

の案内者デハアルマイシ」と茶かして、空恍惚けたる虚實の對照、想ひ遣られてをかし。うら

みむの洒落は、この頃は、既に二番煎じにて、新奇といふべからざれども、海人の住む里のゑ

るべを聯想し來りて、趣向を立てたるを、手柄とす。これら、この作者の家風なり。

志もつけのをむね

曇り日の影ごしなれる我れなればめにこそ見えぬ身をば離れず

(釋)○曇り日 空の曇りたる日なり。○影ごしなれる 例の瘦することを云へり。

一首の意は、曇り日には、人の影はありても見えぬが、戀に瘦せて、その曇り日の影のやうに

サ、なりたる自分なれば、それと目にこそ見えぬ、影の身を離れぬやうに、心は常住、貴方の

身を離れはせぬワイとなり。

(評)戀する人は、神經過敏の患者なれば、かゝる繊細なる事をも考へ付くなめり。

初句、顯註に、くもる日のごあり。

(六七七)

つらゆき

色もなき心を人にそめしより移ろはむこはおもほえなくに

一首の意は、色の物こそ、染めても變ることのあれ、色もない自分の心を、貴方に染み込ませたりしからは、何時までも變らうとは思はれぬにサ、さう思うて下されとなり。

(評)我が心を疑へる男の許にいひやれるならむ。景樹が、戀の的は、移ろはむとは更に思はずなど、たしかに云ふべきなれど、色もて染むる方にいひなしたれば、姑くそを評する側になりて、然は思はれずと弛ぶる方に、おもほえなくにと詠み下せりと評せるは、當れり。色の縁語もていひつけたる、例のことなり。

よみ人あらず

めづらしき人を見むとや志かもせぬわが下紐の解け渡るらむ

(釋)志かもせぬ 然も爲ぬなり。爰にては、下紐を解くことをさせり。

一首の意は、久しく逢はぬ、珍しい人を見やうと云ふ事なか、解きもせぬ、自分の下紐が、かうも解くるのであらうワイとなり。

(評)つれなく中絶えたりし人も、この頃は思ひ出してくるゝにやと嬉しみたり。下紐の解くる人を、人に戀ひらるゝ兆とする事は、奈良時代の遺風あり。且風調の上よりも察するに、作者は、こ

の朝となりての風の人ならむ。

是より以下五首は、立返りて戀ふる意なり。

かげろふのそれかあらぬか春雨のふる人みれば袖ぞ濡れぬる

(釋)○かげろふの かげろふの如くの意。かげろふは、糸ゆふなり。陽炎、野馬、遊絲とも書く。空中にさまよふ水蒸氣なれば、見えみ見えすみするが故に、それかあらぬかといふへ續けたり。○ふる人 故人なり。春雨の降るより續けたり。

一首の意は、空に立つ陽炎のやうに、さうかとも思はれ、さうで無いかとも思はれて、春雨の降るといふ、古い馴染の人を見れば、春雨に濡るゝやうに、涙に袖が濡れたワイとなり。

(評)李益の詩に「問姓疑初見、稱名想舊容」と作れるは、事實を叙べたるなり。これは、さばかり忘れ果てむ中らひあらぬと、久しくて逢へるが、夢のやうにおぼめかるゝより、それかわらぬかと誇張して云へるのみ。袖の濡るゝは、蓋し嬉し涙なるべし。かげろふも、春雨も、序ながら、時節の景物を用ひたるなるべし。

四句、普通本、ふる人あればとありて、奥儀抄にも然り。されど、意通じ難ければ、六帖、及び顯註に、見ればとあるを采れり。猶奥儀抄には、結句、袖ぞひぢぬるとあり。

堀江こぐたな無し小舟漕ぎかへりおあじ人にやこひ渡りなむ

(六八〇)

(釋)○堀江 攝津國の難波の堀江なり。堀江川とも云へり。日本紀に、仁德天皇の御時掘らしめ給ふこと見ゆ。○たな無し小舟 小さな舟には、舟棚の無きなり。故に云ふ。和名抄に「柁、和名不奈太那、大船旁板也」とあり。

一首の意は、堀江を往來する棚無し小舟が、幾度も同じ川筋を上り下りするやうに、又も立反つて、自分を一旦見捨てたる、同じその人に戀ひ焦れて、月日を経つる事であらうかとなり。

(評)上句は序あり。舟を以て比興したること、詩の鄙風に、

汎彼柏舟、亦汎其流、耿々不寐、如_レ有_レ隱憂、微_レ我無酒、以_レ敖以_レ遊、

とある趣に似たり。燃杭につく火、我れながら、情に脆き恐かなる所作と知らざるにあらねども、心の我に従はぬをいかにかすべき。はかなき運命に翻弄せらるゝを長嘆せる意、言外にあり。どごといふこと重複したる。不用意の誤ならむ。

六帖に、初句、入江とく、下句、おなじ人のみおもほゆる哉とあり。又、六帖の一本には、四句、戀ひ渡るらむとあり。

伊勢

わたつみとあれにし床を今更にはらはば袖や沫と浮きなむ

一首の意は、人に見捨てられたる悲しさに、涙が海をなして、その海の荒るやうに、荒れてまぢうたる床なるに、今更その人に逢ふとて、その床を袖で拂はうなら、海に沫の浮くやうに、袖が涙の海に浮くであらうかとなり。

(評)一度心變りせし人には、逢はぬがましの意を、婉曲に敷衍したるあり。涙の落つるを、わたつみとあれにしと誇張したるは、上に「敷妙の枕の下に海はあれ」と云へると、同巧なり。さて、海の縁にて、沫と浮きなむと設けなしたる、例のこの御の口吻にて、や、妄想に近きが如し。床を拂ふは、人待つ時の仕業にて、元來塵を拂ふが主なれども、「眞袖もて床打拂ひ君待つ」となすと、萬葉集にも見えて、塵をいはずして聞えたり。

この歌、後撰集戀三に再出して、詞書に「宮仕まける女、程久しくありて、物いはむといひ侍りけるに、遅くまかり出でければ」とありて、枇杷左大臣、

宵の間にはや慰めよいその上ふりにし床も打拂ふべく

とある歌の返しとて詠める、伊勢の歌なり。家集にも、まかあり。この事情を明らかにすべく、後撰に再録せしにや。

結句、六句、家集共に、沫と消えなむとあり。後撰は、本文と同じ。

つらゆき

いにしへに猶たちかへる心かな戀しきここに物わすれせで

(六八一)

(釋)戀しきこと ことは事なり。毎にあらす。

一首の意は、久し振に、昔の人に逢へば、そのつれなさは忘れられて、その戀しい事には、物忘れをせずして、いろ／＼嬉しかりし事を思ひ出して、昔の馴染みて居たりし時に、今もやはり立戻る、自分の心である事よとなり。

(評)我れを見捨てたりしつれなき人の、物忘れしたる無情を反映したり。

結句、六帖に、物忘れしてごあり。これに従へば、四句を、戀しきことにと濁りて、人の戀しき度毎に、年頃のつらさをも物忘れして、逢ひ初めし古へに、猶立返る心なるよと解せらるべし。されども部立に従へば、猶本文の如くあるべきなり。

人を去のびにあひ知りて、あひ難くありければ、その家のあたりをまかりありきけるをりに、雁のなくをきつて、よみてつかはしける、
大さもののくろぬし

思ひ出でて戀しき時は初雁のなきでわたると人知るらめや

(釋)一首の意は、思ひ出して戀しい時は、あの初雁の、今鳴いて通るやうに、ここの門を泣いて私を通るといふことを、この家の内の思ふ人が知らるか、いや知りはずまいワイとなり。

(評)天飛ぶ雁の初聲は知るらむを、わが泣き渡りながら知られざるを、くちをしみたり。せめても

の心遣りに、その家の前渡りするは、詩の鄭風に、

東門之墀、茹蘆在阪、其室則邇、其人甚遠、

とある趣に似て、人情は、東西一軌なるを知るべし。戀三、貫之、

忍ふれどこひしき時は足引の山より月の出でてこそくれ

は、同想にして、詩材を殊にせるのみなるが、熱情、貫之のに優ること一等なるが如し。蓋しこの作者の傑作ならむ。

右のおほいまうち君、住まずありにければ、かの昔おこせたりける文ごもを取集めて返すとて、よみておくりける、

典侍藤原よるか朝臣

たのめこし言の葉今は返してむわが身ふるればおき所なし

(釋)右のおほいまうち君云々 右大臣源能有公が、通ひ來まさずなりければ、昔の文殻を集めて返すとて、添へて贈りける歌となり。○言の葉 書簡を云へるなり。○ふるれば 舊さるればといはむ程の意。

一首の意はこれまで、末頼もしさうに云うて下されたりし御文も、もう御戻し申しませう、私の身が、古臭う飽かれましたれば、このやうなる艶なる御文は、私方に置所が御座りませぬワ

いとなり。

(六八四)

(評)花やぎたる言の葉ごもは、今の舊されたるこの身にはふさはしからねばと、嫌味を並べたる、何處までも、女の性根なり。其の實をいはば、風月定情の、さる艶詞ごもの、目に觸るゝにつけ、思ひ出の種となりて、「形見こそ今は仇なれこれなくば忘るゝ時もあらまじものを」の悲境に淪落して、斷腸に堪へざるより、屑く、否寧ろ當てつけに、返すべく思ひなれるならむ。書簡を無形名詞なる言の葉と轉義し、さてそを返してむといへる、をかし。諸註、我が身すら置所なきを聞かせたりと云へるは、非なり。さては、意兩端に岐れて、明晰を缺かむ。

かへし

近院の右のおほいまうち君

今はこてかへす言の葉拾ひおきておのが物から形見とや見む

(釋)〇物から 物ながらの意。

一首の意は、今はもう見限りたりと云うて、お返しなされたるこの文を拾ひ上げて置いて、もと自分の物ながらも、一旦貴方の手に觸れたる物故、貴方の形見と思つて見ませうかとなり。(評)彼れは示すに絶を以てしたるに、これは戀々として、故を懐ふ情を叙べたり。對照おもまろし。おのが物からの形見、才人の言なり。

題をらす

よるかの朝臣

玉梓の道はつねにもまどはなむ人をとふともわれかと思はむ

(釋)〇玉梓の 玉梓は美稱、梓は、古の鉾は、木もて造れる物なれば、偏旁、木に従へり。こは、道といはむ枕詞に用ゐたり。眞淵は、その冠辭考に、玉梓の身と、ミの一言にかゝれるなるべしといひ、宣長は、道のミは美稱にて添へたるなれば、枕詞は、チへかゝれり。古は、戈の柄に取持つ便に、乳のありしなるべしといひ、雅澄は、古の戈は一本なれば、身のあるべき筈なく、又これは、ミチの二言にかゝれるものと覺し。玉梓の圓と云ふを、通音なれば、ミチにかけたるなるべし。さるは、玉は美稱にあらで、鋒を圓く、石劔などのさまに作成したる形よりつけたるならむと云へり。以上三説中、眞淵の説宜し。櫛柄に對して、又渡を身といはむに、更に差はじ。雅澄の説誣ひたり。

一首の意は、毎夜餘所に御通ひなさる貴方が、今夜珍しくこれへ来て下されたるは、定めてお門違へならむも、貴方の御通ひ道は、いつも戸惑ひして、取違へて下されて貰ひたいワイ、さらば、餘の人の所へ志してのお出も、亦私の所に來て下さるゝものかと思ひませうワイとなり。

(評)迂餘曲折、暗に、諷誣の意を寓せり。貫之集なる。

月影に道まどひしてわが宿にひさしく見えぬ人も見えなむ

などの隣なり。六帖に、「文たがへ」の題に収めたるに據りて、人の許へ行くべき文を、門違ひ

(六八五)

して、常にも迷ひ来よかし、せめて我かと思はむの意に解きたる説もあれど、非なり。さは聞えず。六帖の誤なるべし。

(六八六)

よみ人あらず

まてこいはば寝ても行かなむるひて行く駒の足折れ前の棚橋

(釋)○駒の足折れ 駒の足を折伏せよの意。駒は、もと小馬の義にて、齡弱き馬を云ふことなるが、大方、馬と云ふも同じことに用ゐらる。折れは、爰にては挫折の意にあらず。祝詞、萬葉集などに、鹿自物膝折敷とある折敷とおなじ。○前の棚橋 家の前なる小川に架けたる棚橋なり。棚橋は、顯昭は、板にて、棚のやうに柱立てて、渡したりといひ、景樹は、たゞ、そとえたる橋にて、大方は、柱も無き、一枚の板打渡したるなるべしと云へり。いづれにてもあるべし。一首の意は、まあ暫く待つて下されと云ふからには、今宵は寝てまあ、往つて貰ひたいワイ、それを聞かずに、無理に往かうとする、あのお方の駒の足を爪づかせて、止めて呉れい、門の前の棚橋よとなり。

(評)小やかなる門川の流に、棚橋打渡せる趣は、田舎ならずば、京も場末なるべし。車にも乗らぬ地下の、物げなきわび人か、或は、公達殿原の、若く好いたるが、志あつき忍びありきか、いづれにまれ、遙なる道を、馬にて通ひ來れるならし。たましく、もとより障る事ありて、さらすは、口説なき嵩じて、俄に歸りなむとて、馬引寄せて、這ひ乗りつゝ出で行く後影を見送りながら、

詠みけるならむ。假初に、板打渡したる、ふつゝなかる棚橋、動もすれば躓き易し。即ちこの棚橋を、有情に取做して、かの無情なる人の駒の足折れと思ひ寄れり。構想すべて詩的、筆また豪宕にして、奇氣あり。四句に命令を用ゐ、結句を體言に止めたるが、専らこの矯健の調を成す所以なり。考ふるに、この歌、よの常の婦人の口吻に類せず。餘程雄々しき氣性の者なりけむ。讀者不知のうちにては、その中期以前に屬すること、明らかなり。千秋が、これを誹諧の類かと評せるは、清旨の言にして、采るに足らず。三句、まひて行くの下に、人のといふ語を省きたり。

中納言源のぼるの朝臣のあふみのすけに侍りける時に、よみてやりける、
閑院

相坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆきゝをなくくも見め

(釋)あふみのすけ 近江の國の介にて、國司の次官なり。○相坂のゆふつけ鳥 戀一「相坂のゆふつけ鳥も云々」の條を参照すべし。

一首の意は、相坂の關に放してある、木綿附け鳥といふ雞は、貴方が、近江への往來の度毎に、啼きつゝお姿を見るが、私の身が、その木綿附け鳥ならばこそ、泣きつゝも、御往來なさるお姿だけは、餘所なからも、拜見致さうに、木綿附け鳥ならば、それさへも叶はぬ事が、恨めしいワイとなり。

(六八七)

(評)例の假設の構想は、敢て珍しとはあらねど、この集中、木綿附は鳥四首のうちにては、白眉なるべし。この助辭、力ある用法なり。必ず言外の餘意を聞くを要す。

題あらす

伊 勢

故里にあらぬ物からわがために人のこゝろのあれて見ゆらむ

(釋)○故里 都址なり。○こゝろのあれて 心の荒るゝは、心の變るをいふ。

一首の意は、故里こそ荒れても見ゆれ、かの人の心は、故里では無い物ながら、何故に、自分の爲には、御心が荒れて、うご／＼しう見ゆるのであらうぞとなり。

(評)心の荒るゝの聯想より、故里を傍證に引出でたり。土佐日記に、

聞きしよりもまして、いふかひなくぞ、こぼれやぶれたる。家を預けたりつる人の心も、あれたるなりけり。

と、貫之が書けると、同一の著想。まかも、何故に荒れて見ゆらむと訝り疑へるが、この一ふしなり。

籠

山がつの垣ほにはへる青つゝら人はくれごもことづても無し

(釋)○垣は 垣といふに同じ。ほは秀の義。○青つゝら 玉かづらと同じ。上なる「玉かづらはふ木

あまたに云々」の條を参照すべし。これを采るには、手繰り寄せて取るが故に、その縁を思ひて、

來れごもといへり。○ことづて 言傳への約。今云ふ傳言なり。

一首の意は、山賤の垣ほに這うて居る青葛を、繰ると云ふやうに、このあたりへ、かの思ふ人は、度々來れごも、自分の方へは寄り付かぬばかりか、一向言傳も無いことワイとなり。

(評)さて／＼、氣強い人かなの餘意あり。上句は、くれといはむ序なること、勿論なるを、廣蔭がわが居所を、山賤の垣ほに比喻したるやうに釋きなせるは、鑿なり。

六帖には、下句、たづね來れごも逢ふよしもなしとありて、作者の名なし。

さかゐのひごさね

大空はこひしき人のかたみかは物思ふごこにながめらるらむ

(釋)○かは 反動の助辭。○ながめ 物思ひつゝ、諦視すること。

一首の意は、あの大空は、戀しい人の形見かまあ、形見でも無いワイ、それを何故に、その人を戀ひ慕うて物思ふ度毎に、このやうに、空が詠めらるゝのであらうぞとなり。

(評)上句にまづ、意表の落想を著けて、人の視聽を聳し、下句に、その謂をこゝわれり。これ詞人の慣手。

よみ人あらす

あふまでの形見もわれは何せむに見ても心のなぐさまなくに

(釋)〇何せむに 下に、ごいめおきけむごいふ詞を省きたり。

一首の意は、かの人か、この間、又逢うまでの形見にと残し置かれたるこの物も、自分は、何にせうとて、留め置いたのであらう、これを見ても、戀しう思ふ心が、一向休まらぬのにサ、となり。

(評)いづれ逢はねば、この胸のをささらぬ由に歸着す。形見に紛るゝばかりの、淺き思ふらざるを歌へるなり。

親のまもりける人のむすめに、いご志のびにあひて、物らいひけるあひだに、親のよぶごいひければ、いそぎかへるとて、裳をなむぬぎ置きて、いりにけるその後、裳をかへすとてよめる、

おきかぜ

あふまでの形見とてこそとゞめけめ涙に浮ぶもくづなりけり

(釋)親のまもりける云々 親の守りかしづき居れる、大事の人の女に、密に逢ひて、話など去てありけるうちに、腰元共の來て、親が喚ぶごいひけるにより、女の周章て、去ぬるとて、裳を脱ぎ置きて、奥へ入りにけるなり。即ち、その裳を取上げて、持ち歸りけるを、その後返すとて、詠める歌とぞ。物らは物等なり。裳は婦人の禮服にて、腰に襲ふ褶なり。〇もくづ 藻屑なり。

裳を寄せたり。

一首の意は、この裳は定めて、又逢ふまでの形見に見よとての事です、留め置かれたのであらう、まかし、この裳を見れば、貴方の事が思ひ出されて、涙が甚くこぼるゝから、その涙の海に浮く藻屑のやうなる、つまらぬ裳であつたワイ、それ故お返し申しますとぞなり。

(評)折角の形見も、たゞ涙の種となるのみなればと云ふことを潤飾したり。既に涙に浮ぶといひ、更に藻屑を取合せたるに、海の意、おのづから廻護映出せられたるなど、織なり、細なり、浮華なり。

題を知らず

よみ人知らず

かたみこそ今はあたかれこれなくば忘るゝ時もあらまし物を

(釋)伊勢物語に「昔あだなる男の、形見とておきたる物どもを見て」と詞書ありて、この歌あり。〇あた 清むべし。仇讐の義。

一首の意は、戀しい人の残し置きたる形見がサ、今は却て、自分の爲には、かたきではあるワイ、何故といふに、これが無いならば、少しは忘るゝ時もあらうものを、なまなか、この形見がある故、見ては思ひ出しゝして、忘れぬによつてサとなり。

(評)勢語の詞書、よくこの事情を説明せり。なき程の形見に見よとて、男の置きたる物のありけるに、その男、あだ心にて、忘れて來ずなりにける時に詠めるなり。今はの一語、心長く堪へに堪

へたりし趣も見えて、下し得てよし。すへて、情真にして、語勢なり。故に、よく人の肺肝に入りて、一唱三嘆に堪へざらじむ。逸品と稱するに足らじむ。

(六九二)

古今和歌集卷第十五

戀歌五

五條のきさい宮の西のたいに住みける人に、ほいにはあらで、物いひわたりけるを、月のとをかあまりになむ、ほかへ隠れにける。あり所はきゝけれど、え物もいはで、又の年の春、梅の花ざかりに、月のおもしろかりける夜、こぞを戀ひて、かの西のたいにいきて、月のかたぶくまで、あばらなる板敷にふせりてよめる。

在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもこの身にして

(釋)五條のきさいの宮は、仁明天皇の皇后藤原順子を申す。文徳實錄、嘉祥三年四月の條に「皇大夫人、移御五條院」と見えたり。西のたいは、中昔の家造に、寢殿を正中に、東西に對屋を建つ。その西の對屋なり。ほいにはあらで云々のほいは本意にて、即ち、初めより、この女をこ

(六九三)

思ひ入れたるにはあらで、何となき事のついでに語ひつきて、志の深くなれるなり。あばらなる板敷は、端つ方の板敷の、戸障子など建てめぐらさぬをいふ。あばらは荒顔の義にて、四壁無き家、即ち亭を、和名抄に「アバラヤ」と訓めるに知られぬべし。さて、この詞書も、伊勢物語の撰入か。勢語を解する者、多く、この西の對に住みける人を、五條后の姪なる藤原高子の事とし、外へ隠れにけるを、其の兄基經などの計ひにて、清和帝の後宮に奉りし事としたるは、大鏡をはじめ、後世の書に準據あきにはあらねど、元來、傳説にとまりて、確たる事實と見難ければ、拘泥して釋かざるを穩、なりとす。○月やあらぬ春や昔の春ならぬ 二つのやは、反動の辞なり。舊註に、疑辭と見たるは、非あり。昔は、廣き意味にて、過去をいへり。

一首の意は、今のこの月は、もとの月で無いか、やはりもとの通りの月である、今のこの春はもとの春で無いか、やはりもとの通りの春である、すべて、何もかも、去年と變りたる事はないに、只我が身一つばかりは、もとの身であつて、まかも、身の上の、去年とは變りはてたる事よとなり。

(評)あはれ、花天月地、春色は依然たり。失意失戀の身、これに對して、その感愴いかにぞや。かく、自然景物を借來りて、境遇上の變化に對照せしむるは、感哀を永からしむる詞家の慣手段にして、趙嘏の詩に、

獨上江樓思渺然、月光如水水連天、同來翫月人何處、風景依稀似去年
と作れるも、同一軌なり。さて、わが身一つはのはの辞、暗に、わが身以外の他の一つの變れる

ことを反覆せり。只その一つの變れるが故に、月も花も、わが身も、もとのまゝながら、もとの物とも、思はれざるに歸著す。初句、月や昔の月ならぬといふべきを、二句の辞様に譲りて略き、結句、まてといひさして、餘意を含めたるなど、省筆の法を盡せるは、語簡に味永き所以なり。序文に、この朝臣の歌は、意餘ありて、詞足らずと評せるは、よく病處を穿ち得たるが如しと雖も、この歌の如きは、斷じて、その權衡に上すべきにあらず。上句の月や、春や、又あらぬ、ならぬの同語同音の重疊反復、下句の身の語の重疊など、聲調の和諧を窮め、又、上句なる二つの反動のやの辞は、下句のはの辞と力量相應す。概するに、蒼涼凄婉の調にして、餘意あり、餘情あり、情景兼ね到りて、眞個の黃絹幼婦といひつべく、實に朝臣が作中の神品なり。されども、消閑雜筆に「ほのく」とあかしの浦の」の歌を一首十體、これを一首五體の歌などいひ崇めたるは、固より妄なり。

題あらず 藤原なかひらの朝臣

花すゝきわれこそまたに思ひしかほに出て人に結ばれにけり

(釋)○またに 心の底にの意。

一首の意は、かの人を、自分こそ、わが物にせうと、内々思つて居たワイ、然るに、この花薄の穂に出たるを結ぶやうに、おもて晴れて、外の者に、意外にも取込まれてまゐつたワイとなり。

(評) 残念なる事かなの餘意あり。伊勢集のこの歌の詞書に、

(六九六)

この男の兄なるをここありけり。今は、あの人は、世にも訪はじ、何か頼み給ふ、われを思へなど、せちにいへど、ふみばかりは見つゝも、更に逢はでありけり。かくいふけしき、もこの人は知りたりけむ、女、里に出でて、秋、前裁などをかしかりけるを、花をなむ、手ずさびに結びたりける。このつらかりし人の來て、よみたりける、

と見えて、作者は、仲平の兄とあれば、時平も、伊勢に懸想せしか、かの人、好色の聞え高ければ、跡方なきにはあらざらめど、この詞書の趣は、歌の意とは相違せり。

藤原かねすけの朝臣

よそにのみ聞かましものを音羽川渡るこなしにみなれ初めけむ

(釋) ○音羽川 山城國山科なる音羽の瀧の流の末なり。○みなれ 見馴に、水馴ミナレをかけたなり。見馴は馴染をいひ、水馴は水に親み馴るゝをいふ。

一首の意は、いつそ只餘所にはかり、音羽川の音に聞いて居やうものを、何故に、その音羽川を渡るといふでもないやうに、逢ふといふでもおしに、水馴るゝといふやうに、見馴れ初めたのであらうぞとなり。

(評) 逢ふ瀬の中絶えたるに、馴染まぬ昔を戀しみて、かひなき今を悔めるなり。遂に思ひ餘りては、昔は物を思はざりけりと覺悟す。されど、必ず相見ぬ昔をよしとするには非ず。只今のま

ゝならぬ憾を、甚しくいへるのみ。詞の皮相に泥みて、その深意を失ふこと勿れ。音聞きの語縁によりて、音羽川を取出で、さて、川の縁語にて、渡らばこそ水には馴るべけれ、かく渡らぬ中の、いかでみなれそめけむといひなせる轉義、技巧に趨りて、感哀を殺ぐ心地す。初句、古本、家集に、おごにのみとあるはいかゞ。

凡河内躬恒

わが如くわれを思はむ人もがなさてもやうきと世を試みむ

(釋) ○世を 世は、伊勢物語などに多く見えたる語にて、男女の中らひをいへるところに、多く用ゐたり。さればにや、古人は、直に男女の中の意に解したれど、聊か早きに失するが如し。なほ常用法に差へるところなしと心得む方おだしからむ。

一首の意は、自分が人を思ふやうに、自分を思うてくるゝ人も、あつてほしいことよ、そのやうに人に思はれても、やはり憂いものであるか、どうかと、一つこの世の中を試して見やうやいととなり

(評) 上句は、おのれのみ焦れて、人の我を思はざる憂きを、下句は、それにつけても、この世の中の心愛く思はるゝ由を、下に寓したる、意婉曲にして、詞自在なり。されど、やゝ天真爛漫の致を缺くが如し。

拾遺集戀五に再出したるは、初句、わればかりとありて、讀人しらすの歌なり。六帖も、同様

(六九七)

なり。また、古本信明集に出でたるは疑ふべし。

(六九八)

もと かた

ひさ方のあまつ空にもすまなくに人はよそにも思ふべらなり

(釋)一首の意は、自分は、あの天にも、住まぬのに、とかく人は、自分を遠餘所に思ふ様子であるツイとなり。

(評)如何なる事ぞの餘意あり。この怪訝の意、輕々に看過すべからず。然らざれば、餘にこの歌を凡了すべし。上句は、よそにも思ふといひ出でむ料に置けるなり。かやうの叙法、屢も上に見えたり。

三句、六帖には、あまの空にもとあり。又、三句、新撰和歌には、あらかくにとあり。

よみ人志らず

見てもまた又も見まくのほしければ馴るゝを人は厭ふべらなり

(釋)〇見ても 見ての語に、もの嘆辭の添へるまでなり。俗言の、「見れども」の意に用ゐることは、異れり。

一首の意は、逢ひ見てもまあ、逢ひ見てもまあ、やはり、又も又も逢ひ見なくなる故に、それで、二度三度と馴染むことを、さうやら、人は嫌がる様子であるツイとなり。

(評)昨日怨夢を訂せし人、今日は早く路傍の人となり、炎涼飄掌の間に變ず。畢竟は、わが情思とは反對に、一度の契にて絶えなむとするを怨める意、隠然たり。またの語の重疊「見ても亦見まほしく、見ても亦見まほしく」といはむ反復の意を表するに、最も簡淨の措辭なり。宣長が三句を、見まくのほしきにといふ意なり、古歌にこの格多しといへるは、委しからず。意釋の如く心得べし。

きのごものり

雲もなくなぎたる朝の我なれやいとはれてのみよをばへぬらむ

(釋)〇なき 和ぎなり。風日の長閑なるにも、波の立たぬにもいふ。〇なれや なればやの意。〇朝の 朝の如きの意。〇いとはれて、最晴れてに、厭はれてをかけたなり。

一首の意は、空に雲も無くて和いだる朝は、いと晴れてあるものあるが、その朝のやうある自分であればかして、人に厭ひ嫌はれてばかり居て、一生を暮して去らうとあり。

(評)いとはれての秀句、狂體にちかし。

よみ人志らず

花がたみめならぶ人の數多あれば忘れぬらむ數ならぬ身は

(六九九)

(釋)○花がたみ 神代紀に、籠を「カタマ」と訓じたるは、このかたみと同語なり。さて、花がたみは、花を摘み入る、籠なり。籠の編み目は、所狭く並び列れば、めならぶといはむ序に用ゐたり。○めならぶ 見並ぶなり。即ち見比ぶる意なり。

一首の意は、花籠の目の並べるやうに、外に美しいのが幾人もある故に、自分のやうなる人数にも無い身は、もう忘れられて去まう事であらうワイとなり。

(評)つらき心の、ほの見えたる頃ほひなるべし。人を恨みずして、却りて、數ならぬ身とはかなめるに、いよく怨意の深かるを覺ゆ。

四句、顯本に、忘れにけむとあり。景樹は、顯本を適へりといへれど、非なり。この部立は、未だ疎からぬうちに、つらき心の見わたる趣なり。もとより、本文のに従ふべし。

○

うきめのみおひてなかる、浦なればかりにのみこそ蟹はよるらめ

(釋)○うきめ 愛き目に、浮き布をかけたなり。布は海藻をいふ、黒布、和布、昆布などこれなり。○なかる、泣かるゝに、流るゝをかけたなり。○かり 假に、刈をよせたり。

一首の意は、浮き布ばかりが生えて流るゝ浦であるから、これを刈りにはかりサ、一圃に、海士は浦邊へ立寄るであらう、その如く、愛い事ばかり出来て、心ならずも泣いて暮す自分である故、思ふ人のたまゝ見ゆるも、誠の志ではなくて、只假初に氣休めだけに、一寸立寄らるゝのであらうとなり。

ゝのであらうとなり。

(評)比喻に加ふるに、懸詞を用ゐれば、巧には聞ゆれども、著想は平凡なり。のみの重複、いよく拙し。

二句、六帖に、うきて乱るゝとあり。六帖の一本には又、四句、かりにのみだに、結句、あまはよるらむとあり。皆おだしからず。

伊 勢

あひにあひて物思ふ頃のわが袖に宿る月さへぬるゝがほなる

(釋)○あひにあひて 合ひに合ひてなり。○ぬるゝがほ 濡るゝかたち、濡るゝ様子などいふ意なり。

一首の意は、よくも打合うて、物思をしてをる頃の、涙に濡れたるこの袖に映る月までが、おなじやうに、濡れ顔であるワイとなり。

(評)三界唯心、心の間に、月の光もかきけちて、濡れ顔なる擬人、おなじ嘆に、月も沈むと見たるなり。涙の語を著けずして、廻護したるぞ、例の小巧なるべき。

後撰集雜四に再出したるには、詞書、「物思ひける頃」とあり。結句、六帖、及び家集に、ぬるゝかげなるとあるは、いたくおそれり。

よみ人あらず

秋ならで おくゑら露はねざめするわが手枕のしづくなりけり

(七〇二)

(釋)○手枕 轉寢さごに、腕を枕とするをいふ。

一首の意は、露は、秋によく置くものであるが、秋でなくて、床の上に置く露は、何かと思へば、物思に寢覺をする、自分の手枕から落つる涙の雫であつたワイとなり。

(評)寢覺といひ、手枕といへるに、注目すべし。これ、その夜すがらの心づかれに堪へずして、轉寢したる趣なり。まかも、端なく一覺すれば、夜なほ闇に、萬感胸中に集りて、涙滂沱たるを如何にせむ。即ち、叙述の順序を轉倒して、まづ、秋ならで、おく露と、驚訝の前提を試み、さて、そは、わが物思の涙ぞと斷案を下したる、應接の間に、感愴の意の動くを認む。露に比喻して、涙を道破せざるは、上と同工なり。

須磨のあまの鹽やき衣箴をめらみまごほにあれや君がきまさぬ

(釋)○鹽やき衣 製鹽の際に著る衣。○箴をあらみ 箴が疎さになり。○まごほ 間遠なり。○あれや あればやの意。

一首の意は、須磨の海人の鹽焼衣は、箴があらぬ故に、よみが少くて、織目の間が透いて遠いやうに、道の間が遠い故かして、待でまごほ、君が御出なさらぬワイとなり。

(評)上句の意は、萬葉集卷三、

すまのあまの鹽やきまごほの藤衣まごほくしあればいまだ著なれず

を拘へるものか、否おそろくは、一首ながら、これを誤り傳へたるものならむ。六帖に、結句、いまだ來まさぬとある、いよゝ萬葉のに近し。藤衣まごほくとあるを、心行かず思へる後の心より、箴をあらみの一句を加へたるにや、細碎に過ぎてをかしからずといふべし。すべて、かやらの構意は簡單なれば、ひとへに、修辭聲調のうへに、無限の姿致を生せむことを要求するものなることを忘るべからず。や文字、廣蔭が、反辭として解したるは、整るるべし。景樹が、萬葉の歌の三句の藤衣は、結句の著なれずへかゝる序なりと云へるも、いかゞ。なほ、まごほに係る序とせむ方おだしからむ。

山城のよごのわかごもかりにだにこぬ人頼むわれぞはかなき

(釋)○よごのわかごも 淀の若菰なり。淀は眞菰の名處にて、里人は、これを刈り取りて、蓆を織りなごす。○かりにだに 刈りに、假をかけたなり。

一首の意は、山城の淀の若菰は、里人が刈りに來るが、それに引かへて、自分の處へは、その刈りといふ假初にさへも、來てくれぬ人をあてにして、來るかゝと待つて居る自分は、さてゝたより無いことワイとなり。

(評)初二句は、單にかりにのみいひかけたる序にはあらじ。意釋に解けるが如く、比興の辭ならむ。

(七〇三)

さて、その主想をたづぬるに、説明にとまりて、他に何等の妙を覺えず。

(七〇四)

あひ見ねば戀こそまされみなせ川なにに深めて思ひそめけむ

(釋)○みあせ川 戀二「言にいではぬばかりぞ云々」の條に出でたり。さばかり淺き川なれば、こゝは反對に取做して、なにに深めてといはむ序に用ゐたり。

一首の意は、かの人に逢見ることが無いによつて、愈よ戀しさが増るワイ、もとより水無瀬川のやうに、淺いかの人の心を、何故に、末かけて深う思ひ初めたのであらうぞとなり。

(評)厭乘せられたる人の作ならむ。ひたすらわが不明を悔いたる趣は、人の輕薄無情を反観して、怨意活躍す。しかも、戀々として、その故を忘るゝこと能はざるは、多とすべし。なににの疑問、淺深の對映、また多様の姿致を生ず。

あかつきの鴨のはねがき百はがき君が來ぬ夜は我ぞ數かく

(釋)○あかつきの鴨のはねがき云々 鴨は、曉方には、殊に打頻り羽搔く故に、羽搔き百羽搔きと續けたりといふ。○數かく 打任せては、萬葉十一「水の上に數かく如きわが命」又上る戀一「行く水に數かくよりも」の如く、數を畫する意あるが故に、顯註をはじめ、來ぬ夜の數を書き

附くる意と解けり。但、こゝは、屢搔く意とすべきか。廣蔭は、もじくすることなりといへり。千秋が、宣長の解をたすけて、數かくは、喩の鴨の百羽の詞によりていへるのみにて、意はたい、歎きすることの繁き由なりといへるは、杜撰なり。

一首の意は、曉には、鴨が去げく羽を搔鳴するものであるが、君が來ぬ夜は、宵から曉まで待ち通して、自分がサ、その鴨の百羽搔するやうに、幾度となしに、もじくとして歎き明かすワイとなり。

(評)所謂、輾轉反側の意なり。はねがき、もいばかき、數かくの疊語、反復の意を叙ぶる辞樣として、適當なるに、語調音響、又相愜ひて、字々鏗然たるを覺ゆ。格調や、古なり。君と我との甚しき露骨なる對照、却りて妙あるを覺ゆ

顯註に、二三の句、榻のはしがき百夜がきとある由をいひて、これは、昔あやにくなるよばふ男ありけり。志ある山をいひければ、女心見むとて、來つゝ物いひける處に、榻を立てて、これの上に、頻に百夜伏したらむ時に、いはむ言を聞かむといひければ、男雨風を凌ぎて來つゝ伏せりけり。榻のはしに、ぬる夜の數をかきけるを見れば、九十九夜になりけり。明日よりは、何事もえいなび給はじといひて歸りにけるに、親の俄に失せにければ、その夜えいかずなりにけるに、女の詠みてやれりける歌なりとあり。定家は、鴨、榻共に用ふべきにとりて古今の諸本一同に、鴨なる由をいへり。思ふに、好事者、鴨を榻に換へて、一場の小説を物ましらむ。

(七〇五)

玉かづらいまは絶ゆとやふく風のおこにも人の聞えざるらむ

○
〔釋〕○玉かづら 戀四「玉かづらはふ木あまた」の條に既出。葛は蔓延する物あれば「絶えぬ」の意にいひ續くるが常なるを、こゝは類語なるまゝに、その文理を忘れて、絶ゆの序に用ゐたり。詩歌のうへには、ありがちの特例なるべし。○ふく風の おこに聞ゆといはむ序詞なり。

一首の意は、今はもう縁を切るというて、風の便の音づれもせず居るのであらうかとなり。
〔評〕揣摩臆測、その煩悶の情致を見る。たゞ序詞の器用、繁褥に過ぐるが如し。

わが袖にまだき時雨のふりぬるは君が心にあきや來ぬらむ

○
〔釋〕○あきや 飽きに、秋をかけたなり。

一首の意は、この頃一向、お出の無いを悲しく思ふ私の袖に、まだその時節でも無いに、このやうに時雨の降つたは、變つた事であるが、これは、君が心に私を飽いたといふ名の、秋が來たのであらうかとなり。

〔評〕時雨を、秋の景物として詠めり。この頃は、皆然り。委しくは、秋下「神無月時雨もいまだ降らなくに云々」の條に於いていへるを参考すべし。後にも、まぐれつゝもみづるよりも言の葉のこゝろのあきにあふぞわびしき

こいへると同じく、飽きと秋との秀句より聯想して、涙の落つるを、時雨の降るに比喩したり。その工はあり、その眞はいまだし。

○
山の井のあさき心もおもはぬに影ばかりのみ人の見ゆらむ

〔釋〕○山の井の 解は、離別の部「むすぶ手のまづくに濁る山の井の云々」の條に既出。山清水を堰き溜めたるまでにて、淺ければ、あさきといはむ序としたり。○影ばかり 一寸ほの見えたるまでにて、來てもとまらぬにいへり。

一首の意は、山の井のやうなる、淺い心では思はぬのに、何故に、あの方は、その山の井に映る影程ばかり、一寸見えて、落付いてはとまらぬのであらうぞとなり。

〔評〕これは、萬葉集十六、

淺香山影さへ見ゆる山の井のあさきこゝろをわが思はなくに

を本歌として詠めるなり。三句の下に、何故にの語を含めて解すべきことは、この種の仕立の常なり。神韻を以て勝るが如し。調また流滑なり。

○
わすれ草種ごらましをあふ事のいとかくかたき物と知りせば

(釋) わすれ草 和名抄に「兼名苑云、萱草、一名忘憂、漢語抄云、和須禮久佐、俗云如環藻二音」
 とあり。春宿根より長葉叢生して、秋長莖を抽で、枝を分ち、花を著く。形百合花の如し。色
 紅黄ににして、紫黒點あり。さて、詩の衛風に「焉得三、萱草一言樹三之背一、云々」とある萱草を、
 萱文に「萱、本又、作「萱」と見えて、朱註に「食之令人忘三憂者」とあり。又、嵇康が養生論に
 「萱草忘憂」^三とあるに本づきたる名なるべし。
 一首の意は、思ふ人に逢ふ事の、甚くこのやうに、なりにくいものぞといふことを、疾くより
 知りもまたらば、この苦しい戀を忘るゝやうに、忘草の種を取つて、詩いて置かうであつたも
 のをとなり。

(評) 忘草の名によれる落想は、夙く奈良時代に見ゆ。とは萬葉集十二、
 わすれ草垣もまみゝにうゑたれごまこの醜草なほ戀ひにけり
 なごの類これなり。さて、この忘草種ごらましをいへるは、必ず忘れ果てむことを希望する
 にはあらず。只、煩悶の餘に出でたる矯激の言のみ。土佐日記に、
 住の江に船さしよせよわすれ草煮るしありやと摘みて行くべく
 とある歌のつゞきに「うつたへに忘れなむどにはあらで、戀しき心地まばしやすめて、又も戀
 ふる力にせむとなるべし。」
 と評せるは、又、うつして以て、この歌の評に充つべきなり。

こふれごも逢ふ夜のなきは忘草夢路にさへやおひ茂るらむ

(釋) 一首の は、何程戀しう思うて寢ても、夢にも逢ふと見る夜の無いのは、かの人が、自分を忘
 れし忘草が、現ばかりか、夢の路にまでもサ、生え茂つた事であらうかとなり。

(評) その實は、戀々の情に驅られて、目も合はぬなるべし。夢も見ぬなるべし。次なる「夢にだに
 あふこと難く云々」の歌も、同じ情況なり。さて、これは、そを忘草のうへにていひはてたり。
 夢路にさへや云々の趣向は、戀二「夢路にも露やおくらむ」といへると、同工異曲ならむ。
 この歌、後撰集戀六に再出して、二句、逢ふ夜をき身はとあり。身といへる、殊なる詮なし。

夢にだにあふ事かたくなり行くは我やいをねぬ人や忘るゝ

(釋) 〇いをねぬ いは寢入ること、ねは横臥することなり。

一首の意は、せめて夢になりとも逢ひたしと思ふ、その夢にさへも、段々逢ふ事のなりにくく
 なつて來るは、自分が、物思の爲に、え眠らぬ故か、それともまた、あの方が、自分を忘れて
 心が通はぬのか、ごちらであらうぞとなり。

(評) その實は、即ち人に忘れられたる歎に、我がいを寢ぬ故なりけり。然るを、我や、人やと、兩端
 を叩きて疑へる、この痴呆の處、一段の詩味を生ず。なり行くといへるに、日に添へて、その
 物思の増る趣見ゆめり。

けんげい法師

もろこしも夢に見しかば近かりき思はぬなかぞ遙けかりける

(釋)〇もろこし 漢土をいふ。もは俗言のサヘモの意なり。

一首の意は、遠い唐さへも、夢に見ることであつたから、近く思はれたワイ、それに引換へ、思つてくれぬ中は、夢にも見ることがないから、遙に遠くあつたワイとなり。

(評)これも物思の爲に、夢も結ばぬあるべし。さて、この遠近を、表裏に取做したる構想は、晋の明帝の幼時、日と長安と、孰れか遠きといへる間に對して、日は近し、目を擧ぐれば則ち、日を見れども長安を見ずと對へたりし類想ならむか。又下句は、かの肝膽も胡越といひけむ趣にも似たり。枕草子に「近くて遠きもの、思はぬはらから親族の中」といへるは、或は、これよりや思ひ寄りけむ。開口一番、唐を近しと唱道せる落想の奇宕なるは、賞つべき點なるを、遠近の對比、襯密に過ぎたるぞ、聊かくちをしき。今すこし、蘊含の味あらせばやとなむ思ふ。

さたののぼる

獨のみながめふる屋のつまなれば人をしのぶの草ぞおひける

(釋)〇ながめふる屋のつま 詠め經るに、長雨降るをかけ、さて、古屋とかけたり。つまは、こゝにては軒の端なり。〇人をまのぶの草 人を偲ぶに、忍草をかけたなり。忍草のことは、既に上にいへり。

にいへり。

一首の意は、人のつれなさに、只一人ばかり物思をして、毎日く日を経る、この古屋の軒の端であるから、雨に朽ちて、自分が、人を偲ぶと同じ名の、忍草が生ひ茂つたワイとなり。

(評)霖雨に朽ちたる軒端の忍草につけて、懷抱を叙べたるなり。初二句は、春下「わが身世にふるながめせしまに」と、小町が詠めると、同工にて、煩瑣厭ふべし。

僧正遍昭

わが宿は道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに

(釋)一首の意は、我が庭は、草が茂り合つて、通ひ路もない程にまで、ひどく荒れてまゐつたワイ、心強うて來もせぬ人を、今日は明日はと待ちくして居るまに、つい月日が經つてサとなり。

(評)待つとせしまにの一語、悽涼悲酸の意を挑發すること太し。蓋し、待つとせしは、その途絶えの暫時ならむことを期したればなり。今日は明日はと頼み來れるうちに、月日の梭の如くに經行きて、看るく菩薩古逕を封ず、その心長きの程見つべきならずや。いかにせむ、飛花の如き輕薄の子は、他の春風に狂し去つて、遂に、再び梢に返らず。こゝに至りて悔恨の情、絶望の聲は、乃ちこの三十一字を呻吟し來る。風韻また縹渺として、絃外の餘音あり。

結句、六帖に、こふとせしまに、二句、貫之集に、道見えぬまでとあり。すべて、意調ともに、本

文の方勝れり。且、貫之集に載れるは誤なるべきこと、勿論なり。

(七一三)

今こむごいひて別れしあしたより思ひくらしのねをのみぞなく

(釋)○今こむ 今の語解は、離別「立別れいなばの山の云々」の條に出でたり。○思ひくらし 思ひ暮しに、蜩をかけたなり。

一首の意は、かの人、近いうちに又來うというて、別れて去なれたる朝からこの方、一向音づれが無い故、毎日、かの人を戀しう思ひ暮しに暮して、あの蜩の鳴くやうに、音を擧げて泣いでばかりサ居るツイとなり。

(評)素性が「今來むごいひしばかりに」と詠めるは、乃父のこの作に胚胎したりけむ。但、彼れは、只その一夜を待ち明せるなり。これは日をわたりて待ち暮せるなり。感哀の深かるべきは、理に於いては、これなるべきも、情韻兩つながら、却りて彼れ優れり。よく構想叙法の異を對比して、その妙諦を得むことを要す。

拾遺集物名に、忠岑の歌として再選せられたり。すべて、再選の歌は、後出の方たしかなれば、拾遺によるべくや。

よみ人あらず

こめやとは思ふものからひぐらしの鳴く夕暮は立待たれつ、

(釋)○こめや 來むやはの意。

一首の意は、今は如何程待つとも、來うかいや來はずまいとは思ふものながらも、蜩の鳴く夕暮時分になるといふと、門口へ出て、ひたすら立つて居ては、待たれ〜して、どうも思ひ切つては居られぬツイとなり。

(評)例のよもやに惹かざるゝなり。人情は弱きものかな。初句、反動辞を用ゐて、強いへるがよきあり。

今しはごわびにしものをさゝがにの衣にかゝり我をたのむる

(釋)○今しはご 今とはとなり。しは強辭。○さゝがに 蜘蛛といはむ枕詞なり。日本紀私記に「佐瑛^{ササガ} 餓泥、蜘蛛之別名也、言、其體如蟹、住^{ガニ}左々原故云」とあり。雅澄は、笹が根の轉れるにて、小竹の根は入組みたる物なれば、組むに蜘蛛をいひかけたるなりといへり。又、小蟹^{ササガニ}の蜘蛛なりといへる説もあり。さて、こゝにては、さゝがにを、直に蜘蛛のことに用ゐたり。

一首の意は、かう久しう來ぬからは、今はサ、もう來ることではあるまいと諦めて、くよくよ物案じをして居たるものを、待つて居るその人の來るといふ知らせのやうに、蜘蛛が着物に這ひかゝつて、また何か頼みのあるやうに思はすることとなり。

(評)さては、人の心は絶え果てたるにはあらしの餘意あり。日本紀允恭記に、衣通姫が、天皇に献れ

(七一三)

る歌に、

(七一四)

わが夫子セキがくべき宵なりさ、かねの蜘蛛のおこきひこよひあるしも
と見えて、蜘蛛の出づれば待ち人來るといふ諺、古くよりありしなるべし、爾雅の疏に「一名長
跨荆州河内人、謂之喜母、此蟲來著人衣、當有親客至、有喜也」と見え、又、西京雜記に「蜘蛛
蛛集而百事喜云々」と見えたるも、この意なり。君を待ち戀ひ、橋占、辻占、石占、壘算、松葉
算もまつくして、今や絶望の淵に沈まむまむとする刹那、萬緒の哀怨、一旦に忘却せられて、
この新光明に隨喜す。他愛なきは戀の道なり。結句のはて、こゝかなといふ歎辭を含めたり。
歌は、今一層の狂熱を要す。

○

今はこじと思ふ物から忘れつゝ、またるゝ事のまだもやまぬか

(釋) ○まだも または未だの意○やまぬか かは歎辭

一首の意は、今はもう來まいと思ふものながら、ついそれを忘れくしては、かの人を待たる
ゝ事が、未だまぬかと思ふことかなとなり。

(評) ともすれば、打忘れて待るゝこそ、日頃の心慣ひなめれ。土佐日記に、

あるものと忘れつゝなほなき人をいづらと問ふぞ悲しかりける
これら、人情の極致ならむ。結句、疎宕にして奇氣あり。

○

月夜にはこぬ人またるかき曇り雨もふらなむわびつゝも寝む

(釋) 一首の意は、このやうにさやけき月夜には、常は、如何に思うても來ぬ氣強い人も、月の面白さ
に浮かれて、間違うても、もしや來てくれうかと待たれて、氣が揉めてならぬワイ、まかし、
どうで來ぬこと故、何卒空が眞黒に曇つて、雨が降つてもらひたいワイ、さらば、ひたすらつ
らいことぞと、情かく思ひくしてまわ、寢ようと思ふワイとなり。

(評) 益なき心盡しの、なまかななるをいへり。景樹曰く、

眞實雨を願ふにあらず。月夜には、ふと來まじきにあらねば、猶月夜をぞ頼むべきはいふに
及ばぬを、かき曇り雨も降らなむなごいへるは、せめてもの情の心やりにて、實を推しきる
時は、必ずしも然らざるなり。云々。

背蔭に中れる適評と稱すべし。結句、語素拵にして、泣寢入に寢むとすなる痴呆の態、遺憾な
く描出せられて、又面白し。下句、二段に切りとつてのへて、四五の句のはて毎に、未來の辞の
む文字を据ゑたる、聲響玄妙なり。要するに、貞觀以前の風調なるが如し。

雨ふらむ夜ぞおもほゆるぬば玉の月にだにこぬ人のこゝろは (貫之集)

月夜にはこぬだにもこそまつと聞け曇るをかへす物にぞありける (六帖)

月夜にはこぬ人まつといへどもふる夜しもこそ寢られざりけれ (同)

(七一五)

の類は、徒に隣女の綴に倣へるもの、何等の感哀たもあらず。

うゑていにし秋田刈るまで見えこねばけさ初雁の音にぞなきぬる

(釋)一首の意は、五月の頃、この田を植ゑておいて、去なれてしまつたる人の、このやうに、もう秋になつて、その田を刈る時節になるまで、待てどもく來ねば、今朝初めて鳴き渡る、あの雁のやうにサ、聲に立てて泣いたワイとなり。

(評)あはれ、一日見ざれば三秋の如し。早苗よりしより殆ど半歳強、人目をかねて、下にのみ泣き來りけむを、今や早稲田かり金の鳴音にあはれを催されて、端なく音に立てて泣かれけるなるべし。万葉集十、

住の江の岸を田にはり蒔きし稻ひいで刈るまで逢はぬ君かも
春がすみたなびく田居に庵して秋田刈るまで思はしむらく

と同想同型にして、月日の程經たるを、具体的に、景物を以ていひあらはしたり。而して、これは更に、初雁のねになく巧を加へたり。

來ぬ人をまつ夕暮のあき風はいかに吹けばかわびしかるらむ

(釋)一首の意は、來もせぬ人を待ち居る夕方の秋の風は、そのやうに吹く故でか、かうも悲しくつ

らく思はるゝのであらうとあり。

(評)もどより、おのれが心的作用によることなるを、いかに吹けばかど、風の所爲なるやうに疑ひいへるがをかしきあり。語調また、舒暢にして和諧。

久しくもなりにける哉住の江のまつは苦しきものにぞありける

(釋)○住の江 住吉と同じ。賀の部「住の江の松を秋風云々」の條に既出。○まつは 松に、待つをかけたなり。

一首の意は、思ふ人が來ずなつてから、存外に久しうまあなつたことよ、その久しいといふ事を以て評判の、住吉の松といふやうに、來もせぬ人を待つは、さてく苦しいものであつたワイとなり。

(評)住吉の松は久しき物といひ離されたる、世の諺を踐みて詠めるなり。雑下に「われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松云々」と詠めるも、亦然り。或は、別にさる意味の古歌などやありけむ。げに住の江の松は、万葉集に、數多詠まれたれば、少くも、この頃は、三百年以上の古木なりけらし。宣長が、久しくもの縁に住吉の松といひ、その松を人待つにいひかけたるなりといへる、よし。

かねみのおほきみ

(七一八)

住のえのまつ程ひさになりぬれば芦たづの音にかかぬ日はなし

(釋)○住のえのまつ程、松に、待つをかけたなり。○ひさ、久しの名詞格。○芦たづの、音になくにいひかけたる序なり。芦たづの解は、戀「忘らる、時しなければ芦たづの云々」の條に出でたり。

一首の意は、來ぬ人を來るかゝと、住の江に久しい名の高い、その松といふやうに、待ち居る間が久しうなつたから、その松に住む芦鶴の、音をたてて鳴くやうに、自分は、聲を出して泣かぬ日とては、一日も無いワイとなり。

(評)待つといひ、久といはむ爲に、住の江の松をひき出でたり。芦たづは、松に對へて、齡久しき物の取合せに置けるのみならず、實に、松に多く來馴れて、當時は、この住吉の濱のあたりにも居たりしあらむ。これを音になくの序としたるは、既に、万葉に「あしたづのねのみしなかゆ」など、例あることなり。序詞の疊用、例の煩し。

なかひらの朝臣あひまりて侍りけるを、かれがたになり
ければ、父が大和の守に侍りける許へまかることよみてつ
かはしける、

伊勢

三輪の山いかに待ちみむ年ふとも尋ぬる人もあらじと思へば

(釋)なかひらの朝臣云々、なかひらは藤原仲平なり。關白基經の子にして、時平の弟。天慶八年、七十一にして薨す。官左大臣に至る。枇杷殿と稱す。父がは、作者の父藤原繼蔭がなり。○三輪の山、大和國式上郡にあり。

一首の意は、私は、貴方に見捨てられて、京住居も面白くないから、古歌に、戀しくば尋ねて御出なされと詠んである、三輪の山の方へ、此度下りまするが、さて、古歌に詠んである趣とは違つて、何年たつとも、戀しう思つて、尋ねて來てくる、人もありはすまいと存じますれば、三輪の山邊で、どのやうにして待つて見ようぞ、とても、待ち見る手段も無からうとなり。

(評)大和の國府は奈良なれば、作者が、父の許に行きたるも、奈良なりしなるべし。さては、三輪とは隔りたれど、同じ國內の名所なれば用ゐしならむ。雜下、

わが庵は三輪のやま本こひしくばとぶらひきませ杉立てる門

を本歌に取れり。本歌には、とぶらひ來ます人あるに對へて、これは、尋ぬる人もあらじと打歎けるなり。かく尋ぬる人もと廣くいへれど、この歌をさし當て、贈りたる、人一人をさしていへるなり。當時仲平は、年廿ばかりの若殿上人なれば、移ろふ方々多かりし事思ふべし。作者は、かくて、一旦大和に下り、間もなく、又上京せしこと見えて、寛平の末年には、七條

(七一九)

● 後の宮人として、宇多帝の寵を受けて、行明親王を生み奉れり。男も女も、若き程は、根を絶えたる波の浮草、つひの寄る瀬はをかしきものならずや。この歌、公任卿は、金玉集に選み入れたり。

だいゑらす

雲林院のみこ

ふきまよふ野風を寒みあき萩のうつりも行くか人のこゝろの

(釋) ○行くか かは歎辭。

一首の意は、あちこち吹き迷はず野の風が寒い故に、秋萩の花の移らうて行くやうに、思ふ人の心が、餘所へ移つてまゐ行くことよとなり。

(評) 上句は序なり。四五句の倒装、促進したる意趣に相協ひて、諧調なり。かの辞、のの辞、呼應して、聲響鏘然たり。風韻また縹渺。

をののこまち

今はこてわが身時雨にふりぬれば言の葉さへに移ろひにけり

(釋) ○時雨に 時雨の如くにの意。万葉十「秋津羽に句へる衣」などのにて、如くにの意あり。

○ふりぬれば 降りには、舊りをかけたなり。

一首の意は、この節の時雨の降るといふやうに、私の身が舊くなつたによつて、今はもういやと思ふ事と見えて、その時雨に、木の葉の色の變るやうに、心ばかりか、前方仰せられたる御

約束、言の葉までが、存外に變つて來たワイとなり。

(評) やう／＼かれ方ならむとするけしきの見えたるまゝ、かの「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝」の兼言を拈出し來りて、輕薄の兒を愧死せしめむとす。手段恰當なり。比喩の重疊、縁語の修飾、この作者の家風と知るべし。

後撰集冬に再出して、初句、あきはててとあり。かくては、いよく繊細に流るべし。

かへし

小野のさだき

人を思ふ心木の葉にあらばこそ風のまに／＼散りも亂れめ

(釋) 一首の意は、私が、貴方を思ふ心が、仰のやうに、時雨に移ろふ木の葉ならばこそ、風の吹くに隨うて、餘所へ散り亂れもせうワイ、まかし、心が木の葉といふことは無いから、決して餘所へ散り亂れて移ることは無いワイとなり。

(評) 何事ありとも、心配せらるゝな之餘意あり。贈歌の言の葉さへにといへるにつきて、この一場の活地を檢出して、言舌を弄す。狡獪といふべし。

なり平の朝臣、きの有常がむすめに住みけるを、うらむることありて、しばしのあひだ、晝はきて、夕さは歸りのみしければ、よみてつかはしける、

あま雲のよそにも人のなり行くかさすがに目には見ゆる物から

(釋)なり平の朝臣云々 伊勢物語には「昔男、宮仕しける女の方に、こたちなりける人をあひ知りて、程もなくかれにけり。同じ所奇れば、女の目には見ゆる物から、男はあるものにも思ひたらねば」と詞書ありて。この歌あり。○あま雲の あまは天なり。こは、雨の義にはあらず。大空の雲は、遠く隔たりたる物なれば、よそといはむ序に用ゐること、万葉に、その例多し。但こは、序詞を一轉して、比喩に用ゐたり。○か 嘆辭。

一首の意は、天雲の遠よそにあるやうに、よそくしうまめ、貴方のちつて行くことよ、さらば、隠れて見えぬやうにもなる筈を、さすがに、晝は御出があつて、天雲の、目に見ゆるやうに、目にはかへりながらサとなり。

(評)なかくに思はせ振の御仕打なることよの餘意あり。

かへし

なりひらの朝臣

ゆきかへり空にのみしてふることはわがある山の風早みあり

(釋)○ふる 經るなり。

一首の意は、貴方の仰らるゝ天雲が、空にばかり往來をして、時を經ることは、何故かといふに、そのかへつて故る山の風が烈しさに、落付きかぬるからであるワイ、私もその通りで、往きつ戻りつ、足をとめずに、ごちら付かずに月日を経る譯は、私が住處として居る貴方の心が

變り易くて、氣が早いからであるワイとなり。

(評)不足は、此方よりいふべき筈なるものをの餘意あり。わがある山の風早み、これ詞書にいへる「うらむることありて」に當れるにて、女の、密男を引き入れたることを怨みて、夜は足をとめずに立歸りしなり。わがを、景樹が、あなたにかくるは非なり、上の天雲のさま、皆わが上なるに、更に又わがと、我が身をいふべきにあらず、このわがは、人のわがなりといへる、却りて非なり。これは、起句も、わがゆきかへりといふべきを、下に譲りて略けるなり。すべて、贈歌にいへる天雲のうへにて、わがうへをいひ果てたり。諷託寄興は、巧妙といふを得ざれども、諷刺、殊に痛快を極む。

題あらず

かげのりのおほ君

唐衣なれば身にこそまつはれめかけてのみやは戀ひむと思ひし

(釋)○唐衣 上に出でたり。○なれば 著馴れなばの意。○かけて 心に懸くること、唐衣の縁なり。衣は、衣桁などに懸け置く故なり。

一首の意は、着物は著馴れうなら、柔になつて、身にサ、ひつたりと著き纏うであらう、それに引換へて、人が馴染になつてからが、このやうによそくしう、たゞ、常住に心に懸けてばかり居て、戀ひ焦れうとは、思ふたことであつたか、いや思ひも寄らなかつたことよとなり。

(評)比興の作、事もなし。

ともものり

秋風は身をわけてしも吹かなくに人の心のそらになるらむ
(釋)〇わけてしも、しは強辭、もは歎辭。

一首の意は、秋風は、野などを分けて吹きぬすれ、人の身を分けてはサ吹かぬのに、何故に、風に、草木の葉などの、空に吹き上げらるゝやうに、人の心が浮かれて、よそくしうなるのであらうぞとなり。

(評)吹く風の、物を空に颯ぐることは、この頃いひならへる詞にて、大井川行幸の序にも「拙き言の葉は、吹く風の空に亂れつゝ」^カと見えたり。さて、心の空になるより、野分の風を聯想し來りて、身を分けてしも云々、一疑問を出したり。身を分けては、後撰、及び六帖に、身を分けて霜やおくらむわだ人の言の葉さへにかれも行くかな

と同じく、必ず區別する意にはあらず。されば、契沖、眞淵などの「わが身、人の身と分けては」と解けるは誤れり。三句の下、何故にの語を挿みて聞くべし。

三句、家集には、吹かぬども、結句、顯本には、ちるらむ、六帖には、みゆらむとあり。

源宗千朝臣

つれもなくなり行く人の言の葉ぞ秋よりさきの紅葉なりける

一首の意は、紅葉は、秋になれば、色づく物であるが、次第につれなくちつて行く人の言の葉

はサ、秋より先の紅葉であつて、時節の秋も來ぬうちに、皆變つてままうたツイとなり。

(評)言の葉の變るより、木の葉の色變るを聯想して、秋より先の紅葉と隱喩したるを、一ふしとす。

家集には、二句、言の葉や、結句、なるらむとあり。

心地そこなへる頃、あひありて侍りける人のごはで、心地おこたりてのちとむらへりければ、よみてつかはしける、

兵衛

あでの山麓を見てぞ歸りにしつらき人よりまつ越えじとて

(釋)心地そこなへる頃云々 相語らへる男の、病中には見舞に來で、全快したる時分に、見舞に來りしなり。〇死出の山 死有の相を、別譯阿含經に「死山、能壞一切壽命」といへるこれなり。又涅槃經に「有四大山、從四方來、欲害人民、四大山即生老病死也」とありて、死の險難を、山に譬へしまでなり。然るに、十王經といふ偽經に「閻魔王國界、死天山南門云々」と作れるより、實の山の如くなれり。

一首の意は、この間は、私も煩うて、既のこと、あの世の界と聞く死出の山まで行きたるに、その時、見舞も下されぬ無情の貴方とは違うて、私は、その死出の山をも、假令つれない貴方とはいへ、かねて一所に越ゆる約束なれば、貴方より先には越えはすまいと存じまして、その山

の麓を見てサ、ひとまづ戻つて参りましたワイとなり。

(評) 諷詠骨に徹す。この皮肉の言、婦人にあらずはいひ能はじ。相手の男、必ずや、天地縫無きを啣ちたりしならむ。

頭本、二三の句、麓よりのみ歸りきぬとあり。わろし、

あひしれりける人の、やうやくかれ方になりけるあひだに、
焼けたる茅の葉に、ふみをさして、つかはせりける、

小町があね

時過ぎてかれ行く小野の淺茅には今はおもひぞ絶えずもえける

(釋) 〇淺茅 戀一「淺ぢふの小野の篠原まのぶとも云々」の條に出でたり。〇かれ行く 離れ行くに、枯れ行くをかけたなり。〇おもひ 思に、火をかけたなり。

一首の意は、秋の頃が過ぎて、冬枯になつて行く野は、火をつけて焼くものであるが、身の盛が過ぎて、貴方が、段々遠ざかつてお出でなさる、小野の淺茅のやうある私は、今は思ひの火が、絶えず燃えてまあ居りますワイとなり。

(評) その証據には、この焦げたる茅の葉を御覽下されたしと、書簡をつけて贈れるなり。これらの氣の利きたる思付、小野に、わが小野氏を寄せたるはたらき、すべて作者の小慧を見るに足る。

「波のうねく」と詠みし妹に愧ぢずといふべし。

物思ひける頃物へまかりける道に、野火のもえけるを見て

よめる、

伊 勢

冬枯の野へとわが身を思ひせばもえても春を待たましものを

(釋) 野火 枯草を焼き拂ふ爲に、野に著けたる火あり。〇もえても たゞ燃えての意、もは歎辭なり。燃ゆるもの意にとるべからず。

一首の意は、時過ぎたる冬枯の野の、あのやうに燃えてまあ、再び芽の出る春を待つことであるが、人に見棄てられたる自分の身を、その冬枯の野であると思ひもするならば、この胸の中に、思の火の燃えたるまゝにまあ、辛棒して、復もとにかへる時節の來るのを待たうものをサ、何とんでも、自分は、冬枯の野とはちがうて、生身であるから、思の火に焦れ死をして、その時節を待ちえられぬワイとなり。

(評) 何者の校童ぞ、この可憐の佳人をして、まかく、薄命の淵に沈淪せしめしは。思ひ入りたる情致、深く同情に堪へざるものあり。

六帖に、初句、霜枯のとあり。結句、六帖の一本に、待つべきものを、今一本には、春にあはましものをとあり。貫之集なるは、本行のと同じ。但、貫之のにはあらじ。六帖には、作者を小町があねとしたり。本集を見誤りて、上の歌の作者を、これにまでかけて擧げたるならむ。

とものり

(七二八)

水の沫のきねでうき身さいひながらながれて猶も頼まる、哉

(釋) ○きえでうき身 消えずして浮くといふに、憂き身をかけたなり。○ながれて 長らへての意。

一首の意は、思ふ人に見捨てられて、水の沫の消えずして浮くといふやうに、消えもえずして嘆く、憂い身とはいふものゝ、何時もかうばかりでもあるまい、又逢はるゝこともあらうかと生き長らへて、やはりまあ、末を頼みに思はるゝことよどあり。

(評) 例の縁語のくさり続け、いとうるさし。ながれても、水の縁なり。いひあがらながれてといへる同音の反復、聲調なだらかに聞ゆ。諸註、二句のての辞を清みて、眞淵は、「消えて浮く」といひかけてといへれど、理立たず。景樹は、消えては浮くの意といへれど、これも、妥當を欠けり。この故に、宣長は、初句を、きえてにのみ係る序と見て、うきへまでかけて解かざりき。今は、廣蔭の説に従ひて、てを濁りて、否定の辞として解きたり。

六帖及び、友則集に、二句、うき世と、三句、知りながら、四句、ながれても猶とあり。又、六帖の再出のには、三句、思へどもとあり。さて、六帖には、作者伊勢なり。景樹は、歌のさまより推して、伊勢のならむといへるも、一わたり、さる事と思はるれど、猶よく考ふるに、六帖は、上より次を逐ひて、本集の作者を見誤りたるならむ。

よみ人あらず

みなせ川ありて行く水なくばこそ遂にわがみを絶えぬと思はめ

(釋) ○みなせ川 戀二「言にいでていはぬばかりぞ水無瀬川云々」の條に出でたり。○わがみを身をば、水脈ミヅチをよせたり。

一首の意は、一旦中絶えして、水が無いといはるゝ水無瀬川に、底に水脈があつて流れて行く水が無いものであらうならばこそ、このまゝに、さうくかの人が、私が身の中絶えしてしまふたと思はうワイ、まかし、その水無瀬川でさへ、やはり水脈があつて、水が流るゝこと故、わが中も亦、もどに反る縁が無いことでもあるまいワイとなり。

(評) この種の比興は、正叙を避けて、逆寫したるものなれば、曲折その間に生じて、體裁、おのづから巧緻なる。されば、みをの縁語などは、餘に小巧に墮つめれば、求めぬを可とせむ。

みつね

吉野川よしや人こそつらからめはやくいひてしことは忘れじ

(釋) ○はやく 夙ハヤくなり。○こと 言なり。

一首の意は、吉野川の名のやうに、よしく、貴方こそ、そのやうに辛くもあらう、まかし、私は、貴方が以前、約束して置かれたる詞は、忘れは致しますまいワイとなり。

(評) 貴方もよもやの餘意あり。わが他くまで故を思ふ情を叙べたるは、即ち、反映の手段にして、これ早くも、その約束を反故にしたる人への面當なり。この歌を贈られたる人、いかに面目な

(七二九)

かりけむな。初句は、同音を疊みて、よしといひ出でむ序なり。さて、吉野川は急流なれば、はやくといへるも、その縁なり。

(七三〇)

よみ人あらず

世の中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞありける

(釋)○花ぞめの 花染は、月草の花もて染む。六帖には、この句、月草のとあり。宇治拾遺に「色は、花を塗りたるやうに、青じろにて」と書けり。

一首の意は、世の中の人の心といふものは、色に喩ふれば、丁度花染のやうなるもので、至極變り易い色でサあつたワイとなり。

(評)眞淵が、世の中と廣くいひて、心は一人をさせるなりといへる、當れり。移ろひ易きことより聯想して、人心を花染に喩へたり。さて、花染即ち月草染を、移ろひ易き例に引くことは、万葉に數多見ゆ。

○

心こそうたてにくけれ染めさらば移ろふことも惜からましや

(釋)一首の意は、うたてや、自分の心がサ憎いワイ、何故といふに、染めぬ色の變ることの無いと同じく、自分から思はずば、人の心の變るのも惜しうあらうかまあ、惜しうも無いワイとなり。

(評)天をも怨みず、人をも咎めず、只わがこの心を責めたるなり。さはいへ、心は心として、身に任せねば、憎き心は、依然として、人戀ふるを如何にせむ。これら、愛憎苦悶の情的心象の變化を味ふ時は、幾多の趣味あらむ。さて、この歌、まづわが心の憎しといへる矯語を下して、三句以下に、その理由を説明したるものなり。

こまあ

色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける

(釋)一首の意は、草や木の花は、色がある故に移ろふが、色があるとも見えすして、移り變るものは、たゞ一つ、世の中の人の心の花でサあつたワイとなり。

(評)上なる「世の中の人の心は」といへると同じく、廣くいひて、實は一人をさせるなり。心の花は、心的現象を、花に混喩したる語にて、そのあだくしき限を叙べたり。暢達流麗、風趣掬すべし。

よみ人あらず

われのみや世をうくひすと鳴きわびむ人の心の花とちりなば

(釋)○世をうくひす 世を憂いといふに、鶯をかけたなり。○花と 花の如くの意。一首の意は、私一人ばかり、世が憂いといふ名の鶯の鳴くやうに、泣いて辛氣に暮すであらう

(七三一)

(七三二)

か、かの人の心が、花の散るやうに、餘所へ散り移つてしまつたならばサとなり。

(評)鶯は、花間になくものなれば、取合せたり。さる疑起るべき理由ありて詠めるなるべし。

そせいほうし

思ふこともかれなむ人をいかゞせむあかず散りぬる花とこそ見ぬ

(釋)一首の意は、いか程戀しう思ふとも、遠退いてしまつてあらう人を、何とせうぞ、どうも仕方が無いワイ、奇麗にあきらめて、まだ十分見足らぬうちに、早う散つてしまつた花ださ、思つて居ようワサとなり。

(評)飛花、再び梢に還らず、この理看易きのみ。この看易き道理を捉へて、そこに姑く、慰安の天地を作らむとす。幽怨の致、妙は説破せざるにあり。

新撰和歌に、初二句、今はとてかれなむ人もどあり。

よみ人あらず

今はとて君がかれなばわが宿の花をばひこり見てや志のばむ

(釋)一首の意は、もうこれ限というて、君が遠退いて、來ぬやうになつてしまつたならば、このわが宿の花をば、定めし自分ひこりて見て、一緒に見たりし君のことを、いろいろと思ひ出して、慕ふことであらうかとなり。

(評)人の、漸く冷淡に見ゆるより、行末を想像して、悲觀したるなり。看花滿眼涙、楚王其不言な

ど、樂しき追懷を催すべき花は、悲愛の情に對映して、なか／＼に苦悶を多からしむ。女の歌と見えて、哀にやさしく侍るかあと、古人のいへるは是なり。

以上四首一類なり。或は花につけ、或は花に對して、懷を叙べたり。

宗于朝臣

忘草かれもやするとつれもなき人のこゝろに霜はおかなむ

(釋)一首の意は、自分を忘れし人の心の忘草も、若しや枯れもして、又もこのやうに思うてくる、事もあらうかと思へば、あのつれない人の心へ、霜が置いてもらひたいソイとなり。

(評)忘草より霜を聯想して、心に置かなむと希へる、奇巧。

寛平の御時御屏風に歌かゝせ給ひける時よみてかきける、

そせいほうし

わすれ草なにをか種とおもひしはつれあき人の心なりけり

(釋)屏風に歌書かせ、屏風の色紙形などに、素性に命じて、歌を書かせられし時、素性が、新に詠みて書ける歌となり。

一首の意は、これまで、忘草といふ物は、何を種にして生ふることかと思つて居たは、不覺の至で、その種は、つい目の前の、自分につれない人の心であつたソイとなり。

(七三三)

(評)序文に「大和歌は、人の心を種として」といへると、同様の巧にして、これは、今始めて會得せし趣にいひなしたるが面白し。はの辭、意釋の如く見ざれば、その意を誤るべし。一字點晴の妙あり。調も流滑なり。小町集に、

忘草わが身につまむと思ひしは人のこゝろにおふるなりけり

類想の同型なるが、相比較して、遙に、この洗煉の作なるを知れ。

さて、詞書によれば、作者は、いみじき手かきなりけりと覺し。貫之などにさしつぎの伎倆なりけるにや。

三句、新撰和歌に、思ひしをこあり。

題あらす

秋の田のいねてふこともかけなくに何をうしとか人のかるらむ

(釋)○いね 稻に、去ねよの意をかけたなり。○こともかけなくに 詞も懸けぬにの意。○かる 離るに、刈るをかけたなり。

一首の意は、秋の田の稻は、刈つて物に掛けて乾すが、思ふ人の來られし時、自分が嫌うて、その秋田の稻といふやうに、去ねといふ詞をも掛けはせぬに、それにまゝ、何を愛いと思つてか、このやうに、あの人が遠退いて來ぬのであらうとなり。

(評)縁語の修飾、うるさき心地す。

新撰和歌に、二句、いねといふことも、下句、をらじとさどか人のいふらむとあり。

紀貫之

初雁のなきこそ渡れ世の中の人のこゝろのあきしうければ

(釋)○初雁の 初雁の如くの意。○あきし 飽きに、秋をかけたなり。しは強辭。

一首の意は、自分は、空を渡る初雁のやうに泣いてサ、月日を経つるツイ、その譯は、世の中の人の心に来る、飽きといふ秋がサ、憂いからサとなり。

(評)秋には、雁の鳴き渡れば取合せたり。世の中の人、例の一人をさしていへるなり、

よみ人あらす

あはれともうしとも物を思ふ時なごか涙のいとなかるらむ

(釋)○いとなかるらむ いとほ暇なり。或は、いとなくまでを一語として、忙しき意の形容詞ありとすへり。

一首の意は、人の、情ありて、あはれ嬉しと思ふ時も、人のつれなくて、憂いと思ふ時も、何故にかうも、涙が、暇なくこぼるゝことであらうぞとなり。

(評)何人も知道せる平凡の事實、只一個疑問の語を著けて、纔に詩情の搖曳するを覺ゆ。作者點化の術あり。

身をうしと思ふに消ぬぬ物なればかくても経ぬる世にこそありけれ

(釋)一首の意は、限なく、わが身を愛いと思ふのに、流石に命はえ消えぬ物なる故に、このやうに愛い身ながらも、やはりそれなりに、經て行けば行かる、世でサあつたソイとなり。

(評)思ふにまかせぬ命のつれなきを侘びたるなり。但説明的なり。

典侍藤原直子朝臣

蟹の刈る藻に住む虫のわれからごねをこそなかめ世をば恨みじ

(釋)○われからごね われから、秋成曰く、六帖には、別の題に出だせれば、その世には、人知りたる物なるべし、且、歌に「藻に住む虫の名を忘れつ」とよめるは、貝などの一種にて、破殻の義とも思はる、伊勢物語にも「われから身をも碎きつる哉」とよめり、こは、わが友、正のりが考なりといへり。大和本草には、藻にいでくる虫にて、細く長きものなりといひ、北邊隨筆には、藻につきたる貝にて、殻の一ひらなる物といひ、又景樹は、因幡わたりにて、海布に、小蝦の如きいささ、やかなる虫の付きたるをいふ、さるは、甲めきたる物のもぬけたる、或は破れたるさまなど、はかなげに見ゆめりといへり。いづれも、確る事は決し難し。さて、われからの名詞に、我からをかけたなり。

一首の意は、海士の刈る藻の中に住む、われからといふ虫の名のやうに、何事も、我から出かしたる事と了簡して、我一人、音を立ててサ泣かうソイ、つれない人を恨みはすまいぞとなり。

(評)われからに就いて、久保之取蛇尾にいふ、

顯註、八雲御抄、色葉和難、餘材抄、たしかならず。今試に僻案をいはず、仁徳紀に「故諺曰有海人耶、因已物以泣、是其緣也云々」。古今の歌は、これによりて詠めるならむ。海士の刈る藻に住む虫とは、かの調進の魚をいふ。われからごねをこそなかめとは、彼の諺に、おのが物から音泣くといへるが如し。かく見る時は、たしかなる證文ありて、われからごねは貝ぞあごいふ論なかるべし。云々。

調進の魚を虫とせることは、甚しき牽強にして、無論、意釋の項に解けるに従ふべし。初二句は序なり。三句以下は、諺に「有海人耶因已物以泣」の諺に據れるものなるべし。千秋も、この事をいへり。人のつれなきをも、皆わが不束なるよりと、ひとへにおのれを責めたる、他の同情を惹く所以なるべし。

いなば

あひ見ぬもうきもわが身の中から衣思ひまらずも解くる紐かな

(釋)○わが身の中から衣 我が身からの意に、唐衣をかけたなり。○紐 こゝは、唐衣の下裳の紐なり。

一首の意は、思ふ人に逢はれぬのも、その人のつらいのも、皆我が身からのことで、自分のやうなる者は、とても先の氣に入る譯は無いに、その人の思うてくる、知らせがましう、とてもく、合點のわるうまあ、解くる下紐なることよとなり。

(評)下紐の解くるは、人に戀ひらるゝ兆なる由は、戀「思ふこともこふとも逢はむものなれや云々」の條にいへり。しかも、類想の同型なり。彼は、一度も逢ひ見ざる趣、これは、逢ひ見しが他かれたる趣なるが差へるのみ。下紐の思ひ知らずといへる擬人、一ふしあり。二三のつゞきは、おだしからず。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

すがののたぐおん

つれなさを今はこひじご思へども心よわくもおつるなみだか

(釋)○涙か かは歎辭。

一首の意は、人のつれなさを思ひ知つて、今はもう戀ひ慕ひはすまいとたしなめども、こもすれば思ひ出して、さてもく、心弱くまわ、こぼるゝ涙なることよとなり。

(評)心に似ぬは涙なりけり、戀の眞諦、即ちこゝに存す。六帖の詠者不詳の歌に、戀ひしとはいはじと思ふにきのふけふ心よわくもおつる涙か

同想同型、いづれを先ごせむか、思ふに、或は、この歌の轉りて傳はれるものならむ。初句、新撰萬葉に、つれなさをとあり。

題あららず

伊勢

人知れず絶えなましかばわびつゝもなき名ぞとだにいはいはまし物を

(釋)一首の意は、二人の中が、世間の人に知られず、絶えてしまふであらうならば、絶ゆるはつらい事ながらも、せめて無い事ぞというて、浮名の立たぬやうになりともせうと思ふものを、はやもう、世間の人も知つて居れば、さうもいはれねば、絶えたるうへに浮名が立つて、さてもつらい事かなとなり。

(評)當然の結果として生じたる奔女の苦悶、悽愴の感なき能はず。

二句、六帖に、やみなましかばとあり。

よみ人あららず

それをだに思ふ事とてわが宿をみきこないひそ人のきかくに

(釋)○思ふ事とて 思ふ事としての意。○きかくに 聞くになり。くの延言はかくなり。

一首の意は、今他かれたるはつらい事であるが、そのうへに名が立つては、猶更つらい故、せめて名の立たぬやうにする、それをなりとも、私を思ふ事として、外の話の序にも、私の家を見たなど、決して云うて下さるな、事ありさうに、人が聞くによつてサとなり。

(七四〇)

(評)満足すべからざる事に満足して、思に着むと、哀を乞へるなり。宣長が、初二句を、人を深く思ふ時はその人の家をなりとも見たく思ふものなれどもといふ意に誤解して、部立のたがへるやうに論へるは、なかくなり。

あふ事のもはら絶えぬる時にこそ人の戀しきことも知りけれ

(釋)〇もはら 専らなり。

一首の意は、これまで、絶えくながらも、逢ふことのありし間は、待つといふ楽しみもまじつて、戀しさも、さ程で無かつたが、今かう、一向に絶えてしまつて、逢はれぬ時節になつたる時にサ、はじめて、人の、誠に戀しい事も思ひ知つたツイとなり。

(評)ひびこほりたるまでなり。

わびはつる時さへ物のかなしきはいつこを志のぶ涙なるらむ

(釋)〇まのぶ 慕ふ意。

一首の意は、かの人に見棄てられて、難儀しぬいたる時節にも、やはり忘れかねて、物悲しいのは、ごこを、かの人の取得として、戀しう思うて、流るゝ涙であるのであらうぞとなり。

(評)いつこをしのぶと、涙を怪しめるは、即ち心を怪しめるなり。身を怪しめるなり。あなもごかし。誠に愛着の念、その根深しといふべし。

後撰集に再出したるには「男の忘れ侍りければ」と詞書ありて、作者は伊勢なり。又、四五の句、新撰和歌には、いづれをまのぶ心とあり。

藤原興風

恨みても泣きてもいはむ方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして

(釋)一首の意は、恨んでも泣いても、この悲しさを、誰を相手にしていはうぞ、思ふ人は、最早絶えて、一向に逢ふことも無ければ、鏡へ映つて見ゆる自分の影で無くては、外に相手にして云はうやうが無いツイとあり。

(評)孤癡依るところなく、形影相吊す。この寂寞荒涼は、渾べて、人の無情に因縁す。下句、沈痛にして、嗟意永し。

以上三首、絶えて後、身をわびたるなり。

よみ人あらず

夕されば人なき床をうちはらび歎かむ爲ごなれるわが身か

(釋)〇夕されば 冬歌「夕されば衣手さむし云々」の條にいへり。

(七四一)

一首の意は、今は契も絶え果てて、来て寝る人もない床を、夕方になれば、以前の通り打拂うて、以前夕毎には人を待つとて、床の塵を拂うたる事を思ひ出しては歎かう爲に、生まれて来たる我が身あることかまあごあり。

(評)拙き運命をかこち、身をはかなみたる愚痴は、この没理想の誇張となり来る。不幸に愁に沈みては、苦勞する爲に、この世に生まれたるにやなど、よく人もいふ事なり。萬葉集十、
わすよりはわが玉床をうち拂ひ君といねすて獨かも寝む
を藍本として、更に勝れり。いづれも、婦人の作なるべし。

わたつみのわが身こす波立返り蟹のすむてふうらみつるかな

(釋)○わたつみのわが身こす波 我が身を越すわたつみの波といふことを、倒置していへり、○蟹のすむてふうらみつる 海士の住むてふ浦見つるに、恨みつるをかけたなり。

一首の意は、海の、人の身を打超すほどの大波が寄せて来て、海士の住む浦を見、浦を見しては 立返りくするやうに、わがこの身をさし越して、無い者にする人を、今更恨みても、その詮なき事ながら、又してもく恨みた 事よとなり。

(評)顯昭曰く、

我をおきて、先に人に逢ふを、わが身こす波こそへたるにや。末の松山(君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこすなり)

かといふ人あれど、その心見えず、云々。

これ諒に然るべし。なほ、戀三「あふ事のなきさにし寄る波なれば云々」の條を参照せよ。

あらを田をあらすき返し返しても人の心を見てこそやまめ

(釋)○あらを田を云々 荒れたる田を春すきかへす意なり。あらを田は荒小田なり。小は美稱、あらすき返しは、疎鋤返しなり。打聽に擧げたる或説に、小田は度々すき返し作る、初に鋤くをばあらすきとて、あらく鋤くなりとあり。今俗に「アラクリ」といへり。○返しても 返してなり。返せごもの意にあらず。もは歎辭。

一首の意は、荒田をあら鋤き返すやうに、今一應立反つてまわ、人の心を、とくと見届けてサ、いよく心が變つたといふことならば、あきらめて、戀ひ慕ふのも止めうワイとなり。

(評)この末練、この心長き、所謂「惚れた弱身」なるべし。初二句は、三句に、返してもといはむ序なり。結句、四音三音の組成なれば、調促りて、二句の長高なる序體にふさはず。六帖に「見てこそやまめ人の心」とあるに従ふべくや。想ふに、下なる誹諧歌に、なかき、
雲はれぬあさ間の山のおさましや人の心を見てこそやまめ

とあるに紛ひて、下句を誤れるものならし。なほ、六帖、又は、童蒙抄なる、

伊勢の海のちひろたく繩くり返し見てこそやまめ人の心

(七四四)

など、いづれも、その序詞を殊にするのみにて、全く同意なり。いづれか先に成れるものならむ。

初句、六帖に、あらしき田をこあり、新しき墾田の意なり。景樹は、これを宜しとして、二句を新鋤き返すの意に解きおし、さて、新田は、何邊も打こなすべければ、打返しくの序に置き方あるなりといへり。

ありそ海の濱のまさこと頼めしは忘るゝ事の數にぞありける

(釋)○ありそ海 荒磯海の義。○まさこと まは美稱、さとは砂の略。

一首の意は、海の濱の眞砂の數のやうに、讀んでも盡きぬ、數々の親切を思うて居るといひ立てて、自分を頼もしう思はせておいたる、その濱の眞砂の數は、案外にも、自分を忘るゝ事の多い、その數取でサあつたツイとなり。

(評)水火の對照、冷熱豹變の趣見えて、怨意深し。後撰集戀四、常磐にとたのめしことはまつほどの久しかるべき名にこそありけれども、この類想なり。

芦へより雲ゐをさしてゆく雁のいや遠さかるわが身かなしも

(釋)○ゆく雁の 行く雁の如くなり。

一首の意は、芦邊から空をさして飛んで行く雁の、段々遠くなるやうに、段々と思ふ人にかけて離れて、契の絶えて行く自分の身は悲しいツイまわさかり。

(評)三句までの序は、萬葉集十、

秋風にやまごびこゆる雁がねのこゑ遠さかる雲がくるらし

を轉用したるなり。初句は、いや遠さかるの意をたしかにせむとて、その地點を示したるならめど、異竟小刀細工なり。久方のと、枕詞などを据ゑたらむ方、やゝ優りぬべきを。

なぐれつゝもみづるよりも言の葉の心のあきにあふぞ佗しき

(釋)○心のあきに 飽きに、秋をかけたなり。

一首の意は、時雨が降りくして、木の葉の色が變つてゆく秋は、わびしいものであるが、それよりもまさつて、親切に云うて下されたる言の葉の變る、人の心の飽きといふ秋に逢ふのがサわびしいツイとなり。

(評)言の葉の混喩、心のあきのいひかけ、新撰万葉に、

言の葉をたのむべしやはあきくればいづれか色の變らざりける
とあるに似たり。さては、上なる、

(七四五)

わが袖にまだき時雨のふりぬるは君がこゝろにあきや來ぬらむ
今はとてわが身時雨にふりぬれば言の葉さへに移らひにけり
の二首を錯綜したらむが如し。各その條に論へるを參看せよ。

あき風のふきこふきぬる武藏野はなべて草葉の色かはりけり

(釋)○ふきこふき 吹きに吹くと同じ。

一首の意は、秋風の吹きに吹いたる武藏野は、流石に廣い野ながら、總体に皆、草の葉色が變つたワイといふ意にて、されば、飽きといふ秋風が、人の心に強く吹く時には、嘗て云はれたる言の葉の變るも、仕方が無いワイといふが、その餘意なり。

(評)顯昭は、この歌意を釋して、武藏野といひて、「一もこゆるに」の心あるなりといへり。こは、紫の一本ゆるに武藏野の草は皆からあはれとぞ見る

の意に據れりといへるにて、景樹も同心したれど、非なり。思ふに、武藏野といひ、なべてこいへるに拘泥して、この説をなせるならむ。これは、流石に廣き武藏野の草葉も、秋風に色の變らぬは、一つもなしといひ立てて、されば、さばかり頼めたる君の言の葉も、猶その定めには洩れ給はざりけりと、暗に詆りたるが手際なるなり。諷諭の作、おのづから、含蓄あり。四句、六帖に、なべて草木のとあり、

小町

あき風にあふたのみこそ悲しけれわがみ空しくありぬと思へば

(釋)○たのみ 田の實に、頼みをかく。田の實は稻をいふ。○わがみ身に、實をかけたなり。

一首の意は、秋の大風に遇ふ田の稻はサ、折角頼みにして置いたるわが實が入らずにままうと思へば、情けないワイ、それと同じやうに、人の心の秋風にあうて、我が身の頼みが、皆むだになつてままうたと思へばサ、悲しいワイとなり。

(評)例の口吻、この人には免れ難き癖なるべし。

平貞文

あき風のふきうらへがす葛の葉のうらみても猶うらめしき哉

(釋)○葛の葉の 葛はその葉廣ければ、風に翻りがちにて、裏を見するより、葛の葉の裏見とつつけ、さて、恨みとかけたなり。

一首の意は、思ふ人が、我を飽きて、裏反つたる恨は、秋風が吹き反す葛の葉の、裏を見るこいふやうに、恨を云うてもく、やはり、恨が晴れぬ位、さてもく、恨めしいことよとなり。

(評)初二句は、人の我を飽きて、契を渝へたる譬喩ながら、なほ葛の葉のこいひ續けて、うらみてこいひはむ序をかねたり。万葉集十二、

水莖の岡の葛葉をふきかへしおもしろ子らが見えぬ頃かも
の序も、同じ取材あるが、彼は、葛の葉の表面の隠るゝ方より見たるを、是は、その裏面のあ
らるゝ方より見て、描寫を順逆にきたり。作者が折角の新案、後人、猥に踏襲して、陳腐とな
しつるぞ、これも恨めしき事の一つならむ。うらの語の三疊、わざとの巧なるべし。
初二句、六帖に、秋風に吹反へさるゝとあるを宜しとすと、景樹はいへり。げに、この方、一
意到底の序体なれば、おのづから、たけ高く聞ゆべし。さばれ、作者の風體の多くより論ずれ
ば、猶本文によるべきか。

よみ人あらず

あきといへばよそにぞ聞きしあだ人の我をふるせる名にこそありけれ

(釋)あだ人 浮氣かる人なり。○我をふるせる 我を見棄てて、舊人となしたるをいふ。

一首の意は、これまでは、あきといへば、季節の名と心得て、餘所事のやうにサ、聞いて居つ
たワイ、處が、餘所事では無い、移り氣なる人の、自分を見棄てて、舊いものに去たる名、即
ち自分を飽いたといふ名でサあつたワイとなり。

(評)時節の秋にあひ、又も人の飽きにあへるより、取合せて巧みたるならむ。以上五首、秋に飽き
をよせて、恨みたる戀なり。かやうに秀句を基礎としたる構想は、詩としての本旨を誤れり。
屢見る時は唾棄すべく思はるゝも、蓋しこの故ならむ。

初句、打聽本に、秋てへばとあり。

○

わすらるゝ身をうち橋の中絶えて人も通はぬ年ぞへにける

又は、こなたかなたに人も通はず

(釋)○身をうち橋の 身を愛といふに、宇治橋をかけたなり。宇治橋のことは、戀四「さむしろに衣
片敷きこよひもや云々」の條に出でたり。

一首の意は、人に忘られて見棄てらるゝわが身は、愛いものであるが、その愛いといふ名の附
いたる宇治橋の中絶えて、人の通はぬやうに、中絶して使の人さへも通はぬ年がサ、何返も
經つたワイとあり。

(評)まこと、この歌詠める頃は、宇治橋の中絶えたるまゝに、年久しく經にけるなるべし。大化二
年に、道昭和尙の、始めて架設せしより、延喜の頃までは、二百三十餘年を経たり。この間、
必ず幾多の興廢あるべきなり。紀に所見なしとて、中絶えてを、橋の縁語に設けいへる事とせ
る前人の説は、太だ妥當ならず。
新撰和歌も、結句は、左註と同じ。

坂上これのり

あふ事をながらの橋のながらへてこひ渡るまに年ぞへにける

(釋)○ながらの橋 攝津國西生郡にありて、弘仁三年に、長柄川に架けたりし橋なり。長柄川は、即ち淀川なり。

(七五〇)

一首の意は、長柄の橋の名のやうに、生き長らへて、かの人に逢ふ事を、ひたすら戀ひ望んで居るうちに、はや何年もサ、意外に經つたソイとなり。

(評)假初の夜離と思ひて待ち戀ひけるうちに、年月の經たるを欺けるなり。長柄の橋のは、三句に、同音を反復せむ爲の序にて、こひ渡るは橋の縁語もていへるなり。初句は、直に四句へかけて心持べし。諸註逢ふ事を無といふに、長柄の橋をかけたなりとせるは、強言にちかし。

とものり

うきながらけぬる沫もなりなむながれてとだに頼まれぬ身は

(釋)○うき 浮きに、憂きをかけたり。○けぬる けは消えの約。○ながれて 流れてに、生ナガツ存への約なるながれてをかけたなり。

一首の意は、せめては長らへての末でなりとも添はれうといふ頼さへ無いこの身は、いつその事、水に浮きながら消えてしまふ沫ともなつてほしいソイ、憂き身ながらに死んでしまひたいと思ふからサとなり。

(評)ながれてより、水の沫を聯想して、憂き身のまゝに死ぬるを、浮きながら消ぬると轉義し、まかも、憂きといひかけたり。失戀の極、死を冀ふは、既に思索を脱して、情の高潮に達したるも

のなれば、狂熱の横溢して、語々活躍する所あるにあらずば、見るに足らじ。辭様巧緻と雖も、何をかせむ。

六帖に、二句、きえせぬ沫と、結句、頼まれなくにとあり。又、家集には、二句、消えぬる沫ととあり。

○

ながれては妹背の山のなかに落つる吉野の川のよしや世の中

(釋)○ながれ 流れに、長ナガツへをかけたなり。○妹背イモセの山 紀伊國那賀郡にあり。萬葉集に、「せの山にたゞに向へる妹の山」木の川のべの妹とせの山「並びをるかも妹と背の山」木の國の妹背の山に」など、數多見えたり。宣長曰く、妹山は、兄の山あるにつきて、只設けていへる名にて、まかいふ山あるにあらず、背の山のこと、たしかに詠めれど、妹山のこと、さして詠める歌見えす、今も背山村あれど、妹山は紛らはしくて、定かならずといへり。然れども、萬葉に、「木道キミチにこそ妹山ありといへ」と詠める、又は、上なる例どもを考へ合するに、全然詞のあやとのみもいひ難し。又、眞淵は「妹山は大和、勢山は紀の國にありて云々」といへり。これも、萬葉に「木の國の妹背の山」とあれば、従ふべからず。古くは、すべて、兄妹の間にも、夫婦の間にも、男を背、女をいもといへり。

一首の意は、川も流れては、妹山背山の中へ落つる吉野川と隔つるやうに、すべて、人間の

(七五一)

(七五二)

男女の中も、長らへて年久しうなれば、何時までも、元のやうに睦じくは無く、自然隔が出来るも、その筈のことかき、よしまよ、これが世の中の有様であるツイとなり。

(評)されば、心變れる人を恨むも、よき程にして置かむの餘意あり。その怨みて怒らず、從容追らざる、殆ど大人君子の襟度に類す。要するに、比興を以て立意の骨子とし、吉野の川のよしやと同音を疊みて、世の中と體言にいひ捨てたる風姿、これ、無限の含蓄餘韻あらしむる所以なり。渾雅莊重、格調、おのつから別裁に出づ。字句に、また一の弛漫なるなく、聲調流麗なり。四句、新撰和歌に、吉野の流のこあり。

古今和歌集卷第十六

哀傷歌

いもうとのみまかりける時よめる

小野のたかむら

泣く涙雨とふらなむわたり河水まさりなば歸りくるがに

(釋)哀傷歌は、萬葉集にはゆる挽歌なり。悼亡の作を収む。○いもうとの 小野氏系圖に據れば、篁が異腹の妹なり。○わたり河 三途川の事。三途とは、火途及途血途にて、即ち地獄餓鬼畜生の三惡趣なり。この惡趣を三大河に喩へていふこと、金光明經に見ゆ。偽經十王經には、死出の山の先なる大河にて、河中に三所の瀬ありといへり。さて、三瀬川とも詠めり。○がに 助辭なり。爲にと譯す。

一首の意は、このわが泣く涙よ、いつそ溢るゝならば、雨のやうに降つてもらひたいワイ、それで、冥土の三途河に、水が増るであるならば、渡りかけたる妹も、え渡らきに、再びこの世に立歸つてくるであらう爲にサとなり。

(評)一朝の暴雨に、動もすれば、川止の悲劇を演出せし時代は、「越すに越されぬ大井川」と詠ひき。

(七五三)

篤は、尋常一様の執袴者にあらず、屢外官に補任し、夙に行旅の艱苦を、つよさに嘗めたりき。即ちこを、當時弘通せし佛教思想の三途河に湊合して、涙の雨の川止めめに、亡者の渡りあへずして、立歸り來むことを熱望せり。これらの構想、到底奈良時代のものならず。また、明治時代以後のものならず。宛たる當代の寫真よ。殊に往時は、異腹の兄妹の相婚を禁せられざりしかば、篤、いたくこの妹君に懸想し、

中に行く吉野の川のあせなむ妹せの山を越えて見るべく

と詠めること、玉葉集に見えたり。骨肉の愛に加ふるに、特種の戀愛を以てす。血湧き、肉溶け、情熱火の如く燃えしならむを、端なく、香奩人去りて、玉堂の空しきに遭ふ。悲みて猶悲み、傷みて又傷む。泣く涙の滂沱たりしもうべ。蘇み返らむ事を切望せしもうべ。さては、徒に巧語を弄して、真情を失へるにあらざるを恐れ。又、雨をまで聯想せるに、涕涙の、千行を拭拂すれば、更に万行なる状見つべく、涙の溢るゝを降ると云へるは、雨の縁語もて修飾せるなり。

さきのおほきおほいまうち君を、白川のあたりにおくりける夜、

素性法師

血の涙落ちてぞたぎつ白川は君が世までの名にこそありけれ

(釋) さきのおほきおほいまうち君 太政大臣藤原良房の事ある由は、上にいへり。貞觀十四年九月二日薨す、山城國愛宕郡、後の愛宕の墓と申すが、この墓所にて、即ち白河なり。爲家抄には、今の法勝寺なりと見ゆ。大鏡にも、「白河にをさめ奉る日」とあり。おくりける夜は、葬送の夜なり。○血の涙 涙竭きては、血を流す本文あり。韓非子に「卞和抱其玉哭楚山下三日三夜、泣淚盡、繼之以血」。○白川 志賀山越の傍に、白川の流あり。この水の末流なり。一首の意は、この薨去の悲しさを泣く、拙僧の血の涙が、落ちて瀧つて流るゝ事よ、さては、この川水が、赤くなるべければ、この川の名を白河といふのは、薨去せられし良房公御在世の時かぎりの名でサあつたツイとなり。

(評) 立意誇張に過ぎて、殆ど妄想に類せり。紅涙、白川の色相上の照對は、やゝ奇警に似たれど、畢竟これ文字の洒落、平凡の作たるを免れ難くや。但、この皮想の色彩は、燦爛として、當時の人士の素人眼を眩せしめし趣、大鏡に見えたり。諸註、かくては、最早白川にあらずして赤川ありと、餘意をいひ添へたるは、何の要もなき道理をいひ詰めたるものにて、蛇足なり。

ほりかはのおほきおほいまうち君みまかりにける時に、ふかくさ山にをさめける後によみける、

僧都勝延

うつせみはからを見つゝも慰めつ深草の山けぶりだに立て

(釋)ほりかはの云々 藤原基經、京の堀河に第ありて、堀河の太政大臣と稱す。寛平三年正月十三日薨す。深草山は、山城國紀伊郡深草村にあり。稻荷山の尾續きの山なり。榮華物語には、木幡を、この公の墓所としたり。上田秋成の考に、木幡は、深草山のうしろにて、連絡したれば、深草山にと云へるが、即ち木幡山にやとあれど、餘に距離遠きが如し。何はまかれ、歌にも「深草の山」とあれば、この集の方たしかなからむ。○うつせみ 空蟬にて、蟬の蛻をいふ。但こゝは、單に蟬のことに用ゐたり。この語、古來現し身の轉じたるやうにいへど、全然別語と見む方、穩しかりぬべくや。○から 蛻あり。

一首の意は、蟬は名さへはかなげなる物なれど、其の遺したる蛻を見い／＼して、氣を慰めたワイ、然るに、基經公は、火葬に附して、その遺骸さへもこゝめぬが餘りなれば、せめて、その火葬の烟なりとも、残りて立てよ、この深草の山に、さらば、公の形見を思つて慰まうはサとなり。

(評)今は早、遺骸は勿論、茶毘の烟さへ消滅し去りて、形見としては、一物をもこゝめざるに感じ、形見の烟につけて、追慕の情を歌へるなり。上句は、下句の爲に設けたる比興の句ながら、蟬に蛻を見て慰む事、甚だその謂れなし。

六帖、又遍昭集に、下句、けふりだに立て深草の山とありて、四五の句轉倒せり。眞淵は、遍照集を杜撰として、本文を執りたれど、其の然る所以を説明せず。景樹、及び八田知紀は、こゝに左祖し、且知紀は、もこのまゝにては、理のみ聞えて、歎聲の響なしとまで論へり。景樹、

知紀等がいほゆる、まらべとは、如何なるものあるか知らねど、語碎け、節促れる句を以て結束せる本文の方、却りて、この歌姿にふさはしき自然の調なるべく覺ゆ。體言止めに詠め捨るつば、高渾雄壯なる歌體を要する時の業にこそ。

かむつけの峯雄

深草の野への櫻しこゝろあらばこゝしばかりは墨染に咲け

(釋)これも同時の詠なり。○深草の野へ 前に云へる、深草山の裾野をいふ。○櫻し しは強辭、漢詩に於ける只、或は止と同じ意味。○こゝろ 同情あり。○墨染 黒色なり。

一首の意は、總べて、草木は無情の物ながら、此度、基經公を葬送したる、この深草の野原の櫻よ、汝に思ひ遣りがあるならば、何等はともあれ、今年ばかりは、喪服の色の墨染に咲けよとなり。

(評)當時の喪服は、椽、鈍色など、皆、薄黒き色なりしなり。さて、花の頃は、公の忌口より、未だ五十日にも満たざる程なれば、御墓に詣づるかぎり、我れも人も、常の衣とは引換へて、墨染の袖なるに、墓邊の櫻の、例の如くに、花やかに咲き出でたらむは、心無しといはざるべしむや。故に、この悲みに同情を有たば、本來の色相を易へて、喪服の色に咲けと云へる、この没理想の要求は、感情の奔馳するまゝに、常識の範圍を逸したる結果にして、是れ即ち、詩境なり。人麻呂が「靡けこの山」といひ、業平が「峯も平になりなむ」といへる、亦、これに外

ならず。况や、作者は、この公の家人と思はるゝ由あれば、悲嘆の極、まか思ひ寄りけむも理りなり。されば、流石、無心の櫻も、この歌に感じて、黒色の花を着けしかば、今に、藤の森の二町ばかり南の地に、墨染の名稱を存せりとぞ。信僞は、深く辨するまでもなければ、この歌の神來の興は、げに、草木も感ずべくこそ。

六帖に、二句、櫻もどあり。かくては、意複雑に亘り、調後漫に流れ、却て妙からず。こゝは一切、他事をさしおきて、只管、櫻のうへにのみ就きて、一圖に彼れを無情ありとし、その同情あらむことを希へる單調の方、思ひ入りたる情の、強く聞ゆるにや。故に、景樹が、櫻もどあるを執したる説は采らず。

藤原敏行朝臣のみまかりける時に、詠みて、かの家に遣はしける、

紀 友 則

寐ても見ゆ寐でも見えけり大方はうつせみの世ぞ夢にはありける

(釋)藤原敏行朝臣のみまかりける時に云々 敏行は、延喜七年卒と、拾芥抄にあり。さては、同五年撰進のこの集に、この歌の載らむ事いかゝあらむ。或は、後に、加へたるものか。○うつせみ 例の現し身の意なり。

一首の意は、此度の御主人の御不幸に就いて思うて見れば、夢といふものは、睡つて居ても見

え、寐すに居ても見ゆるソイ、さすれば、總体、この人間の世がサ、はじめから夢であつたソイ、あゝ、敏行殿の事は、寐すに見たる夢のやうに存じますなり。

(評)身世を夢と観すること、莊子に、

夢飲酒者、且而哭泣、夢哭泣者、且而田獵、方其夢也、不知其夢也、夢之中又占其夢焉、覺後而知其夢也、且有覺而後知此其大夢也、丘也、與汝皆夢也。予謂汝夢亦夢也、

といひ、維摩經に、

是身如夢爲虛妄見、

又、金剛般若經に、

一切有爲法如夢幻泡影、

など云へる、虛無、或は、無常説に胚胎せり、この觀念、早く、奈良時代より感染して、延喜の頃は、社會一般の通想となりたれば、別に、作者の新案にもあらず。只、二句、や、奇警の語か、これ、三句以下に、うつせみの世は夢なる斷案を下さむ伏案なり。故に、初句は、主要の句にはあらずして、一往の道理のまゝにいひ添へ、對句を作りて、姿致を取れるのみ。即ち、春上、「春日野はけふはな焼きそ」の歌の下句、つまも籠れりといひて、更に我れも籠れりと歌ひ添へたると、同一の漸層法なるを知るべし。委しくは、同歌の條に説けるを参照せよ。二句、一本に見てけりあるはわろし。六帖、家集、顯本、みな本文の如し。

あひまれりける人の身まかりにければ

(七六〇)

紀貫之

夢こそいふべかりけれ世の中にうつゝあるものと思ひける哉

(釋) (うつゝ、現の義にて、實在なり。

一首の意は、この度の事に就いて、よく／＼思ひまはして見れば、世の中の事は、總体夢とサ、いふべきであつたワイ、然るを、今までは、世の中に、現實といふことのある物と思つて居た事よごあり。

(評) 昨日ありし人、今日は既に、他界の人となりぬ。これ、無常の甚しき實例ならずや。これ即ち夢といふべきならずや。今日までは、何しに現ある物と思ひて、等閑にのみ過ぎ來けむ。昨非今更に悔しまる。かく悔恨の情を甚しくいへるは、果敢なきの、夢といふべき所以を強めたるなり。

三句、六帖に、世の中をこあり。拾遺集に再出したるにも、まかありて、この方宜しきは勿論あれど、恐らくは、世の中にあるが、この集の正文ならむ。さるは、勅選集に重出の歌は、稀には不用意の杜撰もあれど、一字二字、傳誦の相違あるが爲に、わざと、采録せしも尠からずと見ゆれば、これも、その例の一なるべし。

あひまれりける人の身まかりにける時によめる

壬生忠岑

ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をも現とは見ず

(釋) 詞書、家集には「世の中常ならず心愛かりし頃」とあり。

一首の意は、睡り居るそのうちに見る夢ばかりを、夢と云はう事か、そればかりを夢とは云ひはすまい、何故といふに、そののみならず、總体、この無常なる果敢なき世の中をも、現實の事とは思はず、皆、夢と思ふワイとなり。

(評) 上なる友則の歌の初二句を敷衍したるやうなる歌なり。この三首、皆、同想同體の歌にして、友則やと勝れるに似たり。されど、今より評すれば、ひとしく、陳腐の謗は免れ難からむ。三句、六帖に、夢といふごあり。猶、本文の方よかるべし。

あねの身まかりける時によめる

瀬をせけば淵となりてもよごみけり別をとむるあがらみぞなき

(釋) 一首の意は、暫くも止まる事なしに、水の流れて行く川の淺瀬を、柵などを掛けて止むれば、淵になりてまゝ、水が暫くは止まつたワイ、然るに、死に行く人の別を止むる柵がサないワイごあり。

(評) 上句は比興にして、即ち逝く水を借り來りて、それよりも猶、果敢なき悲しきものは、死別を

(七六一)

る事を知りせしむ。これ、詩家の慣手段なり。別を止むる由ぞなきといふべきを、淵瀬の縁に寄せてしがらみぞなきと轉義したり。又、三句まで一氣にいひおろして詠め捨てたる、然るにといふ接續詞を用ゐずして、直に別を止むるといひ起せる、この緩急相極す節奏は、今の表情に、最も適切なる調を得たりとやいふべき。萬葉集卷二に、明日香皇女を悼みて、人丸が詠める歌、

(七六二)

あすか川まがらみかけてせかませば流るゝ水ものごにかあらし

に胚胎せるもの、如し。人丸のは婉曲にして、調も藤原宮時代の作としてはどにかく、今の眼より評すれば舒暢なるを、これは、意や、露骨に近く、調はた、急促なり。蓋し、哀傷悼亡の作は、あかがちに、露骨を厭はず、白樂天が、元稹を悼みて「龍門原上土、埋骨不埋名」と作れるを、却りて、手柄のやうにも、世にいはれたれば、まづ、意調相應の完作なるべし。家集の詞書には「相知りたる人の、すまひの使に、遠き國へ下るとて」とあり。一時の別を惜む作としては、餘に、哀傷に過ぐ。無論、この集の詞書に據るべきなり。又、二句、家集には、淵となりつゝとあり。これもわるし。ても、語調の深味あるに及かず。

藤原忠房が昔あひ知りて侍りける人のみまかりける時に、
ごぶらひに遣はすとてよめる、

閑院

さきたたぬ悔の八千たび悲しきは流るゝ水のかへりこぬあり

(釋)昔あひしりて侍りける人 忠房が、以前、夫婦の語らひせし人なり。○さきたたぬ悔の 失せにし人に先立たぬ悔しみがの意。○八千たび 八千は多數を意味するのみ。幾度といはむに同じ。○水の 水の如くの意なり。

一首の意は、先立たずして、あとに取残されたる悔しさが、繰り返しくて悲しいのは、何故かといふに、流れて逝く水のやうに、死に行きし人が、二度と、跡へ戻つて來ぬのであるワイとなり。

(評)忠房の許に、吊意をいひ入れむとて、この歌を贈れるれば、即ち、貴方の御心中は、かやうの御愁傷と御察し申すとの餘意を含めたるなり。かく、當事者の胸臆を付度して、悲傷の意を叙するは、深く、同情をその人に寄せたる所以にして、吊慰の意、おのづから、その中にあり。これを、諸註ともに、作者自身が、この死者に先立たぬ事を悔めるやうに説き做せるは、何事ぞ。不當も亦甚し。又、景樹が、

こは、「後悔不立前、流水不還源」と云へる本文に付いて詠めるにて、今は、所詮先立たぬ悔のみ、千たび百たび打反して悲しきは、その詮なき事、喩へば、流るゝ水の、いかにすとも、其の本に還り來ぬが如しとなり。もと、其の心離れたる古語の二句を取合せて、まひて、一首の趣を立てたる歌なれば、甚だ聞え難し。

(七六三)

といへり。この準據は、顯昭も既に云へる事あれど、あながちに拘泥するにも及ばじ。又、その解釋も、先だたぬ悔を八千九百悲しむはとあらばともかく、悲しきはにては、適切ならず。この差別たしかならざるは、精しからずとやいはむ。

諸本いづれも、作者の名、閑院とのみありて、前後の書式に違へる、疑ふべし。古今集目錄には閑院女五宮とあり。女王なる故に、まか書けるか。猶考ふるに、この女王は、天武帝五世の王にして、清和帝の貞觀元年十月に、八十有餘にして薨せられしに、藤原忠房は、貫之の朋友にして、宇多帝の寛平五年に、始めて、播磨少掾となり、醍醐帝の御代を盛りとして、延長六年に卒したりき。いたく、官途沈淪の人と見て、假に、寛平五年を四十代と定めて逆算すれば、女王の薨去せられし貞觀元年には、纔に六歳なるをや。さては、詞書の趣に打合はず。か、れば、作者は、閑院の女王にはあらざる事決し。又、閑院の稱ある人、是れかれあれど、皆、忠房の時代に打合はず。依りて思ふに、この歌は、前首と同じく、忠岑の作か。然らずんば、詠み人まらずの作ならむ。

紀友則が身まかりにける時よめる

つらゆき

あす知らぬわが身とおもへごくれぬまのけふは人こそ悲しかりけれ

(釋)一首の意は、時の間もあてにならぬ世の習にて、今日はかうして居ても、明日は又、どうなる

事やら知らぬ我が身ぞと思ひはすれど、まだ暮れて明日にならぬ間の今日のうちは、わが身のあるまゝに、死んだ人がサ、悲しう思はれたワイとなり。

(評)例の佛教思想の歌あり。昨日までは、かゝらむとは思ひがけざりし友則の、今日は早、隔世の人となりしにつけて、わが、明日の命も計り難き有待の身なるを觀す。然れども、さし當りては、猶、人の上の悲まるゝは、これ、意智の二者が、感情を抑制しあへざる結果にして、即ち、友則の死を悼む友情の、一方ならぬ態見はれ、覺えず、一掬同情の涙を墮さしむ。命あるうちはといふべきを、暮れぬまの今日は、と轉義して、上のあすとあるに對照せしめ、又、わが、人などを對照せしめたる、措辭工にして緻。

拾遺集、及び、六帖、家集等に、二句、命なれどもとあり。又、結句、家集には、あはれなりけれとあり。

たゞみね

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだに戀しき物を

(釋)○時しもあれ 時しもこそあれのこと。を省けるなり。○ある 生存の意。

一首の意は、一体、物には時節がサあるワイ、それに何ぞや、取分けて、秋の時分に、人の死別すべき事であらうか、いや死別すべき事では無い、秋はたゞさへ物悲しい時節とて、生きて居る人を見るにさへ、戀しう思はるゝ物をサ、死別に逢うては、悲しさに堪へらるゝものでは無

いワイとなり。

(七六六)

(評) 秋を悲むことは、文選にも、白氏文集にも見え、わが國人も、夙くよりまか思ひたりけむ。刹へ、死別の悲劇を添へたる、慘に過ぐるものあるを啣てるは、紛々落葉那堪_ニ秋色之摧、渺々晨星竟逐_ニ流光_一而逝、の儻なり。機嫌をえらばざる死別に對して、如何なる無勘辨ぞ、秋はこれ、その時ならずと喝道せるは、既に理趣を脱して、詩境に入れるものなり。六帖に「時しまれ秋やは人に別るべきさるは夜寒になれる頃しも」とあるは、この下句の、他のご紛れて、一つになりたるものならむ。

母がおもひにてよめる

凡河内躬恒

神無月時雨にぬるゝもみち葉はたゞわび人のたもとなりけり

(釋) 母がおもひ 喪を、古は思と云へり。○わび人 難儀に逢へる人をいふ。

一首の意は、この十月の時雨に濡るゝ紅葉の葉は、只もう、母親に離れて、難儀の目を見て泣いて居る者の袖であつたワイ、あの赤くて濡れて居る所がサとなり。

(評) 例の血涙の故事を襲へるにて、涙の爲に濡れ渡りて、袂は紅色に變じたりと誇張して、時雨の紅葉に混喩したり。浮誇、實に遠かれるを憾とす。後撰集秋下、から衣たつ田の山のもみち葉は物おもふ人のたもとなりけり

も、全くこの等類なり。

父がおもひにてよめる

たゞみね

藤ころもはつるゝ糸はわび人のなみたの玉の緒とぞなりぬる

(釋) ○藤ころも 喪服をいふ。藤の纖維を以て織りたる疎布にて、賤者の服とし、又、貴人も、喪中には鮮美の衣を憚るより、これを喪服としたりき。後には、物柄の如何に拘らず、喪服の稱となれり。○はつるゝ糸 解るゝ糸なり。藤布は、箴の疎き、よみの間遠なる物なれば、その糸解れ易し。

一首の意は、今喪服に着て居る、この藤衣のはつるゝ糸は、父親に別れて、難儀して居る者の悲しさにこぼす涙の玉を、珠數繋ぎにする緒とサなつたワイとなり。

(評) 藤衣の糸のはつれに、たまゝ、涙のこぼれかゝれるを見て詠めるにや。夙く涙を玉と觀じ來りたれば、糸には、貫くといふ聯想の起るは、この時代に當然の慣習なりき。この類想、枚舉に違わらず。織巧。

三句、拾遺集哀傷部に「服ぬぎ侍るとて」と詞書して、詠人不知にて、再出したるにも、貫之集にも、君こふるとあり。又、拾遺集には、結句、緒とやなるらむとあり。

おもひに侍りける年の秋山寺へまかりける道にてよめる

つらゆき

(七六七)

朝露のおく手の山田かりそめにうき世の中をおもひけるかな

(七六八)

(釋)○朝露のおく手の山田 朝露の置くに、遅手オクテをかけたなり。遅手の山田は、晩獲の稻を植ゑたる山縣の田をいふ。○かりそめに 荷且カヨソメになり。山田を刈るにいひかけたなり。

一首の意は、あの朝露の置く、遅手の山田の稻を刈るといふやうに、假初に只うかくと、この愛い世の中を、さまでも思はず、今までは思うて居た事よとなり。

(評)この思に中りてこそ、身にまみて、愛き世の中といふことを悟りたれと云へる無常觀なり。上句の序は、山寺へ慕參の途上に於ける實景を應用したり。初二句のいひかけ、家集に「朝露のおく手の稻はこいふもありて、作者の常套と見ゆ。二句、一本に、おくての稻葉とある、あしくもあらねど、強ひていへば、葉の字餘り物なり。又、初句、六帖に、白露のさあり。

おもひに侍りける人とぶらひにまかりてよめる

たゞみね

墨染の君がたもごは雲なれやたえずなみだの雨とのみ降る

(釋)とぶらひ 訪問なり。見舞なり。

一首の意は、貴方の着て御出なさるゝ墨染の黒い衣の袖は、雨を降らす雲であればかして、絶えず、涙が雨のやうに、ひたすら降るツイとなり。

(評)涙を雨に比喻し、その縁にて、こぼるゝことを降ると轉義し、さて、雨雲と喪服の黒色とを聯想して、袂を雲と假喻したり。拾遺集哀傷部に、詠人不知「墨染の衣の袖は雲なれや涙の雨のたえず降るらむ」とあるは、この詠れるものならむ。

女のおやの思にて、山寺に侍りけるを、ある人のとぶらひつかはせりければ、かへり事によめる、

よみ人志らず

あしひきの山へに今はすみ染のころもの袖のひる時もなし

(釋)女のおやの云々 女は妻なり。この詠者が、妻の親の喪に中りて、山寺に籠り居たるを、或人の、使を以て見舞ひくれければ、返事に詠めりとなり。○今はすみ染の衣 今は住むといふに、墨染の衣をかけたなり、住み初むとまでいへるにあらず。墨染の衣は、例の喪服なり。

一首の意は、私は御聞及びの通り、かやうの山邊に、もうはや住み付いて、亡人の思に泣き暮して、服の墨染の衣の袖の乾く時も無いのでありますツイとなり。

(評)近況報告的の作に近く、平凡を免れ難くや。

諒闇の年池のほとりの花を見てよめる

(七六九)

篁朝臣

水の面にあづく花のいろさやかにも君がみ影のおもほゆる哉

(釋)諒闇は、履中紀に、ミモノオモヒと訓せり。天子崩御ありて、國中の上下、悉く喪に居る稱なり。わが古制には、十三が月間とぞ。〇あづく 沈み漬くの義。〇さやか 鮮明、明亮などいふ意。〇み影 御面影なり。

一首の意は、あの池の水の面に漬つて居る花の色の、いかにも鮮やかなるやうに、あさやかにまさくと、崩御あらせられし先帝の御面影が、思ひ浮べらるゝ事よとあり。

(評)初二句は、さやかにもといはむ序なり。これを、めでたき花の色を、龍顔に思ひ擬へたりとするは、鑿なるべし。諸註皆、嘉祥三年三月廿一日に崩御せられし仁明帝の諒闇中としたり。景樹も、これに従ひて、猶曰く、詞書に、「諒闇の年」と緩びたるを見れば、必ず櫻の時とも思はれず、この頃、櫻は櫻とありて、たゞ花とのみあるは、諸木の花なり云々といへり。さては、あながち仁明帝の諒闇にも限らざるべきか。事情を揣摩するに、卻て承和七年三月に崩御ありし淳和上皇の諒闇や打合ひたらむ。時に、篁流されて隱岐にあり。その四月に召し還されて、後本位に復されき。始めて、再び西院の御庭を立馴らしけむも、寵遇あらせられし上皇は、既にましまさず、空しく池邊の花木の榮ゆるを見て、この御池に御遊ぶとせさせ給ひし折の御面影を憶びまつれるならむ。されば、序詞は、當前の景物にて、景樹が、無心の序と解したるは、

非からむ。

深草のみかごの御國忌の日よめる

文屋やすひで

草深きかすみの谷に影隠して日くれし今日にやはあらぬ

(釋)深草のみかごは、仁明帝を申す。山城國紀伊郡深草陵に葬め奉りければなり。御國忌は、ミコキと訓む。天皇崩御の御忌日をいふ。御忌日は、嘉祥三年三月二十一日なり。御年四十一。

一首の意は、盛に照る日が、深き霞に隠れて暗くなりたるやうに、未だ御盛の御年にして、俄に崩御遊ばされ、草の深い深草山の霞の谷へ葬り奉つた其の日は、丁度去年の今日では無いか、いや今日ではあるワイとあり。

(評)悲みに取紛れて、月日の経つをも覚えざりし間に、早くも御一周忌の今日に逢へるを驚嘆えたるなり。蓋し、この日に諒闇は果てて、皆人、常の態に復する時なれば、特に感慨の深かるなり。草深き霞の谷といへるに、折ふし三月にて、霞の深く立てる深草山を暗喻したり。日を天子に喻ふことは、古來の常套なるも、てる日のくれしといひて、未だ寶算の御盛に崩れ給へ山をも思はせたる、巧緻といふべし。例のこの作者の口吻。

深草のみかごの御時に、藏人の頭にて、よるひるなれ仕うまつりけるを、諒闇になりにつれば、更に世にもまじらずして、

比叡の山にのぼりて、かしらおろしてけり、その又の年、みな人御ぶくぬぎて、あるはかうぶりたまはりなご、よろこびけるを聞きてよめる、

僧正遍照

みな人は花のころもになりぬなり苔の袂よかわきだにせよ

(釋)藏人頭は、藏人所の長官あり。藏人所は、嵯峨帝の朝に、始めて置かれ、類聚國史に「弘仁元年三月十日、始置藏人所、令侍殿上、掌機密文書及諸訴」とあり。比叡の山にのぼり云々は、比叡山に上り、延暦寺にして剃髪せしをいふ。御ぶくぬぎては、諒闇の間の喪服を脱ぐをいふ。かうぶりたまはりは、位階を賜はるをいふ。○苔の袂 蘿薜の衣なり。隠者の服をいふ。故に、僧衣に通はせ用ゐる。

一首の意は、世間の人は、皆もはや、御服をぬぎ換へて、花やかなる衣になつてまきうたワイ、ひとり自分ば、花の衣どころか、未だに涙を溢して泣いてのみ居れば、せめて、この涙に濡れたる苔の衣の袖よ、乾きなりともまて呉れよとあり。

(評)藏人の頭は、殿上の貫首として、威勢並び無かりき。枕草子に、めでたき物の中に、藏人をいふに「うへの、近く仕はせ給ふさまなど、見るには嫉くこそ覺ゆれ」と見えたり。今の大臣に對する秘書官の如き關係なれば、天子の親昵を旨とするが故に、一旦崩御に際するや、大概辞任交代する定めなりき。特に作者良岑宗貞が、藏人頭として、仁明帝の優渥なる寵遇を得たり

し趣は、大和物語などにも見えたれば、げに諒闇にあひては、世にも人にも交らはじと思ひなりけむかし。况や、好色者の名を取りしほどの、情に脆き性質は、この大打撃を受けては、暫時も冷靜なる能はず、三十五歳といふ年の盛を、天台座主圓仁に就き、出家得道したりしは、あたらしといふもおろかなり。曉に星を載いては花を摘み、夕に月を踏みては闕伽を汲む。難行苦行も、みな是れ、君の御菩提の爲と、偏に戀ひ聞ゆるうちに、たま／＼事の便に、都を聞けば、今は諒闇果てたりとて、皆人は、鈍色の衣を争ひ脱ぎて、位官昇進、新恩に浴しつゝ、悦びあへるさま、全然先朝の舊恩を忘れたらむやうなるに慨して、露けき苔の袂を取出でて、その輕薄を驚かましものならむ。皆人の色ある花の衣に、わが露けき苔の衣を對照せしめたる、この間の消息を審にするに足るべし。大和物語にも、仁明帝の御大葬の夜、少將宗貞の、跡を晦して失せにけることをいひて、

御はてになりて、御服ぬぎに、よろづの殿上人、河原に出でたるに、童のやうなるなむ、柏葉に書きたる文をもて來たる。取りて見れば、(こゝに本文の)とあり。見れば、この良少將の手に見なしつ。いづらといひて、持て來し人を、世界に覓むれどなし。法師になりたるべしとは、これにてなむ、皆人知りにける。云々。

とあるは、例の作話あるべけれど、誠に如上の意を得て書けるにやと覺し。猶思ふに、この皆人は、おもに、わが主管きたりし藏人所の下輩にして、藤衣を脱ぎ捨てて悦ばへる五位、或は五位に叙爵して、玄たり顔なる六位の藏人等を指ましあらむ。さてあむ、さし當てたるどころ

確かなれば、汎然と歸着するところなきよりはをかしかりぬべき。悲哀沈痛、滿紙をして涙ならしむ。四五句のはてに疊用せるよの辞、この情趣を助けて、大に力あり。

(七七四)

河原のおほいまうち君のみまかりての秋、かの家のあたりをまかりけるに、紅葉の色、まだ深くもならざりけるを見て、かの家によみて入れたりける、

近院右のおほいまうち君

うちつけに寂しくもあるかもみち葉も主あき宿は色なかりけり

(釋)河原のおほいまうち君は、河原左大臣源融公をいふ。河原の下、左の二字脱けたるならむ。上にはあり。この公の薨去は、寛平七年八月廿五日なり。かの家に云々は、かの公の河原院の家のうちの人に、歌を詠みて遣れるなり。○うちつけ 卒爾の意。○あるか かは嘆辭、

一首の意は、主人の歿くなられたるこの院に來て見れば、さし當つて、俄に寂しくもある事よ、それも其の筈、見事ある庭の紅葉さへも、主人の無い宿は、流石に色が無かつたワイとなり。(評)嶋好む大臣既に仙し去りて、纔に月餘、撫電の烟早く絶え、遺愛の楓樹、誰が爲にか紅なる。河原院の今昔を思ひては、何人か、この感愴を起さざらむ。况や、作者源能有公は、次席の大臣として、常に院主に昵び、院中に立入らけれむをや。三句は、色ある紅葉さへもの意に、結局

に、反視したり。軽く看過すべからず。この一ふし、即ちこの歌の生命なり。三句、一本に、もみち葉のこあるはわろし。

藤原たかつねの朝臣のみまかりての又の年の夏、郭公の鳴きけるを聞きてよめる、
つらゆ

ほととぎすけさ鳴く聲に驚けば君が別れし時にぞありける

(釋)藤原たかつね 季吟の抄に、内藏頭左中辨右兵衛督正四位下、寛平五年五月十九日卒と見えたり。

一首の意は、今朝時鳥の啼く聲に驚いて、目が覺めて、つくづく思うて見れば、月日の經つは早いものよ、今が、去年君が死に別れて往かれたる時節でサ、あつたワイとあり。

(評)景によりて情を起し、幾聲の杜鵑に、故人の別哀を聯想し來る。故人や、逝いて返らず、杜鵑や、時節を忘れずして、又去年の舊聲に啼く。兩々對映して、一段の感愴あるが如し。四句、一本、君に別れしとある、聞えたれど、本文の、故人をまとして、君がといへるには劣れり。

櫻を植ゑてありけるに、やうやく花咲きぬべき時に、かの植ゑける人、身まかりにければ、その花を見てよめる、

きのもちゆ

(七七五)